共に自然神教に屬する人々なり。其他ジョン・アルブスノット、(小スウキフトと稱せられたり)リチャード・ベントレー、ボリンクブローク、ジョゼフ・バットラーなどありき。

第三章　ジョンソン時代の散文

ジョンソン博士

ジョンソン時代は之れをポープ時代に比すれば趣味多く從つて注目すべき事件少からず。當時の文學界の趨勢を觀るに、社會は最早尚古派の形式的文學に甘んずること能はず、漸やく自由溌溂なる活動を欲するに至れり。されども茲に有力なる暗流を抑へて、暫らくは依然として尚古主義を保持せしものは文界最後の帝王と稱せらるゝ博士ジョンソンの力によれり。彼は約五十年間其保守的尚古主義と雄大なる品性とによりて文學社會の牛耳となり、能く英國人の長所と短所とを自ら代表せり。スウキフトの性格たる等しく偉大なりしと雖、其の憎人主義の上に立てる觀念は決して人の心服する所とならざりき。然るにジョンソンに至りては表面粗暴なりしも、其の眞情を叩けば同情愛憐の心に富み、人道のためには如何なることも辭せざらんことを期せり。殊に一生を通じて表はれたる謹嚴高潔なる行動と貧窮困厄に對して益々奮ふ鐵石心とは一世の摸範となり、永く人の欽仰して措かざる所なりき。斯くの如く彼は單に一文士にあらずして、社會的偉人なりき。彼が時の文學倶樂部に出入し、大杯の珈琲を傾けつゝ、多數の文學者を見下ろして放言談論せしことは、決して見逃がす能はざることなり。彼が談笑の間に放言批評せしことは悉く新聞紙上に載せられ、人は隨喜渇仰して其說に謹聽せり。蓋し彼の人格は筆よりも一層有力なりしなり。

傳

サミユエル・ジョンソンは千七百九年リッチフィールドの一書肆の家に生れき。牛津大學に入りて令名ありしも、家計裕ならざりしを以て中途退學し、後ち故郷に歸りて育英の業に從事せし傍ら著述に着手しぬ。此頃ポーター夫人とて已れよりも二倍も年長なる寡夫人と結婚せしが、身の困厄に耐へず高弟ガーリック(後ち有名なる俳優となりし人)と共に倫敦に上りぬ。此行素より成算あるにあらず、赤手空拳を以て已が運命を開拓せんとせしものなれば、窮迫前日に勝り、或

は書肆に雇はれ、或は議會の報告顧問となりて、僅かに口を糊するを得たりしが、其頃『倫敦』なる一篇の諷刺詩を出し、次に『アイレン』なる悲劇によりて多少の潤ひを得たり。翌年『ラムブラー』なる雜誌を發刊して二年間繼續し、後ち『アイドラー』を發行したり。彼は日頃完全なる英國字書を編輯せんものと希望し、其計劃をさ〳〵怠らざりしが、八年の刻苦經營の後ち二卷の大字書を完成して江湖に示めせり。時に千七百五十五年。是より彼が文名大に高く、牛津大學は殊に其功績を認めてマスター・オブ・アーツの學位を送れり。千七百六十二年彼は皇室より年金三百磅を給はり、こゝに於て二十餘年の苦鬪始めて安すきを得たり。其後二年にして文學倶樂部を設立し、知名の文士を集めて文學、宗教、政治及び諸般の問題を捉へ來りて特意の雄辯を揮ひ、一世の精神的指導者となりぬ。此時より彼は筆の人たるよりは舌の人となりぬ。彼が最後の作は『詩人傳』にして彼れ一流の道德觀より見たる評傳なり。文藻見るべきものありと雖、評論多く當を失せり。彼は病のために健康常に勝れざりしが晩年甚しく衰弱し千七百八十四年晏然として永眠せり。

『英國大字書』

彼の體文

ヒューム

ジョンソンの文體はトマス・ブラオンに學びたる尙古派に屬せり。されどブラオンの莊重あれども概して其典雅なく、やゝもすれば誇張矯飾に流れぬ。要するに彼が文體の短所とも見るべきは拉典語の聲調を過用せしこと、對句を濫用せしこと及び謹嚴に失せしことなるべし。ゴールドスミッス嘗つて彼の文を評して曰く「君は小魚の私語を敘するに長鯨の吼ゆるが如くなす」と。彼が評論の多く當を失せし所以のものは其思想餘りに保守的にして何事も道德的方面のみより解釋し去らんとせしが故なり。されば、やゝもすれば道學先生の狹隘淺膚に陷り、詩興も情感も悉く其犧牲に供せり。されど彼れに於て最も重しとなす所は前にも述べし如く、著作にあらず、文體にあらず、批評眼にもあらず、實に古今に卓越したる淸廉剛毅なる性格にありしなり。

當時歷史家として名をなせしもの三人あり。ヒューム、ロバートソン、キッボンこれなり。ヒュームは『英國史』を、ロバートソンは『蘇國史』を、キッボンは『羅馬衰亡史』をものして、いづれも史界の光明となれり。

ダヴィッド・ヒューム（一七一一―一七七六）はエデンボローに生れ懷疑論者と

して、實利主義の主唱者として、又歴史家として名あり。始めエデンボロー大學に於いて法律を學びしも、後ち哲學思索のことに心を用ひたり。其の著書には『人性論』（ヒューマン・ネーチュー）『道德哲學に關する論文集』『道德原理』（モーラルス）『英國史』あり。其懐疑哲學はロックの經驗派に出て將來カントの哲學系統を建つる基礎を供したり。彼が歴史家としての價値は『英國史』にあり。此書は一時、彼の懐抱せる哲學觀のために痛く攻擊せられしも、年を經るに從ひて漸やく其眞價を認められき。此書は六卷よりなり、英蘇兩國の合併に筆を起して當代に及べり。現今史學の進歩したる時代より見れば批難すべき缺點も多けれども當時にありては有數の書なりき。其文體平明にして暢達し、毫も苦心の痕跡を止めず。

ロバートソン

ウヰリアム・ロバートソン（一七二一―一七九三）もヒュームと功過を同ふせしも、決して其摸倣者にあらざりき。エデンボロー大學に學び、後ち教職に就きしが、千七百五十八年『蘇國史』を著はし、名聲俄かに高く、同大學の總長に擧げられ、又蘇國史官に任ぜられたり。彼の著書は他に『チャールス第五世』『亞米利加史』あり。『チャールス第五世』は實にカーライルをして歴史を好むに至らしめし最初の書なりと云ふ。彼が文はヒュームと同じく叙事明快にして光彩あれども、正確なる史實を傳ふるものとしては不完全なる所あり。

ギッボン

ヒューム及びロバートソンは歴史文學に新紀元を開きしと雖、未だ完きを得ず、ギッボンを俟つて始めて完全なる歴史文學を見たり。エドワード・ギッボンは千七百三十七年倫敦附近に生れき。其家は名門の末流なりしを以て幼より善良なる教育を受け、十五才にして牛津大學に入りぬ。少時より學を好むこと甚しかりしが大學に入るや堂々たる教授をも歴する學識を具へしと云ふ。十四ヶ月の後大學を辭し故ありて瑞西國に行き、留まること五年の後歸國して身を軍籍に投じぬ。免役の後再び歐洲漫遊の途に上りて羅馬に至れり。一日カピトルの上に立ち古城廢趾を吊しつゝありしに不圖彼が心に浮びしは、羅馬衰亡の事跡を傳へんとの企圖なりき。これより直ちに歸國し、其大著述の史料の蒐集に着手しぬ。かくて千七百七十六年『羅馬衰亡史』第一卷出て、一般社會は狂喜して之れを歡迎せしが、宗教家は、書中基督教を非難せし記事ありしを以て甚しく激昂せり。千七百八十一年第二、三卷を公にせし後ち、再び瑞西に行き、風光明眉な

彼の偉業

るゼネヴァ湖畔に退き、猶ほ續稿に從事し千七百八十七年絶大の偉業漸やく完成せしを以て倫敦に歸へり、翌年之れを出版せり。これより後の事は多く記すべきものなし。デイヴエルダンなる友人の死してより頓みに寂寥を嘆じ、千七百九十四年病を得て其跡を追ひぬ。彼中年頃より身體いたく肥滿し身動きも不自由となりしが、嘗つて一婦人に會釋せんとて身を屈せしに起つこと能はず、人の來りて助くる迄は横臥せりとぞ。

ギッボンは史界に一新時期を開きたる此大著述を成さんがためには歐洲各國の言語は更らにも云はず、波斯語、亞剌比亞語を始めとして其他の東洋語を研究し、親しくこれらの言語にて記されたる古書、記錄を精讀せり。彼は材料蒐集のために十數年を費やし、之れを整頓、記述するに又十數年を費やしゝが、後年幾多の評家の嚴密なる審査を受けしも、一つの過誤だになきことを確められぬ。さればフリーマンは揚言して曰く「若し他の著書を讀むならば、ギッボンは先づ必らず之を讀まざる可らず。近世の考鑒が排棄せず又今後もさることなかるべき十八世紀の史家は獨り彼あるのみ」と。彼の文は莊重なる無韻律もて書かれた

ボスウエル

る叙事詩の如し。曲調あり、抑揚あり、華麗なる對句法あり、一起一伏其序にかなひ、一動一靜其處を誤らず。又省略法に長じ、一言に千鈞の重みを置き、一句にて全體の記事を生動せしむることあり。彼は云ふべきことを知ると共に云ふ可らざることを知れり。思ふに尙古文の最も秀逸雄渾なるものを求むれば實に彼の文なるべし。

傳記文學に出色の文字を殘したるものはジエームス・ボスウエルなり。其著『ジョンソン傳』は殆んど前にも後にもなき名篇なり。彼はエデンボローに生れ、千七百六十三年倫敦に來り、偶〻ジョンソンに邂逅せしより、深く其人物を慕ひて其傍を離れず、一舉手一投足の微に至るまで詳細綿密に記錄して遂に有名なる傳記をものせり。此書は此偉人の日常を知るに便なると共に、兼ねて十八世紀文壇の狀勢を傳へて髣髴たらしむ。文章又平淡にして周緻、ジョンソンの誇張なるに似ざりき。

バーク

エドマンド・バーク（一七二九—一七九七）は政治家として又文章家として有名なる人物なり。彼が當代に於ける位地は文學者としてよりも寧ろ政論家とし

て一層の重きをなせり。當時佛國革命の風雲急にして其餘波遠く歐洲に傳はり、英國の人心亦洶々として、事態甚た容易ならざらんとせしが獨り、バークは筆舌を以て極力此革命熱に反對せしかば遂に事なきを得たり。彼はダブリンに生れて、ダブリン大學に學びし後ち倫敦に來り、法律研究に從事せり。千七百五十七年『莊美觀念起原論』を公にして世の注意を惹き、次に『佛蘭西革命論』(一七九〇)を著はし、一年間にして版を重ぬること十一回に及べり。此書の感化の甚大なりしこと察するに難らず。彼が文體は演說體とも稱すべきものにして巧妙なる比喩湧くが如く、又彩雲の如き文辭の間に万丈の氣焔を藏せり。彼は愛蘭土人に特有なる一種人を惹くチャームを備へたると共に、剛健なる古武士の如き氣象を兼ねたるを以て常に人の愛敬する所となれり。これ當時彼がジョンソンに次いで有力なる社會の指導者となりし所以なりき。

ジュニアス

當時覆面の一文士あり、ジュニアスなる匿名の下に政治評論に關する書簡文約七十通を公にせり。專ら政治界の秘密を曝露し、屢〻人身攻擊に渉りしかば、知名の政治家はいづれも懼然として戰慄措く能はざりき。其文鋭利にして光彩ありければ、一時は累をバークに及ぼせしも、もとより彼は斯かる卑陋なる行爲をなす人物にあらざれば、其疑團は直ちに晴れぬ。後ちフキリップ・フランシスなる人の作なりと云ふこと一般に信ぜられしも、今日猶ほ分明ならず。

スタンホープ

チエスターフイールに伯として知らるゝフイリップ・スタンホープは其子に與へたる『書簡文』を以て名あり。こは文學的述作としては上乘のものなれど、其內容は殆んど僞善的儀禮を敎へたるものなり。

モンターグ

メリー・モンターグ女史は當時第一の美人として名を得たる婦人にして、幼より文才ありき。外交官に嫁して土耳其に滯在せしが、其見聞觀察せし所をば詳細に本國の友人に送りしものを、後ち收めて一卷の書となして出版せり。其後伊太利其他の國々を旅行し、其見聞せし所を再び世に公にせり。これらの作物はいづれも珍奇なる記事のみなりしかば、大に世の歡迎を受けぬ。

ノヴエルの起原

第四章　新派小說の發達

十八世紀後半に於ける文學發達の中にありて最も重大なる現象は眞正なる

小說の發達なるべし。此現象はローマンチック派の詩歌の勃興と共に大に注意すべきことなり。思ふに散文の形式を取りて最も藝術的精神の要求に應ずるものは小說にして、人情の微を穿ち精を究むる點に於てはこれに勝るものなければなり。吾人は曩きにローマンスが一轉して冒險小說となりしこと、ローマンスは佛國文學の影響を受け、冒險小說は西班牙文學の影響を蒙りたること、又冒險小說が進んでスウヰフトの『ガリヴー巡島記』となりデフォーの『ロビンソン・クルーソー』となりしことを見たり。これ實に將に起らんとする眞正なる小說の先驅者なりき。これ迄のローマンスなるものは專ら想像によりて不可能なることを記し、殆んど時間空間の拘束を受けざるものなりしが、小說即ちノヴェルに至りては人生實際の現代社會を寫し戀愛其他の感情が動機となりて起りたる波瀾を敘し、又一貫せる性格の活動を描寫するに至れり。

ローマンスとノヴェル

純粹小說の鼻祖サミユエル・リチャードソンは千六百八十九年に生れぬ。家富めるにあらざれば僅かに小學の敎育を受けしのみにて倫敦に行き活版屋に入り勤勉正直を以て衆の愛する所となれり。彼れ幼より文才あり、嘗つて人の依賴を受けて通俗書簡文例を出版せしことありて大に世に行はれしかば、彼は書信體を以て一篇の物語を作らんことを企てたり。斯くて現はれ出でしものは『パメラ、一名德の報ひ』と云ふ小說にして、實に彼が五十歲の時の處女作なりき。此書はパメラと稱する可憐無邪氣なる一少女が他家に雇はれて種々の誘惑を受けしも道念堅固にして志操を全ふし、遂に若主人に嫁するに至ることを敘したるものなり。此書一たび出てゝ讀書社會は俄かに時めき、特に年少婦人の歡迎は殆んど狂する計りなりき。蓋しこれまでの物語は凡て荒唐無稽にして實際の人情に疎かりしに此書に於て始めて現在存生する人物の性格とこれに伴ふ四圍の事件とを描寫せしを以て、またなく人の同情を惹きしなり。リチャードソンは此意外なる成功に勵まされて八年後即ち千七百四十八年には『クラリッサ・ハーロー』を著はしぬ。此書は中流社會の一少女が家人の迫害に堪へずして、其意中の人に身を投ぜしに、其男は意外にも無道の惡漢なりしを以て益〻悲慘なる境遇に陷りたりとの悲話を敘せしものなり。其成功は遙かに『パメラ』を凌駕し、其名聲は遠く海外にも傳はりぬ。六年の後第三の作『チャールス・グランデソ

リチャードソン

ン公』現はれたり。こは重もに善良なる男性を寫さんと試みしものなれども、寧ろ失敗に歸せり。これ作者は其閲歴に於て上流社會を寫すに不適當なるのみならず、生來婦人の性格を寫すに長じたるも、男子の性格を寫すに適せざりしを以てなり。其後特に擧ぐる程の著作なかりしが、家業大に榮え千七百六十一年に歿しぬ。

リチャードソンの小説はいづれも冒險小説と同じく第一人稱を用ひて主人公自身の直話體となせしも、其材料、趣意に至りては全然一新生面を開き、着實なる人生を主題となせり。彼が記事はやゝもすれば冗長に流れ、又特に見るべき文體とてはなかりしも、其飾氣なき文致は最も人の愛好する所となれり。

一たびリチャードソンによりて始められたる小説は社會の氣運に乘じて、見る見る神速なる發展をなし二三十年の間は引きつゞき多數の大作を見るに至れり。其情勢恰もエリザ時代の戲曲の如く一躍して極盛期に達せり。此極盛期を代表せし者をヘンリー・フィールデングとなす。彼は千七百七年軍人の家に生れしがイートン學校に入りし後轉じて和蘭陀ライデン大學に行き法律を

フィールデング

研究すること二年、歸國して劇詩家となりき。これより狂言喜劇の類をあまたものしたれど、未だ長技を發揮するに至らざりしが、此時偶『パメラ』出てゝ世の注意を惹きしかば、彼れ取りて之れを見るに己が意に充たざること多し。乃ち自ら筆を採りてこれと反對なる物語を出さんと決心せり。始めの程は單に批難の筆を弄する積りなりしも、筆採り見れば意外に心行くものから、遂に熱心に書き續けたり。かくて千七百四十二年(即ち『パメラ』の後二年)『ジョゼフ・アンドリュー』なる名篇現はれぬ。始めは品行方正なる一青年がゆかりある一寡婦に懸想せられしことに筆をつけしが、後段は全く該諧百出の滑稽小説となれり。其後數年彼が名は殆んど文壇に湮滅せしが、千七百四十九年に至り、其最大傑作、否英國小説界の隨一と稱せらるゝ『孤兒トム・ジョンス』現はれぬ。此書はトム・ジョンスなる孤兒を主人公となし、これに種々の性格を配し、又色々の挿話を加へたる頗る長篇の者なり。作者が此物語に期せし所は紳士貴人を描かんとせしにあらず、單に通常の人間が一通りの教育を受けたる後ち、何等社會的恩惠なくして、僅に常識と奮發心とを以て世に出てゝ、種々なる波瀾に遭遇したることを敘せ

んと試みしに過ぎず。主人公が風浪多き世と戰ひて幾多の失敗錯誤をなしつゝも、過去の經驗を踏臺となして邁進し行く點は最も讀者の悅ぶ所なり。此書は人生の經驗の存せん限りは、其性格の描寫に於て、又創見、詼諧、情愛のおのづからなることに於て、永く小說界の逸品なるべし。千七百五十一年彼が第三の小說『アメリア』出づ。此作は前二者に比すれば、全體の調子落ち着きて活氣に乏しきが如きも、女主人公アメリアは作者最愛の亡妻を標本として作りたるものにして、彼が作中の好性格に數へらるゝものなり。彼の作としては他に冒險小說などもあれど彼が文名は全く以上の小說によるものなれば他はこゝに擧げず。彼れは晩年公職に就きて令名ありしが、後ち保養のためリスボンに至りて客死せり。時に千七百五十四年なりき。

リチャードソンとフィールデング

リチャードソンは謹直、敬虔の人、小心翼々として其業を營みしが、フィールデングはこれに反し性粗暴豪邁にして半生を酒色の間に過ごしぬ。兩者の作物に於てもリチャードソンは女性を描くに妙を得、多恨哀傷の記事に長じたるに反し、フィールデングは男性を描き、活動を貴び、好んで詼諧滑稽を事とせり。前者はやゝもすれば道德の法規に拘泥して、勸善懲惡主義に傾きしも、後者は毫もかゝることを意に介せず、ひたすら人間性情の眞相を捉へんと努めたり。又形式に於てもリチャードソンは書信體一人稱を用ひしが、フィールデングに至りて始めて此慣習を棄てゝ、後世の小說家に於て見るが如き自在なる書き振りに進みたり。故にフィールデングは形式に於ても內容に於ても眞正の小說家の始祖なりき。

スモーレット

フィールデングに於て全盛の極を見たる小說はトバイアス・スモーレットに於て早くも退潮を示せり。彼は前二者に比すれば頗る遜色ありと雖、海洋小說の端緒は彼れによりて開かれたり。彼は千七百二十一年蘇格蘭土の一名家に生れて充分なる敎育を受けぬ。二十歲の時倫敦に上り、先づ著作を試みて失敗せしかば更らに轉じて軍醫となれり。それより軍艦に乘込みて西印度に航し、三年の後ち再び歸りて醫術と文學を以て身を立つるに至れり。此時始めて彼の手になりし者は『ロデリック・ランドムの冒險談』とて全く作者自身の經驗を述べし者、其海上生活の光景を叙して千言萬語雲の如くに起り來るは頗る稱すべき

も、性格餘りに殺伐にして、事件の餘りに悲慘なるは其缺點なり。其後つゞいて『ペリグリン・ピックル』『ファーデナント・ファゾム伯』『原子（アトム）の經歷談』『ハムフリー・クリンカー』などをものせり。彼は屢々佛蘭西、伊太利に往來せし後千七百七十一年に歿せり。『原子經歷談』は諷刺物語として著はれ、『ハムフリー・クリンカー』はスコットの稱讃を得たるものなり。スモーレットは創作或は結構の才ありしにあらず、單に已が見聞せし所を其儘に述ぶるに長ぜしのみ。彼は美を觀ずる力なく、好んで世の暗黑汚穢なる方面を觀察し、人に對するや常に猛烈なる敵意を抱きたるを以て殆んど友人なるものあらざりき。さればスターンは彼を評して『臭菌（スメルファンガス）』と罵りたり。彼は事物を誇張する點に於てはヂッケンスに似たれども、もとよりヂッケンスの如く愛好すべきものなかりき。

スターン

以上の作者と併び稱せられて、頗る奇矯なる性格を有せる者をローレンス・スターンとなす。彼が後の小說家に及ぼせる影響は甚だ大なるものありしも、其作物たるや一種異樣なるものにして眞正なる小說とは認め難かるべし。されど其筆致の亂雜にして、しかも輕妙なる、其觀察の鋭利にして奇警なる、又人生の裏面を描きて、少しの忌憚なく亂倫猥褻なる情事を叙せしなど、いづれも他に比類を見ざる所なり。若しスターンの比儕を得んと欲せば、吾人は十六世紀の佛國文士フランソア・ラベレーに求めざる可らず。スターンが此作者に負ふ所ありしは自らも公言する所なりき。兩人共に僧門に歸せしも其人格は聖職に最も不適當なるものなりき。

スターンは千七百十三年愛蘭土に生れ、幼より軍人なる父に伴はれて、所々に移轉せしが、其非命に倒るゝや親族の好意によりて劍橋大學に入るを得たり。大學卒業の後英國教會の牧師となりて、田舍に居住することゝなり、齡四十五六に達するまでは牧會の傍ら種々の世俗的快樂に耽り恬として恥ざりき。かくて千七百五十九年に至り始めて文章に從事せしが、其著はす所も亦彼の行動の如くに頗る猥褻なるものなりき。されど其文章の奇拔にして描寫の輕妙なるはひたすら時人の驚嘆して措かざる所なりき。これぞ即ち『トリストラム・シャンディの傳』なる奇書にして、第一卷を出してより終りの第九卷に至るまで約八年の星霜を費しぬ。千七百六十八年『多情道中記（センチメンタル・ジャーナー）』現はれしが、此時倫敦客舍にあり

て病を得、孤獨にして氣息絶えたり。彼が死屍は後ち人の竊取する所となり、嘗つて已が學びし劍橋大學に賣られて解剖の實驗に供せられたりと云ふ。實にスターンの如きは其生涯に於ても、其作物に於ても、はだ其死後に於ても全く常人の軌道を逸したるものといふべきなり。

『トリストラム・シャンディ』

『トリストラム・シャンディイ』は天下の奇書なり。これ小說にあらず、論文にあらず、隨筆にあらずと雖、能く人生の實相を描寫し、一貫せる性格を描寫せし點に於ては小說に等しく、哲學道德のことに渉りて或は論じ或は感懷する點に於ては論文隨筆に似たり。而して全篇何等の結構なく照應なきは、恰も迷宮の如く亂麻の如し。主人公はトリストラムなれども自ら表面に現はれ出づること稀にして、全篇の骨子は重に其兩親、叔父トービー及叔父の下男トリムの間に行はれたる會話などなり。後段に至れば頗る滑稽じみたる好色談ありて、悲哀、哄笑、痛罵雜然として錯綜す。

『多情道中記』

『多情道中記』（センチメンタル・ジャーニー）は前者に比すれば短くして條理あり、重もに作者が南歐旅行中に見聞せし所を綴りたるものなり。此書の妙味を充分に味はんと欲せば、當時の佛國社會に精通する必要ありとのことなり。スターンの後代に重ぜらるゝ所以のものは、文藻の輕妙精緻にして句々悉く洗練推敲を經たるが故なるは更にも云はず、人生の瑣事に多大の趣味を感じ、如何なる平凡なるとにても一たび彼が手に觸るゝや悉く靈妙なる珍品となす大手腕にあり。

ゴールドスミス

當時田園生活の清新流露なるおもむきを傳へ、今日猶ほ其の種の逸品と稱せらるるものはオリヴァー・ゴールドスミスの『ウエークフィールドの牧師』（ヴィカー）なり。彼れは詩人として有名なるを以て、此の作も散文にて綴れる一種の牧歌とも見るべきものなり。其の特殊の靈筆を以て安慰滿悅の情趣を敘したるは讀者の容易に捨て難き所なり。之れを『髮盜み』に示されたる都會生活に比し、或は『ガリヴー巡島記』に現はれたる憎人主義に比すれば、此の書は何が故に愛好せらるゝかを首肯するを得べし。其の他サラー・フィールディングはヘンリーの妹にして

其他

『ダビット・シムプル』を著はせり。女史は阿兄の粗豪に陷らず、リチャードソンの哀傷に陷らざる爲めに一時は名聲を博せしも今は忘れられぬ。チャールス・ジョンストンは『金貨ギネの經歷談』なる諷刺物語にスモーレットのおもかげを傳へ、博士ジョンソンは『ラセラス傳』に於て已が人生觀を敘し、ホレース・ウルポールは

『オトラント城』によりて恐怖小説を創めて、クラ、リーヴ、ラドクリッフ、ベックフォードの後繼者を得たり。閨秀小説家として有名なるものにはフランセス・ブルネーありて『エヴエリナ』『セシリア』『カミリア』の諸篇に於て上流社會を寫せり。

以上の小説家の外に猶ほ傳ふべきもの少からねど、いづれも第三流以下の作者なれば今は之れを略しつ。思ふに人生を美化する散文詩とも見るべき小説は十八世紀に於て完全なる形式を取り、一時に大發展をなし、其後暫らく頓挫せしが如しと雖、十九世紀に至りて、世運の進歩し、人生趣味の豐富となるにつれて益〻汪盛を極めたり。

詩歌の趨勢

第五章　ジョンソン時代の詩歌

吾人は尚古時代にありてはポープの詩風獨り全盛を極め、他に異調を示めす者殆どこれなかりしことを見たり。されど自然は永く閉却せらるゝ者にあらざれば、何時しか人爲を脱して自然に歸りたる新詩風の勃興するを見るに至れり。其詩風や始めの程は隱微の間に出沒せしが如くなりしも、大勢の赴く所抑へ難く、年月の經過すると共に次第に其勢力を加へて何時しか全く新しき潮流の奔逸するを見るに至れり。十八世紀中葉にありては半ば前代の詩調を帶び、半ば新詩調を示めせしが其末葉より十九世紀に移る頃ほひは、殆んど新詩調のみなりき。ジョンソン時代の詩風は尚古派よりローマンチック派に移らんとする過渡時代にして、當時は未だ合して一となるに至らざりし二個の潮流ありき。一は即ち尚古派の詩潮にして、一は將に大に起らんとするロマンチック派の詩潮なり。而して尚古派の代表者を擧ぐれば、ジョンソンを始めとしてゴールドスミッス、チユルチルの如きあり、ローマンチック派の傾向を有する者にはヤング、トムソン、グレー、コリンズの如きありて、互に相對峙せり。勿論以上の詩人中にはいづれに屬するとも明言し難く、或は感情に於ては新派に傾き形式に於ては舊派に屬する者もあれば此區別は決して充分正確なるものにあらず。其他クラッブ、スマート、カウパーの如きも當時代に屬する詩人なり。

コールドミス

オリヴアー・ゴールドスミッスは千七百二十八年愛蘭土に生れ、一たびダブリン大學に入りしも性甚だ懶惰なりしを以て中途廢學せり。其後牧師、法律家、醫師

等の業に就きしもいづれも成功する能はず、遂に飄然大陸に放浪する遊子とはなりぬ。もとより一錢の貯へとてなければ一管の笛を携へ、行く〳〵之れを吹奏して憐みを人の檐下に乞ふこともありき。彼が傑作の一なる『旅人』(トラベラー)は此旅行中に思ひ浮びしものなり。後ち倫敦に歸りて種々なる職業を試ろみ、僅かに口を糊せしが、やがて雜誌發刊及び著作業に從事しぬ。千七百六十四年『旅人』現れつゞいて『論文集』出で二年の後ち有名なる『ウエーク・フィールドの牧師』出でゝ文名隆々たりき。此時ジョンソン博士の紹介によりて文學倶樂部に出入し、廣く天下の文士と交はりを結びぬ。其後つゞいて喜劇『やさしき人』(ディット・ヒー・ナー・ユー・ナード・マン)および『荒村』(ディザーテット・ヴィレージ)に於て一層の名聲を博しぬ。『屈して勝つ』(シエー・スツープス・ター・コンカー)なる喜劇は千七百七十一年に出でしが、其性格の描寫に於ても、談話の自然なることに於ても『やさしき人』に勝れり。かくて三年の後ち病を得て歿しぬ。彼はポープの流を汲みてヒーロイック・カプレットを用ひ、格律に重きを置きしも、其感情に於ては餘程趣きを異にし寧ろトムソン等に類似せり。彼は論文家、詩人、小說家に兼ぬるに劇詩家を以てせる多藝の人士なりしも、惜しい哉終生放浪遊興に身を委ね、やゝもすれば虛榮心嫉妬心に驅られて奢侈逸樂に耽りぬ。但し生來慈悲の心深く、屢〻空囊を傾けて貧者を惠みしが如き任俠の精神に至りては甚だ稱すべし。

クラップ

ジョージ・クラップ(一七五四―一八三二)はバイロンの「最も峻烈にして而も最上なる自然描寫家」と呼びし詩人にして尙古派に屬す。彼はもと醫を業とせしも、中年文學に志し『村落』(ヴィリジ)『村寺記錄』(パリシュ・レジスター)『ホール物語』(ホールとは貧民病者の保護せらるゝ所なり)などの著あり。少時より窮迫艱難の間に人となりしを以て、常に憂愁の氣に滿ちやゝもすれば厭世の見解に陷り、常に田舍生活の暗黑悲慘なる方面を最も忠實に描寫して、讀者をして酸鼻の情に堪へざらしむ。彼は見聞せるが儘を鮮明に寫し、毫も殘す所なきを以て最も忠實なる寫實小說家として知られたり。特に感情のために心を動さるゝこと少かりしを以て自己の感想を避けて最も峻烈なる光景を活寫することを得たり。但し其觀察の常に狹隘に失し、趣味の一方に傾きたるがため充分なる感化を將來に殘すことなかりき。

スマート

クリストフアー・スマートは近世評家の多數が口を極めて稱揚する薄命詩人なり。彼は始めの程は重もに尙古風の詩を作りしが不圖發狂し、精神錯亂の狀

態に陷りてローマンチック風の詩『ダビッドの歌』をものしぬ。かくの如くにして彼は兩詩風を一身にて代表し、巧みにアングロ・サクソン語脈と拉典語脈とを調和して美はしき想像を歌ひ出しぬ。

カウパー

スマートと等しく新舊兩詩風を代表する者は宗教的狂詩人ウヰリアム・カウパー(一七三一―一八〇〇)なり。カウパーは詩形と思想とに於ては尚古派に屬するも、其感情にありてはローマンチック派に傾けり。彼は性來頗る多情多感にして、先天的に神咀を受けたりと妄信し、終生一日の安きことなく憂鬱悲愴の思ひをもて過ごせり。彼はもと良家に生れしも早く慈母を失ひて寂寥を感じ、次に寄宿學校に送られ、同窓の虐待を受けて其薄弱なる神經を痛めたり。長じて上院の書記に任ぜられしも、小膽なるため戰慄恐懼して其職に就くと能はず、幾度か自殺せんことを企てぬ。これより閑地に身を養ひ、與來れば鬱を散ぜんとて作詩を事とせり。有名なる『はたらき』は五十二才の時の作にして、作者が山野を徜徉して自然と交はりしこと、及び人生相愛の美はしきことなどを叙したる無韻律の長篇なり。こゝに彼が特技として現はれたるは輕快なる記事の間に

莊嚴なる宗教的感想を寓せしことなり。『ジョン・ギルピン』なる滑稽詩も亦此頃の作にして、此憂鬱詩人が不思議にも滑稽の才に長じたることを示せり。『のけもの』は最後の作にして自家の哀傷を洩らせしもの、其他『オルネー讃美歌』なる宗教詩を作り、今日猶ほ愛唱せらる。カウパーは自然の物象を最も清明に正直に描寫し、之れをやるに、最も平易なる言語を以てせし詩人なり。これ彼がウォルヅウオルスに對して深大なる影響を與へし重なる理由なり。彼れはもと鬱をやらんために詩を作りたるのみにて、毫も文名を博せんとの意志なかりしを以て詩壇に鮮明なる一旗幟を建つるに至らざりしと雖、其わざとらしからぬ自然の描寫は大詩人とまでは稱せられずとも、最も眞面目なる詩人なりしと云ふことを得べし。

ヤング

以上の尚古派に對して早やくも自然主義の詩風を現はせし者はエドワード・ヤング(一六八一―一七六五)なり。彼は牛津大學に學び、始めの程は全くポープの詩風に倣ひしが、技の漸やく熟するに至りてミルトンの格律に移れり。初代に作りたる悲劇、諷刺詩は尚古派のものなれど、晩年の『夜思』なる長篇は新詩調を

トムソン

示せる名吟なり。此詩は千七百四十二年より四十四年の間に現はれ、莊重なる格調を以て沈痛なる感想を述べし所、明白にミルトンの衣鉢を傳へたり。

『四季』の著者ジェームス・トムソン（一七〇〇―一七四八）は當代に於て記憶すべき詩人にして、全然在來の形式的拘束を脱して、自然の清新なる趣味を鼓吹せり。彼はエデンボロー大學に入りて、將來教職に就かんとせしに、何時しか文學に傾き、千七百二十六年倫敦に上りて『冬の卷』を出せり。此詩一たび出てゝ世人は擧つて之を喧傳せしが、續いて『夏の卷』『春の卷』出で、千七百三十年『秋の卷』出てゝ『四季』を完結せり。これより彼は生活上頓みに餘裕を得たれば、閑靜なる自然の風光を樂みつゝ作詩に從ひ千七百四十八年『懶惰城』を出版し、間もなく四十八の壯年を以て去れり。トムソンが詩壇に重んぜらるゝ所以のものは自然の美に對する純粹なる愛好心と清新豐富なる想像とにあり。當時未だヒーロイック・カプレット全盛を極めたりと雖、己が撰める題目に適せざるを觀破し、斷然無韻律を用ひしが如き全く彼の創見と云はざる可らず。コールリッヂ曰く「自然を愛する情はトムソンを携へて歡喜の宗教に達せしめ、幽靜なる宗教はカウパーをして自然を愛するに至らしめぬ」と。彼等は共に自然を愛する道を知りしものと云ふべし。

以上ヤングとトムソンとはローマンチック派の前驅とも見るべきものにして、次に現はれたるグレーコリンズに至りて一層の美觀を呈せり。彼等は共に古典學研究を再興し、正確と優美なる詩形を求めたり。即ち彼等は專ら希臘詩人及びペトラルクの如き伊太利詩人の美はしきおもかげを學びて所謂『尙古藝術』の面目を發揮せんと試みぬ。然れども其精神に於ては寧ろローマンチック氣風を帶びて大勢の赴く所を指示せり。彼等が洗練彫琢の術及び清新なる詩的感情をもて自然を彩色する妙は、蓋し彼等獨特の技倆にして後人の特に注意すべき要件たり。

グレー

トマス・グレー（一七一六―一七七一）は終生劍橋大學の中に居住せし學者なりき。夙にポープの詩風に反對の意見を抱き、詩潮の革新に志せしと雖、其博學は彼をして左程大胆に急激なる變化をなすを許さゞりしが如し。彼が作は其數に於ても量に於ても多からずと雖、いづれも苦心慘憺を經たるものにして辭句

巧妙、感情豐麗なる、他に多く比を見ざる所なり。『イートン學校の賦』『春の賦』は處女作にして千七百四十二年に作られしも五年後に始めて世に出せり。千七百五十一年名吟『田舍寺院の墓畔に於て歌ひたる挽歌』現はれて、彼が聲價頓みに揚れり。此詩は十二年間の推敲を經て漸やく出版せられたるものなり。其苦心空しからず、これによりて作者の名聲は不朽に傳はり其影響は遠く佛國文壇を動せり。次に北歐文學研究の結果としては『ピンダー短詩』を得たり。『詩歌の進步』『詩人』の二篇は『ピンダー短詩』中の絕唱にして抒情詩歌の上乘として知らる。

コリンズ

ウキリアム・コリンズ（一七二一—一七五六）は十八世紀に於ける抒情詩家の隨一と稱せられ、其名聲グレーに下らず。牛津大學に學びしも中途退學し、倫敦に出てゝトムソン等と交りき。彼れ生來狂癲病に苦みて未だ詩才を發揮するに至らず、三十五才にして歿せしは惜むべきことなり。其作甚だ少く『夕暮の歌』及び『七情の歌』（パッシンズ）とて音樂の靈能を歌ひしものなど最も名あり。彼は全く尙古派を脫する能はざりしも、其篤りなき清き哀音悲韻を寫せし所などは清新の氣に充てり。

ローマンチック派の優勢

かくの如く尙古派漸やく衰微の兆候を呈して未だ全く去らず、新詩風大に起らんとして未だ全勝を制するに至らざるは當時の趨勢なりしと雖、大勢既に定まりて新詩風の勃興を助くるもの續々として現はれたり。第一にエリザ文學を始めとして、チョーサー其他の詩人の作物を研究すると盛んになりしかば文壇の趣味は一層豐富敦厚となりぬ。從つて演劇の如きもガーリック其他の名優の妙技によりて大に文藝趣味を社會に鼓吹せり。而して此際此大勢を叱咤して一段急激なる進捗をなさしめたるものあり。曰く監督バーシーの『英國古代詩遺篇』曰くマクファエルソンの『オッシアン』曰くチャックートンの『ローレー詩集』及びワルトンの『英國詩歌史』の出版なりき。其中最も重大なるは『オッシアン』なるべし。

『英國古代詩遺篇』

バーシー

トマス・バーシー（一七二九—一八一一）は聖職にある傍ら、一般社會に流行せる古今の俗謠を蒐集し、千七百六十五年之れを『英國古代詩遺篇』（レリクス・オヴ・アンシエント・ポエトリー）の名を以て出版せり。之れ舊派詩人に對する一大打擊なりき。由來傳襲の法則に從はざるもの

マクフエルソンの『オシアン』

は詩歌にあらずとなせしが、無教育なる民俗の間に行はれて、しかも何等の拘束もなく人間の至情を發露せる歌謠の現出によりて、此偏見は事實上全く打破せられたり。此大胆破格の行爲は至る處呼應者の熱心なる歡迎を受け、其影響廣く歐州諸國にも波及せり。蓋し當時人々は在來の格式に疲れ果てゝ何物か自由濶達なるものを得んと熱望せしことなれば、多少缺點はあれども之れを顧みず隨喜渴仰して、之れを愛讀せしなり。

『オシアン』はジエームス・マクフエルソン（一七三六―一七九六）がゲール人の古詩を義譯せしものと稱して千七百六十二年頃に出版せしものなり。此書は古代ゲール人の武勇談、自然の風物に對する熱烈なる感懷などをば流麗なる筆を以て敘せし散文詩なり。讀詩社會は此新現象を見て恰も數年間の渴望始めて慰されたる如く感じ、一時はホーマーとの優劣を比較する者すらありし程なりき。ゲーテの如きも深く之れを珍とし、又ナポレオンは之れを世界一の作物となして常に戰陣に携帶せりと云ふ。其の後ジョンソン博士を始めとし、多數の批評家は『オシアン』の果して典據ある飜譯なりや否やを嚴重に調査せしに、全く

チヤタートンの『ローレー詩集』

作者自身の作を佯はりて斯くは名付けしものなること觀破せられたり。然れども其勢力はこれがために毫も衰へず、依然として世に行はれき。何故に此書は斯くも深大なる歡迎を受けしか。今日之れを讀むに左程文學的價値ありとも思はれざることを以て見れば、其理由を他に見出さゞる可らず。これ一つには當時の文運が此種の作物を渴望せしを以て、其漠然たる敘事、感懷を以て頗る深長なる意味ありと感じ、これに自家の想像力を加へて以て理想の本尊なりと妄信したればなり。

『オシアン』僞作事件に類似したるは『ローレー詩集』の出版なり。トマス・チヤタートン（一七五二―一七七〇）は生れて何等の異常もなかりしが、七才頃より俄かに讀書熱を起し、他の兒童が遊戯に餘念なき間に熱心に讀書に耽りぬ。其後十才にして詩を作り始めしが、十二才頃より『ローレー詩集』なるものゝ著作に着手せしが如し。十七才大志を抱きて倫敦に出でしが其目的を遂ぐること能はず、殆んと飢渴に瀕し、遂に恨を飲んで自殺するに至れり。『ローレー詩集』とはチヤッタートンの云ふ所によれば十五世紀頃に生れたるトマス・ローレーなる人

の古詩にして、偶然之れを發見せしものなりとて、巧みに古風の綴方を用ひて記したるものなり。若し此兒童詩人にして永く生存して充分に其詩才を發揮したらんには如何なる大詩人となりしやも知る可らざりしに始めより僞作を以て世に見え、グレー等の觀破する所となりて空しく憤死せしは誠に痛しきことなりき。

次にローマンス詩風の勃興に多少の貢献をなせしものはトマス・ウルトン（一七二八—一七九〇）の『英國詩歌史』（一七七四—七八）の出版なりき。彼は牛津大學の出身にして、後同大學の詩歌の教授に舉られたる人にして此書の外に詩歌數篇を草せり。彼は批評眼に於ても學識に就ても亦詩的才能に於てもジョンソン博士の上にありしと雖、未だ時好に適せざりしを以て、前述の僞作程の影響を與ふること能はざりき。

ウルトン

シエリダン

吾人は此章を終はるに先ち、當時の劇詩に付きて一言するの要あり。十八世紀末葉に於て最も秀でたる劇詩家はゴールドスミッス及びシエリダンなり。ゴールドスミッスのことは既に之れを述べたれば、こゝには單にシエリダンに付きて語るべし。リチャード・シエリダン（一七五一—一八一六）はゴールドスミッスの如くに愛蘭土に生れ、バークの如くに愛好せられたる政論家なりき。彼は國會議員となりて屢〻卓拔なる意見を吐きて、大に國事に盡瘁せり。彼が劇詩家としての評判よきことは沙翁の次に位し、英國喜劇家中の白眉にして、最後の者なり。彼が機智と描寫力とはコングレーヴに似たる所あれども、復古時代に特有なる嘲笑粗笨なる弊に陷ることなく、全體に於て頗る自然の趣味を得たり。彼は千七百七十五年喜劇『戀敵』（ライヴァルズ）に於て始めて文名を博し、其の後つゞいて『女傳』（ヴェニング）『スカーボロー漫遊』『誹譏仲間』（スクール・フォー・スカンダル）『批評家』（クリティック）などを著し、倫敦の觀劇社會の注意を一身に集めたり。此中『戀敵』及び『誹譏仲間』は今尚劇壇に歡迎せらる。

第七編　十九世紀の文學

第一章　總論

エリザ時代と十九世紀

十九世紀の英國文學はエリザ時代の文學と、共に英國文學史上の双璧と稱すべきものなり。その孰れを優り、孰れを劣ると斷定するは決して容易の業にあらず。各自其特長を以て天下に獨歩すと云ふを以て寧ろ至當なりと信ず。十六世紀にありて數多の文豪ある中にも沙翁は卓然として千古變らざる月桂冠を戴き、一代の群星悉く之れを圍繞して燦爛たる光輝を放てり。十九世紀の文學にありてはよしや沙翁を凌駕する程の詩聖なしとは云へ、各自特殊の風を代表し、時代精神を反映して、天下に誇稱すべき詩人散文家の多きこと實に古今に冠たり。此時代にありては、劇詩に於ては十六世紀に數歩を讓るべしとするも、其他の萬種の文學的作物にありては殆んど一として備はざるものなく、いづれも第一流の大家巨匠を有せり。

ローマンチック詩歌の時代

純感情にあらず

エリザ文學の特徴はローマンチック風なりしが、十九世紀文學の特徴も亦ローマンチック風なりき。兩時代共に國民發展の上に一生面を發揮し、國勢大に勃興したる時代なりしを以て、前代傳襲の舊習慣、舊拘束に滿足すると能はざりき。こゝを以て尚古文學の羈絆を脱し、自由、平等、光明、生命を代表擁護する所ろのローマンチック文學を歡迎せしは理の正に當然なる所なりき。ローマンチック派の特徴は活躍せる情感、豐富なる想像、博大優雅なる精神なるを以て、此風潮を帶びたる時代に於て詩歌の繁榮を見るべきは當然の事なり。故にエリザ文學は最も秀逸なる詩歌的産物を收め、十九世紀文學にありてもろ〳〵の作物中最も偉大なるものは詩歌なりき。十八世紀を以て廣義に於ける散文時代なりとすれば、十九世紀は正しく詩歌の時代なり。

若し十六世紀時代の文學を以て少年時代のものなりとすれば、十九世紀文學は壯年の文學なり。前者は情緒を以て主なる動機となせしが、後者にありては至大なる科學的思想及世界的觀念の發展に伴ひ、感情以外に理性の活動するを見るにいたりぬ。湖畔詩人の索思的なるテンニスン、ブラウニングの進化主義

佛蘭革命の影響

に感化せられたるなどは何人も容易に首肯すべき明確なる事例ならん。詩歌の形式に於て之れを見るも、エリザ時代にありては、寧ろ率直なる感情其物の發表に重きを置きしを以て、詩形聲律に關しては左程大なる注意を用ゐざりしが、十九世紀にありてはポープ時代の深き鍛練修養の結果として、詩形に於て圓熟せしと共に內容に於ても頗る豐富なるものありき。これ一は十八世紀の嚴酷なる文學的修養の然らしむる所なりしとは云へ、又以て時代精神の恩寵の致す所、實に當代は文質共に彬々たる美觀を呈したりといはざるべからず。

當代にありて最も重大なる現象は人類及び社會に對する興味の著しく增加せしことなるべし。十八世紀の末葉に當り、佛國に於て始まりたる政治的革命はバーク等の激烈にして思慮深き反對ありし爲に激しき禍害を見るに至らざりしも、其餘波は英國人士に大なる影響を及ぼし、社會人心共に此大波を受けて著しく震盪せり。然れども英國民の冷靜にして秩序的なる性質は終に激烈なる禍亂に投ぜられて、戰塵天を掩ふ慘劇を免れしめたり。故に十八世紀末葉より千八百卅年頃に至る迄の詩人はいづれも革命的精神の鼓吹者となり、やゝも

獨逸思想の感化

すれば破壞の斧鉞を揮ふて社會組織を打破せんとする傾向を示めせり。先づ熱烈なるバーンスを劈頭となし、冷靜なるウォルヅウォルヅの如きを以てしても一時は此渦中に投ぜられき。バイロン、シ.エレーの如きに至りては此過激なる思想に中毒して餘所の見る目も痛ましき程までに醜弄せられたりき。而して斯かる激動的、痙攣的混亂は暫くにして止み、思想界を蔽はんとせし洪波もやがて沈靜せしと雖、こは單に表面上のことにして、一たび播種せられたる新思想はよしや暫らくは地下に隱るゝことあるも薩々たる春光の照らすあらば、やがて萠芽し開花し結實せずんば止まざらんとす。淺き瀨ならば仇浪も立たんを、深き淵にも似たるべき英國思想界は新來の思想をば汪然たる耐久的精神を以て醞熟醸成する迄充分に研讃翫味して、こゝに雅優なる文學を產み出すに至れり。

佛國の大動亂と相前後して歐洲の世界に起りたる一現象は、蓋し獨逸國の政治上の勃興及び、思想文藝上の大發展なるべし。由來獨逸の文學は佛國の尙古的形式文學の蹂躪する所となりて、未だ眞摯なる國民文學の聳然として覇を稱

宗教的思想

するものなかりしが、國民の熱誠なる思想は何時しか横溢し來りて、國民の覺醒となり、思想の自由、文藝の獨立を見るにいたれり。レッシング、シユレーゲル兄弟、ノヴアリスの如き大家巨匠は實に此風雲を呼び起し、又これに乘じて走りしもの、其獨逸文學の中興としての功績や永く沒す可らず。彼等は傳襲の儀式法規を脫し、猛然として精神、生命の源泉を汲み脚色結構の末技は意を止むる所にあらずとし、ひたすら絶對圓滿なる眞善美の形影に惝慄して措かざりき。而して此思想的變革の英國文壇に及ぼせる影響は佛國革命のそれの如く渦紋の表面に現出するを認むること能はざりしと雖、決して微少なるものにはあらざりき。後年のヴオルヅウオルス、コールリッヂの如き、カーライル、アーノルドの如きはいづれも此思想の潮流に棹して其偉大を全ふせしものと云ふべきなり。

次に注意すべきことは宗教的思想の著しく文藝思想に侵染せしことなり。宗教が寺院内に籠城し、信徒間のみに珍重せらるゝ間は未だ價値なきものなり。文學者が態々偏狹なる宗教的思想に權能を與へ、却て文學の優雅なる精神を湮滅する時は、これ宗教が文學の領域を侵害せしものにして、これ又決して穩健妥當なる沙汰に非ず。古來未だ宗教のために作りたる文學にして、大に見るべきものは非ざるなり。宗教は野に叫ぶ聲なり。其姿は見へざれど其朗々たる聲、嚠喨微妙なる響きは能く天地に鳴り渡り、人之れを聽きて喜び且つ慰むなり。宗教は鹽の如きか。他物に混和して自ら姿を沒し、之れに妙味を附し、永く防腐の材となる。人心これによりて和樂安堵し、淫靡腐敗の場所にありて能く德操の全きを得るものなり。宗教が文學を影響するも亦正に斯くの如くあるべきなり。宗教は全く其形影を墓中に收めて復活靈化して以て文學の精神を結晶醇化せしむべし。吾人熟ら當世紀に於ける宗教思想の文學に對する態度を觀するに實に斯くの如くなりしは、大に愉快とするところなり。柔和謙遜なる宗教は無形の源泉となりては文藝の思想を灌漑して、常に清新豐富ならしめ、鹽となりては能く幽遠高尚なる靈界のことを思はしめ、以て趣味の索然、思想の淺薄、精神の腐敗を防遏したり。當時物質的進步と科學的究明の精神とが汪然として思想界を侵冒せんとせしかば或は懷疑の暗雲天を蔽ひ或は絶望の深淵地を裂くことありて、如何なる文士も一たびは人生問題に逢着して何等かの解決を

興へんとせざるはなかりき。而して此一個のスフインクスに明答を與へし者は自由快濶の新天地に躍り出でゝ歌聲朗かに希望と光明とを高調し、否らざる者は殘骸僅かに現世に飄浪して失望と破壞とを哀吟せり。此の事實を最も具體的に顯證せしものは、彼の有名なる牛津大學の宗教運動及び其結果なりと信ず。苟も當時代思想界の裏面に流れたる暗流を知り、文藝界の半面を解する者は、此宗教運動に深甚なる意義の存ずることを首肯すべし。而して斯くの如き宗教運動は大小の差はあれ各人の精神界に行はれ、懦夫怯者ならざる限りは何等かの確答を與へ、これによりて自家の精神的訓練を全うし、自家の天分を諒知し確信するとを勉めたり。これ實に十九世紀の文壇に比較的鮮明に現はれたる現象なりき。

〔宗教運動〕

其他物質的進歩、科學の發達、世界交通等の文藝に及ぼしたる結果を攻究すれば猶ほ論ずべきこと多しと雖、これらのことは特に事新しく叙說する必要もなかるべければ略しつ。以上の略述によりて十九世紀の文學が如何に生氣あり、色彩あり、蘊蓄あり、價値あるかは豫め推測するに難からざるべし。吾人はこれより直ちに事實に照して其眞狀を究むべし。

バーンス

第二章　ヴヰクトリア朝以前の詩歌

革命時代の特產物なる自由平等の新主義を標榜して貧者弱者の辨護者となりしものをロバード・バーンスとなす。彼は身は眇たる一野人にして、終生貧困と戰ひ、失望落膽の餘り放縱に流れ疾苦に惱める人なりき。されど其生得の大詩才はこれがために毫も減ずることなく、却つて英國の抒情歌に一生面を開くに至れり。バーンスは千七百五十九年蘇格蘭土の赤貧なる農家に生れぬ。他の多くの文士に見るが如き學校教育も獨學自修の餘裕も見出すこと能はず、早やくも鋤を携へて野に耕やす人とはなりぬ。されど彼が文學に對する嗜好は甚だ盛んにして、食事中は必らず詩卷を手にし、田野に往來する時は何時も適意の歌謠を朗吟し行くを常とせり。彼もと多情多感の性、一たびは道ならぬ情事を犯して頗る困厄の地位に陷り、遠く海外に逃れんとまで思ひて果さゞりしが、此時偶々自己所作の詩篇を出版せしに、意外にも人々の熱心なる歡迎を受けて

平民の擁護者

窮迫を免るゝを得たり。時に千七百八十六年。彼が野心は今や勃々として禁ずる能はず、詩名一代を壓せんとの抱負を以てエデンボローに上りしが、これ却て一生を誤る素因とはなれり。彼れもとより禮に嫻はぬ一野人王侯貴人の仲間入りをなして、一時は頭熱し心溶けて全く有頂天となりしが、上流社會が彼れを待つや一種の好奇心に過ぎざりしを以て、須臾にして彼を目するに路傍の人を以てせり。此時より彼は奢侈放飲に耽り惡習に染みぬ。後年職を檢量官に奉ぜしも、終はりを全ふすること能はず、殆んど肉慾の奴隷となり、疾病の犧牲となりて、千七百九十六年三十七才の壯年を以て此世を去りぬ。

斯くの如くバーンスは其一生に於ても何等の見榮えなく、其人格に於ても特に欽慕すべき者を見出すと能はず。又其詩歌に用ひたる用語を云へば英國の通用語にあらずして、單に蘇國の方言に過ぎざりしなり。然るに其詩歌は英國文學に一新思潮を生み出し、永く英國詩宗の中に數へらるゝは頗る奇異なる現象と云はざる可らず。されど其理由を知るは決して難事に非ず。彼は平民の代表者にして辨護者なり。彼は凡て悲める者、凡て惱める者、凡て壓制せらるゝ者の友となりて、これと共に哭き、これと共に笑ひて、王者の貴きも、權門の誇りも、楠柯一炊の夢に譬へて、唯貴むべく重ずべきは人間本來の眞面目なりと宣言せり。こはこれ實に人間最高の聲にして、之れに勝れる人生の慰籍と權威とは決して他に求むること能はず。富豪、權門、學識、藝能これ何物ぞ。人生の空しき粧飾にあらざるなきか。峻嚴なる宇宙の至高者の前にありては無意味なる評價に過ぎざるにあらずや。世に貴きもの赤裸々たる人間の如きものはあらじ。これ純金にも勝りて貴きもの、精金の榮えにも勝れるもの。誰か鍍金細工を以て永く自己と人とを瞞着するものぞ。かくの如き偉大激烈なる聲言は實に天の靈火に動かされて發せられたる最も清高なる絶叫、最も得意なる凱歌なりき。

ブレーク

十八世紀の末葉より十九世紀初葉に涉りて、其名沒す可らざる詩人はウヰリアム・ブレーク（一七五九―一八二七）なり。彼は詩人、彫刻家、畫家及び神祕論者なりき。幼にして空想妄念に富み、沈思默想に耽ることを以て此上なき樂みとなせしが、長ずるに從ひ此傾向は益〻甚しく、常に此世ならぬ神祕世界に思ひを通はしぬ。其處女作『詩歌小集』（一七八三）は當時の物質主義に反對したる第一の叫喚

にして、其瓢逸なる着想は遠く時流を拔けり。後ち續いて『無垢の歌』(インノセンス)『經驗の歌』(エクスピリエンス)などの著ありて、彼の神祕的高想はいよ〳〵其度を高めたり。『無垢の歌』は重も に浮世の仇浪に打たれざる清淨純潔なる幼な心の圓滿幸福なる狀態を敍し、『經驗の歌』は之れに對して罪惡、哀傷さてはものゝあはれを經驗したる人心のあさましさ、痛ましさを歌ひ出せしものなり。彼は『オシアン』風の情熱に加ふるにスウエデンボルグ風の神祕思想を以てし、又其想像の激越にして、著想の奇拔なるは、全く彼の天品といはざるべからず。特に此詩人が獨特の靈腕を揮ひしは兒童の天眞無邪氣なる中に幽遠凄婉なる神祕思想を寓せしことなるべし。彼が文學史上に記憶せらるべき要點は最も斬新なる神祕詩人なるがためにして、其獨創、深遠、簡潔、優麗なるは彼をして後代に重からしむる理由なり。ロセッチの如きは特に彼に負ふ所多し。

世は革命の騷亂に逢着して喧噪を極めし間に、獨り天上界の神祕に憧憬せしものはブレークに於て之れを見たり。ウオルヅウオルスもコールリッヂもサウジーも一度は血眼になりて時代の風潮と共に躍動せし間に、獨り革命の雲行きを冷眼視し、遙かに中古時代の祕密の寶物の藏を開きて其珍奇優麗なるに思ひを寄せしものはサー・ウオルター・スコットなり。彼は武士氣質、封建制度、中古的精神の有力なる鼓吹者となり、一時は英國詩壇の注意を一身に集めし大立物なりき。彼は革命思想の小頓挫を見たる霎時を巧みに利用して中古時代の全幅の大パノラマを現出し、バイロンの現はるゝ迄は詩歌の世界に於ける唯一の寵兒なりき。

スコット

スコットは千七百七十一年エデンボローに生れ幼時蒲柳の質なりしより從つて空想に耽ることを好みき。父は一生涯一人の敵をも作らざりしと云はれたる愛すべき圓滿の人、母は慈愛、同情の念に富み、常に昔物語を其子に語りて自ら慰めたり。スコットは大學に入り、父の業を繼がんが爲めに法律學を學び、尋いて法律事務に鞅掌せしが、閑あれば古跡舊趾を探りて、むかしのおもかげを慕ひき。彼が始て文壇に筆を採りしは千七百九十六年獨逸の名作の飜譯なりしが、千八百二年には『蘇國邊境歌謠』(ミンストレルシー・オヴ・ヒスコッチス・ボールダー)を出して世の注意を惹きぬ。此書はバーシーの例に從ひて蘇國南部に行はれたる俗謠を編輯せしものに過ぎずと雖、其影響や大

にして、後年民謠文學研究に志す者の至寶となれり。千八百五年『最後の樂人の歌』（レー・オヴ・ゼ・ラスト・ミンストレル）出つるや、彼の聲價は一層高まりしかば、こゝに文學を以て一生の事業となす志を抱くことゝなれり。彼は有名なる健筆家にして、一たび想を構へて筆を採るや千言萬語立ろに成りしと雖、バイロンの如くに粗漏に陷ることなかりしは多とすべきことなり。其後『マーミオン』『湖上の美人』等を著はして、令名いよ〳〵擧りしと雖、其頃文界の魔王バイロン、早やく現はれ出て、詩壇の注意を一身に集めき。彼はこれと對立するの不利なるを知りて、斷然詩筆を捨て、轉じて歴史小說に移るに至れり。千八百十四年『ウェーヴアーレー』又の名『六十年このかた』三卷を著はし、頹勢を翻へし、又もや十九世紀初期の小說界を牽ゐ、十五年間は『大魔術家』として世人の愛好を維げり。晩年彼が出版會社破產せしを以て、彼は其負債を返濟せんとて、勤勉努力、驚くべき精力を以て筆硯に從事して漸やく其幾分を拂ふを得たり。されどこれがため、彼は痛く健康を傷ひ、やゝもすれば病魔に冒されしを以て、南歐觀光の途に上りて身心を慰めたる後ち千八百三十二年アボットフォードに於て歿しぬ。

特徴

スコットの詩人時代は十數年に渉りぬ。彼が詩はウォルツウォルス、コールリッヂの如く神秘的要素なく、シエレーの如き抒情的才能なかりしと雖、過去の事實を捉へ來りて最も鮮明に叙述したるは其長所とする所なり。其叙する所の山河風土は全く之れを生國蘇格蘭土に採り、其性格、慣習等は嘗つて母に聞きし所或は自ら見聞せし所のものに、詩的想像を加へて變化せしものなり。然れども彼が作物全體に通じて現はれたる短處とも云ふべきことは人物の性情を洞察同情する心理的妙機を缺き、動もすれば衣服、裝飾、風景等外形の寫實に偏したることにあり。されば之れを讀むこと一回なれば面白きも、再三すれば恰も錦繪に對するが如き感想を抱くに至るべし。然れども彼はウォルツウォルスの如くに偏せず、バイロンの如くに狂せずして、最も圓滿寛大にして又剛健清淨なる人物を以て五十年の間健筆を揮ひ、一代の趣味を支配せしは誠に偉なりと云ふべし。

湖畔派と惡魔派

十九世紀の初期に現はれたる詩人七人の中スコットを除きたる他の六人を通常分ちて二派となす。一を湖畔派と云ひ、一を惡魔派と稱す。湖畔派に屬する

ものはウオルズウオルス、コールリッヂ、サウジーの三人にして、ウオルズウオルスがグラスメーアのほとりに居を構へ、尋てコールリッヂも其處に居住せしことより此名稱を得たり。惡魔派とはサウジー等がバイロンの詩風を罵倒して此語を用ひしより起り、バイロン、シエレー、キーツの三人之れに屬す。此二派に於て偶然の特色とも見るべきことは、湖畔派は早やくより世に現はれ、始めの程は激越なる思想を抱きしとは云へ、後ちには噴火後に潭碧を湛ふる湖水の如く、冷靜穩健なる態度を持續せり。惡魔派はいづれも短命にして去り、キーツの外は社會と人道に對して激烈なる反對をなし、其制度慣習を破壞せずんば止まざらんとせり。

ウオルズウオルス

ウヰリアム・ウオルズウオルスは千七百七十年カムバーランドの水清く山青き所に生れぬ。早く兩親に別れ、叔父の助力によりて劍橋大學に入りて業を卒ふることを得たり。尋いて大陸漫遊の途に上りしが、時しも佛國は革命の風雲漸やく急ならんとする頃なりければ年少氣鋭なる彼は一時は自ら進んで此渦中に投ぜんと計りしも故ありて歸國しぬ。歸來前途茫々として定かならざりしに友人某は彼が詩才の凡ならざることを認め、潛心作詩に從事すべきことを慫慂し、九百磅の遺産を讓りたり。ウオルズウオルスこゝに立脚の地を得、其妹ドロシーと共に一寒村にト居し浮世の風も通はぬ計りの靜寂なる所にありて、專ら高遠深邃なる自然に思ひを寄せぬ。彼がコールリッヂと協力して『抒情詩歌』をものせしは千八百九十八年のことにして、其序論に於て、其新詩派の主張を聲明せり。其後一たび獨逸漫遊をなしゝ後ち、グラスメーアに移りハッチンソン女史と結婚しぬ。此新夫人と云ひ、妹ドロテーと云ひ、共に文學鑑賞の才に富みしを以て、此詩人の偉業を助けしこと少からざりき。其後ち彼は再びライダル・マウントに移り、こゝに最も平和なる餘生を送り千八百五十年八十の高齢を以て歿しぬ。

自然に對する信念

ウオルズウオルスは冷靜莊嚴なる感想を抱ける人なりき。彼が沈思默想することゝ、自然に對する畏敬の心とはミルトン、バーシーに負ふ所多しと雖又自然に對して全く獨創の見解を抱けり。彼は山川草木其物の美觀を歌はずして、之ら自然界の現象を通じて、其裏面にひそめる一種靈活の眞美を歌ひ出てぬ。

詩作

彼が心絃一たび此神靈に觸るゝや心身恍惚として飛動し、無念無想の妙境に遊離せり。其高想や一點寸毫も俗界のものを交へず、眞にこれ宇宙の神靈に抱かれて其懷に眠るなりき。こゝを以て彼は思へらく、人間最上の義務は此神靈の宿れる自然に對して絶對的服從をなすにありと。即ち彼の詩歌と宗教とはこゝに其冥合點を得たるものと云ふべし。

ウォルズウォルスの詩は毀譽相半ばす。或一派の評家は之れを以て乾燥無味にして殆んど讀むに堪へずとなし、或人は彼を以て理想の自然詩人なりとなす。されどこれ孰れも正當なる見解にあらざるべし。蓋し彼が詩歌は其範圍に於て頗る制限せらるゝ所あり。例令ば彼は滑稽頓智の才、劇詩談話的の才を缺き、人生の多方面なる經驗出來事に對しては甚だ敦厚なりしとは云ふ可らず。而して其詩に於て之れを見るに傑作あり、拙作あり、雜然として混合す。長篇『逍遙篇』(エキスクーシヨン)中のこゝかしこ、『マーガレットのくるしみ』、『われら七人』、『ウエストミンスター寺院』及び『靈魂不滅の歌』などは彼が傑作として知らる。されどこは沙漠中の沃地とも稱すべきもの、其他はこれらのものに比すれば劣ること數等。故に

コールリッヂ

ウォルズウォルスを味はんと欲せば單に以上の數篇にて事足るべし。

ウォルズウォルスは意志の人にして終生確固たる步調を以て一生をたどりしと雖、其友コールリッヂは不世出なる大才を抱きしも充分之れを發展する氣力を缺けり。サミユエル・テーロア・コールリッヂ(一七七二―一八三四)は牧師の家に生れ、早やく父母を失ひぬ。一たびは慈善學校に入學せしも、劍橋大學に入り、後ち轉じて牛津大學に移りてサウジーと交りを結びき。彼れ性來頗る想像力に富みしが、サウジーと交はるやかねて佛國の革命思想に動かされたりければ、こゝに相携へて米國に航し、『パンテソクラシー』(同權政治主義の意)なる新社會を建設せんことを計りたり。此目覺ましき計畫の準備成りて將に目的の地に向つて出發せんとするに際し、サウジー一家に不幸起りし爲めに之れを果ざりき。これより後ちコールリッヂはウォルズウォルスと交はり『抒情詩歌』に『老水夫』(アンシエント・マリナー)を掲げ、暫らくにして兼ねて希望せし如く獨逸漫遊の途に上れり。此行は彼の文學趣味を豐富ならしめたること多く、これよりシルレル等の詩文を飜譯して、獨逸文學を英國文壇に紹介し後日のカーライルの先驅者となりき。彼は一時病

苦を忘れんとの願をもて阿片を喫せしに其後十五年間其犧牲となりて悲慘なる生涯を送りしが千八百三十八年遂に敗殘の生を終りぬ。

思想家

コールリッチは意志薄弱にして、事に當りて激し易く、毫も自制克己の力なく、宛然女性的男性とも云ふべし。これ却つて男性的なるウォルズウォルスと相交はりて相好かりし所以なり。薄弱なる意志をもて人生の行路に失敗せし彼は思想に於ては一偉人なりき。彼は希臘以來の哲學を研究して其蘊奥を究め、又批評眼に於ても先人未發の卓見を發表して、文學史上に新光明を投ぜし事多かりき。彼が作りたる詩歌は其量甚だ多からず、『老水夫の歌』『クリスタベル』『キュブラ・カン』『戀愛』及び歌謠數篇あれど、歌謠を除けば凡て完結せざる斷片なり。散文には沙翁其他の劇詩家を評せしもの最も有名なり。彼が十九世紀の詩壇に及ぼせる影響は甚だ大なるものにして、殆んど凡ての詩人は一たびは彼の作を讀みて感興を呼び覺ませり。

サウジー

ロバート・サウジー（一七七四―一八四三）は終生文筆に從事せし人なり。著す所詩歌あり、小說あり、歷史傳記等ありて、其量甚だ多く、今猶ほ原稿の儘にて殘るもの多し。されど今日に至りては之れを愛讀するもの甚だ少きを以て、多くは世の顧ざる所となれり。牛津大學を出でゝ後ち、理想社會の計畫に失敗するや葡萄牙に遊び親しく其歷史文學を研究せり。後ち欽定詩人に擧げられしが心裕かに筆硯に見ゆる間もなく、一家の不幸頻りに起りて精神錯亂の悲境に陷りぬ。彼が著書頗る多き中に多少名を知らるるは、詩歌には『サラバ』『ケハマの咀ひ（カルス）』『マドック』『ジョアン・オブ・アーク』などあり、散文には『ブラジル史』『半島戰史』『ネルソン傳』『海戰史』などあり。彼は少時スペンサー、ダッソーなどを讀みて、深く之を愛し、將來宗教的叙事詩をものせんと期せしも意を果さゞりき。彼は材料を蒐集し來りて、之れを適當に羅列する才ありしも、美的想像なかりしを以て到底文壇の大勇士たることを得ざりしが如し。

バイロン

噴火山の如き熱火と破壞力とを有し、一時は驍名歐洲を震慴したる惡魔派の主將ジョージ・ゴルドン・バイロンは世にも憐むべき運命を備へて生れ出てぬ。父ジョン・バイロンは不羈放逸なる無賴漢として異域に頓死し、母は良家の令嬢なりしも、性頗る多感多情、奇矯執拗の婦人なりしが、良人の虐待を受けてより一

屑狂亂の度を增しぬ。又バイロンに遺產と貴族の位地とを讓りたる大叔父は有名なる惡德の人にして、常に『惡德公』と呼ばれき。悲慘なる薄命詩人は千七百八十八年實に斯かる家系に生れぬ。始めハーロー學校に學び、尋て劍橋大學に入りしが、其傲岸なる性質は容易に他に屈することを好まず、爲めに屢〻人と紛爭を釀せり。千八百七年『閑日月』なる詩集を出版せしに『エデンボロー評論』は之に對して酷評を加へしかば、バイロン大に激し『英國詩人と蘇國評論家』なる文を草して痛快なる嘲罵を注ぎぬ。後ち約三年間歐洲大陸を旅行し、歸りて『チャイルド・ハロルド』二卷を出し、一躍して大詩人となりぬ。之より彼は交際場裏の花役者となり、其端麗なる容貌、風采は幾多齡妙の婦女子を惱殺せり。此頃『不信者』『アバイドスの花嫁』『海賊』『ラ、』等の作あり。千八百十五年ミルバンクなる貴族の令孃を娶りしが琴瑟相和せず一年の後ち、遂に破鏡の嘆ありき。こゝに於て今迄彼を謳歌せし社會は此事件を以てバイロンの不德に歸し、痛く彼を批難しぬ。こゝに於て彼は不平不滿やるせなく『コリンスの圍み』『パリッシナ』などに胸中無限の憤滿を洩らして再び歐洲漫遊の途に上れり。彼はこれより酷薄無情なる社會を深く怨み、斷然社會に挑戰を布告せり。又自暴自棄の餘り放肆淫逸に流れ、酒色に耽りて僅かに心をやれり。行く〳〵南歐の名都市を遊歷せし程に、シエレーと邂逅して、深き交りを結びぬ。『シロンの囚人』『マンフレッド』『ベッポー』『ドン・ファン』『ケイン』『マリノ・ファリエロ』『マゼッパ』の諸篇はいづれも此伊太利滯留中の作にかゝれり。彼は斯くの如く多作せりと雖、もと自家の本領は詩人にあらずとして、却つて世の文士を輕視する傾向ありしが、千八百二十三年全く詩筆を捨てゝ、希臘に向ひぬ。これ當時希臘に一團の義軍起りて、土耳古の羈絆を脫せんとせしかば、バイロンは此義軍に投じて、希臘獨立の偉業を助けんとせしなり。然るに未だ其志を成すに至らず、千八百四十二年四月ミッソロンギに於て熱病に罹りて倒れぬ。

バイロンは新舊兩派の詩風を一身に集めたる詩人にして、一方に於てはポープ、ドライデンの詩風を代表すると同時に、一方に於ては極めて極端なる破壞的感情を代表したり。世はウォルズウォルスの如き冷靜なる哲學的詩歌に滿足せざりし時に當り、彼は肉あり血ある人間性慾の活動を敘し、宗教道德の形式的

社會律を打破して主我的個人性の狂態を描けり。世は又スコットの中古時代の武勇談に耳を傾けし時に當り、彼は一層人目を聳動するに足るべき近世思想を歌ひて世の好尚を一身に奪ひ取れり。彼は有名なる健筆家なりき。四日にして『アバイドスの花嫁』を草し、十日にして『海賊』を終はりたるが如きは其一例にして、自ら作詩は談笑と同じく容易なるものとなせり。されどいづれの作を取りて之れを見るも、其主人公は悉く一樣同型の人にして、異名を附し、其境遇と事情とを別にしたるに過ぎず。其多情多感にして我執我慾の權化たるは、實に作者自身の半身なりしなり。從つて詩人に必要なる想像的事件を結合し、種々の性格を發展し行く技倆に乏しきを以て、戯曲的才能は殆んど彼の與り知らざる所なりき。

文名を博せし所以と失墜せし所以

人はバイロンを以て文界の那翁となすことあり。兩者其起つや大波を擧げて歐洲全面を震盪し、其破壞力や魔王の如く猛烈を極めたり。されど一たび其地位を失墜するや、暴風一陣去つて跡なきが如くまた其の功績の永く稱すべきものなし。世に道德律以外に自然律とも稱すべき權力主義あり。不完全にして罪惡の横行する現世界にありて當面の必要物は正義仁愛よりは寧ろ戰鬪的威力なり。彼の口に道德を唱へて、手に威力を携へざる者は人生の劣敗者、夢想家なり。若しこゝに人あり、他の敢て望んで得ざる所をなして、暗雲慘憺たる世路を縱横無盡に濶歩する者あらば、彼は所謂英雄豪傑にして一世の推重する所となるや必せり。人は又其德性如何を問はざるなり。バイロンは決して哲學者にても、思想家にてもあらざりき。されど彼が資性は不思議にも無意識的に此眞理を闡明することゝなりしかば、革命の風雲に心不穩なりし歐洲社會は彼に於て最も適切痛快なる暗示的教訓を得たるなり。これ彼が詩歌の爰時にして一代の歡迎を得たる所以なり。然るにバイロンの詩は辛苦經營の作にあらず、單に自家胸中の憤怨を洩らす手段にして、何等深遠高大の想なし。眞正の詩歌は斯かる無造作なる激情の發表にあらずして、推敲鍛錬の工夫を積まざる可らず。バイロンの詩歌は噴火山頂の熔岩の如し。一時は非常なる破壞力を有せしも、一旦冷却すれば、瓦礫も啻ならざるなり。彼れの如きは時代精神を背景として立ちしを以て自己の價値以上に見られしが、背景一たび消失してよりは

後光永へに消え去りぬ。これ即ち彼が名聲一たび高くして直ちに失墜せし所以なり。若し彼れに永續すべきものありとすれば、そは磨かざる玉にあらざれば、粗金の如きのものか。

シェレー傳

惡魔派に屬する第二の詩人をシェレーとなす。彼は思想に於ては寧ろウォルヅウォルスと共に哲學派に屬すべき理想派の詩人なり。深く革命思想の影響を受けて人類將來の圓滿なる革命時代を夢想し、之れに對する惝恍の念暫らくも止まざりき。而して此理想觀念の半面は現代社會に對する激烈なる破壞主義となり、現存の宗教と社會律とに對して極力反對することゝなれり。特に彼が生活は全然自然主義を實行したるものにして、意の向くが儘に行動し、人情に反し道德を蹂躙すること、恰も蠻人か禽獸にも類したりき。こゝを以てバイロンが無意識的に唱導せりし自然主義は計らずも、シェレーに於て完全なる實行者を見るに至りしと云ふべし。

バーシー・ビシ・シェレーは千七百九十二年貴族の家に生れしが、母に似て容貌秀麗なる美男子なりき。幼にして聰明多感の性にしてやゝもすれば懷疑的考察に耽る傾向ありき。彼れ始めイートン學校に送られしが、英國學校の弊風として上級生が下級生を虐待するを見て心甚だ平ならず、自らは何處までも自己の我執を貫かんとつとめぬ。此時より早やくも社會組織に反抗する思想を抱き、現實を見ること腐肉の如く、其諸々の制度慣習を輕んずること塵芥の如くなりき。後ち牛津大學に入り此社會に對する憤怨の情は一層の甚しきを加へたり。特にヴォルテーア、ルッソーなどの激烈なる革命論を讀むに至りて殆んど白熱に達せり。こゝに於て彼は斷然『無神論の必要』なる文を綴りて、基督教義を論駁して公然學校の當局者に戰を挑めり。彼は遂に退學を命ぜられぬ。シェレーの從妹にハリエット・グローヴなる可憐の少女あり。兼ねて長上の許可を得て許嫁の契約ありしもシェレーの無謀なる行爲に驚きたる兩親は如何て快かるべき少女は遂に他人の有に歸しぬ。彼れ憤然倫敦に上り、父の許可なくしてウエストブルックなる一少女を携へて蘇國に奔りて結婚せしが、貧困身に逼りて事意の如くなる能はず間もなく之れと離緣することゝなれり。此婦人は後ち已が悲境を嘆じ姙娠の身を以て入水して死しぬ。これより先きシェレーは時の名

士ウキリアム・ゴッドウキンと相識りしが、此人も亦彼と同じく極端なる破壞論者にして、宗教、道德を排斥せしを以て互に意氣投合せり。其妻は嘗つて非結婚論を主張せしも、巴里に於て一米人と結婚し、二年の後ち其捨つる所となりしかば、將に自殺せんとせし所をゴッドウキンに助けられし婦人にてありき。其間に生れたるはメリーと云ふ佳人にして『フランケンスタイン』なる物語を作りし女流なり。齡十六歲にして人の妻となりしが、貞操を破りてシエレーと通じ相携へて瑞西に奔りて夫妻となりぬ。シエレーが始めてバイロンと交はりしは此の時のことなり。シエレー雖きにはゴッドウキンの說に動され、今又たバイロンの人物に接して、彼が生得の性行はこゝに一層の狂熱を加ふるに至りたるは明かなる事實なり。後ちメリーを携へて英國に歸へりしに、國人は彼れを蛇蝎視して之れと語を交ふるものなかりしを以て、再びセネバを指して旅路に上りぬ。彼が本國を出てしは千八百十八年のことにして、自然の風光を樂みつゝ悠々詩作に從事せり。千八百二十二年の夏のこと、一友と共に一葉の扁舟に棹して沖に漕ぎ出でしに、暴風俄かに起り來り、海は大波をあげ、惜むべし舟は覆へり詩人は遂に歸らずなりぬ。二三日の後其死屍海濱に泛び着きければ友は哭く〳〵之れを收めて厚く葬れり。其墓碑にはコル・コルデウム(心の心)なる拉典文を刻みて銘となしぬ。

詩作

シエレーの處女作『女王マッブ』は、千八百十三年に出版せられ、いたく革命思想の影響を示めせり。第二の作『アラストル』(一八一六)は未來の革命時代に憧憬する詩人の悲愴を歌ひて作者自身のおもかげをうつせり。『イズラムの謀叛』は豫言者的詩人の本領を示めし、人類は仁愛によりて救はるべきことを論破し、次に出でたる『プロメジウス・アンバウンド』の序論となれり。此詩は人類の代表者プロメシウスが罪を得てジユピター神のために身を斷崖に拘束せられしに、偶〻仁愛の權化アシアなる者こゝに來り、ジユピターを破りてプロメシウスを解放し、二人合して一つとなり、こゝに人類理想の成就せらるゝに至りたることを敍せり。其他『ロザリンドとヘレン』『ジユリアンとマダッロ』『センシ』『アドナイス』『エピプシキデオン』『アトラスの巫女』などありて或は豫言的空想を述べ、或は自由仁愛を謳歌して、いづれも神韻縹々たる感想を歌ひ出せり。シエレーはウォル

キーツ

ズウォルス、キーツの如くに自然の風物を捉ふることしかぐ確かならざれども、廣大無邊なる光景及び雲煙漂蕩たる狀態を描寫するに最も妙を得たり。彼の抒情詩中『雲』の如き『雲雀』の如きは實に其特徴を最も分明に表現せしものと云ふべし。從つて彼が後世に對する感化の如きも具體的に之を說明すること難く、寧ろ其影響は幽遠高雅の感想にありしが如し。

吾人が次に學ぶべき詩人はジョン・キーツ（一七九五―一八二一）なり。彼は通常惡魔派に列せらるれど、其性格に於ても閲歷に於ても全く前二者と異れり。彼にありては時代精神の影響もなければ、人類に對する同情の念もなく、超然として現在世界を逸して、ひたすら純美飄渺の仙境に逍遙せり。惜むらくは此派の常として天は充分に其詩才を發揮する年月を藉さゞりしことなり。彼は前二者の如き貴族の出にあらずして、貸馬屋の子なりしを以て僅かに一私塾の教育を受けしのみなりき。生れて容貌秀麗、人の下風に立つことを好まざりしを以て、最も御し難き少年として人の注意を惹きぬ。十五歳の時家を出て、外科醫の弟子となり、行く〳〵は其業を以て立たんとせり。されどもと蒲柳の質にして物に動し易く、鮮血の滴るを見るだにも堪へ得ぬ有樣なりしかば到底此道にて成功すべくも思はれざりき。居ること數年、去りて倫敦に出で猶ほも醫學の研究に從事せしが、文學に對する趣好深かりければ、專ら希臘文學を始めとし、英國詩人を鑑賞する人とはなりぬ。彼は世にも見すぼらしき一室に引き籠りてむかしゆかしきホーマー時代に思ひを寄せしが、此頃より肺疾其身を苦め屢〻血を吐くに至り、多望なる將來はやゝもすれば暗雲慘憺たるものありき。彼がコックネー派（倫敦派）のレー・ハントと交はりしは此時のことにして、之れより其推奬指導を受けしこと甚だ多かりき。キーツが詩集は千八百十七年に始めて現はれしが、多く生硬にして世の注意する所とならざりき。翌年『エンデミオン』出でしに、世の批評家は甚だ殘酷なる批評を加へ、作者はかくの如き拙作を出す權利なしと罵倒せり。多感なる年少詩人はこれがために深く心を痛めしと雖、容易に屈することなく、奮勵一番より善き作をものせんことを期して自己を信ずること益〻强かりき。然るに、此時彼にとりて最も不幸なる失戀事件起りて深く彼が心身を枯渴凋衰せしめたり。彼は英國にありては餘命いくばくもなきこ

詩風

とを知り千八百二十年『エンデミオン』出版後の作詩を集めて之れを出版し、次に旅裝を整へて伊太利ネープルス指して出發し、留まること二年の後羅馬に於て歿せり。彼が二十年後の出版にかゝるものは『ハイペリオン』『カリドン』『ラミア』『イザベラ』『聖アグネス祭の前晩』の諸作なり。彼れ嘗つて嘆じて曰く『我が名は水の上に書かれたる文字の如し』と。センツベリー之れに註して曰く『されどそは永生の水の上に書かれしなり』と。

キーツ死して後ち、未だ幾干もなくして彼の令名俄かに擧がれり。シエレーは彼がために『アドナイス』を作り、バイロンは生前彼を解する能はざりしことを悔み、又其他の人々も擧つて彼を稱讃しぬ。思ふに彼は一讀して直ちに解せらるゝ詩人にあらず、讀者の最も精妙なる想像と空想に俟たざる可らざる所あり。されば『ロセッチの如きも始めの程はキーツを解する能はざりしが晩年に至りて始めて其偉大なるに驚き、テンニスン、ブラウニングも亦これと同一の經驗を經たり。彼が斯かる大なる感化を及ぼすに至りたる所以のものは其詩形の勝れるにあらずして、全く内容の勝れるためなり。彼は他の詩人の最も美はしき精

ムーア

粹をは殘す隈なく學び來りて之れを自家藥籠中のものとなして、彼が天成の特色を充分に發揮しぬ。彼が作はいづれも希臘或は中古時代に材を取り纖麗なるもの妖婉なるものなど、他に多く其比儔を見出すこと能はざるものなり。

以上の七大詩人の外に當時有名なる詩人を列擧すれば左の如し。

トマス・ムーア（一七七九―一八五二）は詩人、作歌者兼音樂者にして愛蘭土ダブリンの出なりき。父は裕ならぬ商店を開きしも多少の資産ありければ、大學に入りて法律を學びぬ。此頃より早やくも文學の嗜好深くして、希臘の抒情詩人アナクレオンを飜譯して先輩の重んずる所となりしが、千八百年倫敦に來りて之れを出版せり。此飜譯は原文の趣味よりも寧ろ譯者の風懐を交へし所多く、却つて世の喝采を博しぬ。千八百六年『歌謠及び書翰』を出し、翌年『アイリッシ・メロデイ』第一卷に於て母國の濃艶多感なる歌謠に和するに美妙優麗なる音樂を以てせしかば、人々は爭ふて之れを愛唱せり。此歌集は其後二十五年にして第十卷を出し之を完結して少からぬ收益を得たり。千八十七年には有名なる『ララ・ルーク』出づ。これは東洋の物語を韻文にて綴りたるものにして、いづれも妄

像幻夢のこと多く、實際生活に遠かれり。其後ち『フッヂ家族』『天使の愛』『バイロン傳』の著あり、ついで愛蘭土史の編纂に着手せんとせしも身既に老境に向ひて果さず、千八百五十二年に歿せり。彼はもとより大詩人と稱す可らざるも、最も愛好すべき詩人として萬人に唱せられ、又愛蘭土の解放に與へし影響は決して少からざりき。

キャメル

トマス・キャメル（一七七七―一八四四）はグラスゴー大學の出身にして、在學中既に『希望の快樂』を著はしてグラスゴーのポープと呼ばれし程なりしが後ち、獨乙に遊び親しくローマンチック風の感化を受けて歸國せり。長篇としては如上の作の外に『ジャートルード・オブ・ワイオミング』をものせしも、彼の長所は寧ろ五六の短篇に現はれたり。即ち『バルテック海戰』『英國水兵』『ホーヘンリンデン』『兵士の夢』『末人』『ウリン公の令嬢』などにして、いづれも英國人の武勇愛國の觀念を鼓吹せしものなり。彼は晩年グラスゴー大學の總長に任ぜられ、聲望一時はウオルズウオルス、コールリッヂを壓する程なりしと雖、今日は單に以上の短篇によりて知らるゝのみ。

ハント

ランドル

ブード

ヘーマンス

レー・ハント（一七八四―一八五九）は評論家と詩人とを兼ね、惡魔派の親友となりて之れを助けしこと少からざりき。始め『エギザミナー』なる新聞を發刊し、用意周緻なる批評を掲げしが、後ち『リミニ物語』なる詩を作りて令名を博せり。其他續いて伊太利の詩歌に倣ひたる詩歌及び多量の散文をものしぬ。

ウオルター・サヴエージ・ランドル（一七七五―一八六四）は古代の文人特にピンダー、エスキユラス、シセロに私淑せり。詩歌には『ゲービル』『ジユーリアン伯』あり散文には『想像的會話』最も名あり。文章奇峭莊重なれども、時に辛烈に失することなきにあらざりき。トマス・フード（一七九九―一八四五）は晩年『シャツの歌』を以て廣く世に知られしも、生來多病にして敗殘の一生を送れり。ヘーマンス夫人（一七九一―一八三五）は湖畔派詩人に交りを結び、凡て七卷の詩集を著はし、何等高遠なる思想なきも、優麗典雅の致に富み、今猶ほ兒童に愛唱せらるゝもの少からず。

第三章　ヴヰクトリア朝の詩歌

詩歌の大勢

十八世紀末葉に起りたるロマンチック詩風は十九世紀前半に於て頗る見るべきものあるに至り、幾多の名流續々として蹤出せしが、後ち一時習らく停滯の狀態を呈出せり。ヴキクトリア朝に入りて春陽來復、百花爛熳の光景を演じ、其盛なること、前半に勝ること數等なりき。蓋し十九世紀後半紀の詩歌は俳句の華麗圓熟せることに於て、其觀念の深遠博大なることに於て、又其繪畫的表現と音樂的調諧の巧妙なることに於て、エリザベス時代の極盛期に比して毫も遜色なかりき。其純文學としての價値に於て將た又其情熱の清新なる點に於ても頗る見るべきのものであるのみならず、詩歌の內容に現はれたる思想の優秀なることに於ては寧ろウキクトリア時代を以て勝れりとすべし。曩きにも云ひし如くエリザ時代にありては英國の詩人は重もに伊太利の情熱を學ぶに過ぎざりしも、ヴキクトリア時代にありては佛國革命と獨逸思想との影響を蒙むりて、單に人生の浮沈、愛憎のみを歌ふのみに止まらず、進んで人生問題、宗教問題の如き深奧なる問題を歌ふに至りしを以てなり。吾人はこゝに文學は人生と相涉るものなりや、或は單に藝術其物のためにするものなりやとの問題を論ずる餘裕を

テンニスン

有せずと雖、兎に角此時代に於ては如上の現象が一旦明白になりて、其及ぶ所決して少なからざりしことを記憶せざる可らず。

アルフレッド・テンニスンは新詩風を代表せる先驅者として先づ吾人の注意すべき大詩人なり。テンニスンは千八百九年リンコーンシアの牧師の家に生れぬ。幼より作詩の嗜好あり、遊戯の際にも石盤を手にして、これに韻語をものすることを以て無上の樂みとなしゝが、十二歳にて早やくも意の儘に之れを綴ることを得たり。齡十八歳の時彼は二人の兄フレデリック、チャールスと協力して『二人兄弟詩集』なる詩卷を著せり。後ち劍橋大學に入り、將來名をなしたる幾多の友人と交りを結び、千八百二十九年には懸賞詩に當選して名譽ある金牌を受領せり。彼がアーサー・ハラムと相知りて莫逆の友となりしも此時のことなり。千八百三十年『抒情詩歌』出て、三十三年には『詩集』現はれて毀譽相半ばせしも、世は流石に天才のおもかけをこゝに認めざるを得ざりき。此年アーサー・ハラム不意にヴキンナに客死せりとの悲音に接し、彼の哀悼痛哭甚だ深く、これより精神上の苦悶に陷りて人生問題に對する疑問容易に晴れざりき。されど彼はこれ

により全く俗念を斷ち、專ら文藝の爲めに身を捧げんと決心するに至れり。かくて千八百四十二年迄沈默を守りし彼は此時再び詩集を出版し舊作の粹を拔きこれに新作を加へたり。これより彼の詩名漸やく知られ、四十七年『プリンセス』に於て社會の活問題なりし女權問題を諷詠し、五十年『イン・メモリアム』を出だし、アーサー死歿以來の精神的苦鬪の凱歌を擧げて、彼が偉名は普く世人の認むる所となれり。此年ウオルズウオルズの後を繼ぎて『欽定詩人』となり、又エミレーなる婦人と結婚して最も圓滿なる家庭を作りしが、翌年新夫婦相携へて伊太利に遊びぬ。其後ち『モード』『アイデルス・オヴ・ゼ・キング』『エナック・アーデン』及び數篇の劇詩をものせり。晩年は特に記すべきことも無く、いと靜穩清高なる生活を送り千八百九十二年此世を去れり。

彼の先驅者

テンニスンが始めて詩歌を學びしはトムソン、バイロンなりしが、バイロンの死を聞くや、詩界の明星地に隕ちて世は暗黑となりたりと長大息を洩らしたり。されど彼が資性は決して永くバイロンを宗とするものにあらず、轉じてウオルズウオルス、シエレーを崇拜することゝなりしが、これも暫らくにして止み

三轉してキーツに移れり。キーツが婉麗にして典雅なるはテンニスンの最も悅ぶ所となり、其後永く其感化を受けぬ。蓋しテンニスンは之をキーツの完全圓滿に進歩發達せし人物と見るを得べく、キーツにして天壽を完ふしたらんには吾人は更らに一人のテンニスンを得たりしやも知る可らず。テンニスンの如く巧みに他人の長所を一身に集めたるは少なく、而かも之れを充分圓熟渾成する年月を與へられたるを以て、世にも稀なる美果を結ぶことを得たりしなり。

作詩上の苦心

彼が詩をものするやバイロン、スコット等の如くに一氣呵成にして止む人にあらざりき。彼は最も嚴肅なる態度を以て一字一句の微に至るまでも頗る苦心慘憺し、同じ作にても版を重ぬる毎に訂正に訂正を加へて常に最もよきものを天下に示さんことを勉めぬ。又自然界のことを敍するに當りても漫然として事物を敍することなく一葉一枝の細に至るまでも實際に反くことなからんことを期せり。されば其用語の美はしくして適切なることはポープに似て、却つてこれを凌駕せり。其內容に至りてはポープの如くに乾燥無味に失せず、シエレーの如く飄逸に流れず、キーツの如く單に婉麗に陷らずして、高潔なる思想

時勢の明鏡＝詩歌の極概

と明快なる措辭と相俟つて永く世の好尚を飽かしめざりき。こゝに彼が名譽として記憶すべきことは情熟に湧く青春時代にありても、一回も不潔にして肉慾に訴ふるが如き語句を弄せざりしことなり。彼が一たび戀愛の秘義に觸るゝや、一種恐畏の念を以て常に輿床しき沈默を守り、容易に多言せざるは萬人の欽仰をつなぐに足るべし。而して到る處高思妙想に充ち、人をして覺えず清高なる感興の妙境に遊ばしむるを以て、懷疑僞善の時代にありて靈界の大事を宣言するには好箇の詩人なりしと云ふべし。彼はバイロンの如く情熱の詩人にあらず、又ウォルズウォルスの如く冷靜の詩人にもあらず。之れを譬ふれば、夏の朝の快活にして清明なるが如く、薰風朝日に誘はれ來りて希望と光明とを私語するに似たり。されば一たび彼に來れば何人も其光明に接し、溫情を掬して、頓みに心靈の暢達するを覺ゆるなり。彼は實に十九世紀の光明界の代表者なりしなり。

テンニスンは單に藝術の詩人にあらず、兼ねて哲學、教育、宗教道德など苟も社會人類と相涉れるものには少からぬ興味同情を感じて、當時の時代精神を表現せり。『ロックスレー・ホール』『懶惰者』『美術殿』『佳人の夢』などの如きいづれも藝術的技能を發揮せしと同時に、作者が人生に對する深き思念の存する所を知るに難らず。『二つの聲』は古來幾多の思想家を苦めたる身靈の爭鬪を敍し、宛然『傳道書』を讀む感あらしむ。『イン・メモリアム』は彼が傑作の一にして、一たび憂愁苦悶の思ひに惱みて懷疑不信の淵に沈みしも、やがて人生の歸趨する所を信じ向上精進の態度に移りたることを示せり。『プリンセス』は當面の教育問題を捉へ來り、之れをやるに諷嘲の意を以てし、無趣味なるべきものをば最も面白く愉快に論斷せり。『アィデルス・オヴ・ゼ・キング』は十九世紀の『失樂園』とも稱すべし。圓卓の理想國は隱れたる罪のために敗るゝや明君世を去つて再び歸らず、世は昔しながらの痛ましき有樣になりたることを敍せり。此長篇はアーサー王を中心とし、これに關係せる種々の古傳を集めたるものにして、辭句の洗練、思想の幽遠なるなど誠に得難き名篇なり。其作中に描かれたる人物は材を古代に執りしと雖、いづれも英國人本來の特色を發揮し、近代精神の表彰に努めたり。故に彼は人生其物を描寫せんとせしよりは寧ろ、近代の英國人士を描寫することに長

じたりと云ふを得べし。これ彼を以て『英國詩人』と特名する所以なり。特に彼は宇宙の大理法に深き信頼を捧げ急進に失せず、保守に傾かず、常に眞摯穩健なる態度を持續して常識の軌道を逸せざりしは英國紳士の好模範と云ふべし。

ロバート・ブラウニング（一八一二―一八八七）はテンニスンと共に當代の高尚なる宗教趣味を解せし詩人として知らるれども、其特質に於ては大に異なりたる所多し。テンニスンは寧ろ客觀的詩人として事實を最も鮮明詳細に述べしが、ブラウニングは主觀的詩人として重もに人心内部の心理的現象を披瀝せり。ブラウニングは其措辭に於ても思想に於ても頗る晦澁難解を極め、通常の讀者は殆んど暗中物を探ぐる思ひなきにあらず。これテンニスンと頗る趣きを異にせる所にして、ブラウニングの作詩上一大缺點となす所なりと雖其心理的解剖の精妙なる靈腕に至りては、世間此種の詩人に乏しく沙翁を除けば恐らくは彼の右に出づる者なかるべし。彼はテンニスンの如く必らずしも軌道を逸せんことを愛へず、個人最高の情感に導かれて働くを以て人生最上の義務と信せしを以て其作詩の覺悟も頗る異れる形式を執るに至りしなり。テンニスンは重もに英國人特に近代精神の英國人を發現せしも、ブラウニングは重もに伊太利人を說き文藝復興時代の精神を傳へんと欲せしに似たり。從つて其描寫する所の人物もやゝもすれば敗德不義の人多く、或は冷酷なる藝術偏信主義を以て溫愛なる人情を壓殺せんとする有樣を述べたり。其筆に上りし人物の種類に至りては甚だ多種多樣にして、善人あり、惡人あり、善惡混合せる者あり、僞善者あり。これ拉典人種はチユートン人種の如く單純なる性格にあらざるが爲めにして、凡て性格描寫の伎倆を揮はんとせばこは最も恰好なる資料と云ふべし。沙翁が材料を此人種に求めしこと多きも一はかゝる理由ありて存するならんか。

ブラウニングは素封家の家に生れ、父は學問藝術の嗜好深く好んで中古時代の珍本古書を集むることを以て樂みとなしを以て、幼より文藝に對する鑑賞の力を養ふことを得たり。少時暫らく私塾に送られし外は重もに自宅に家庭教師を聘して諸般の學術を研究し、尋いて倫敦大學に入りて自已の好む所のものを學習すること僅かにして退學せり。始めは如何なる職業に從事せんかと心惑ひしが賢明なる父の推奬によりて遂に文學を以て世に立たんと決心する

ブラウニング

ブラウニングとテンニスン

拉典人種

傳

に至れり。これより先き年十二才の時一詩卷を作りて、之れを父に示めせしに、父は之を出版せんとて果さゞりしが、彼は後日此未熟なる作品を世に出さゞりしことを悅びたり。二十才の時『ボーリン』を著はしゝも、世は解す可らずとなして之れを斥け、後ち二年『バラセルサス』を出すに至りて少しく人の註意を惹けり。これより『ストラッフォード』『ソルデッロー』『鈴と柘榴』『男と女』『劇的人物』など續々として現はれしも、未だ容易に稱揚せられざりしが、千八百六十八年『環と卷』なる長篇をものするに至りて始めて彼の名は嶄然として喧傳せらるゝに至れり。かくの如く彼は詩歌に志してより、約三十五年間勤勉努力して自己の手腕を鍛練し、漸やく老境に進みて大詩人たることを確認せられたるなり。彼は屢〻伊太利に遊びて親しく其文物に接せしが千八百四十六年彼の一生に於て最も記憶すべき一事件起りてより後ちは重もにフローレンスに住居せり。そは當代の女詩人エリザベス・バーネットと密かに結婚せしことにして、それより千八百六十六年迄は最も高潔なる夫婦の關係を結び圓滿幸福なる生涯を送りしを以て最も美はしき名什は多くは此期間に於て作られき。彼女死してより後ちは深く

『環と卷』

抒情詩

人生の寂寥を嘆ぜしが如く、暫らくは此大損失を忘るゝこと能はざりしが、精神漸やく恢復するに至りて一層靈活なる生涯に移り不朽の大作を後世に遺すことを得たるなり。彼が晩年は最も光榮ある時代にして一方に於ては絶えず作詩に從事し、一方に於ては世間の稱讃益〻高くして何時しか詩界の月桂冠を戴きて此世を去ることゝなれり。

ブラウニングの長篇中の最大傑作は『環と卷』なり。此詩は約二萬行の無韻律よりなり、十六世紀伊太利に行はれたる事情頗る纒綿錯綜せる殺人罪に材料を執り、これに詩的想像を加味したる人生研究の一大論文なり。始め殺人の犯罪に付き種々樣々なる揣摩臆說を揭げたる後ち、漸やく事の眞相を判知するに至る結構にして、時には迷宮をたどるが如く、時に底なき淵に投ぜらるゝが如きことありて、最後に漸やく光明に接することを得るなり。恰もこれ技藝家が金塊を携へ來りて苦心慘憺なる工夫の後ち、燦爛たる指環を製作するが如し。これ『環と卷』との名ある所以なり。彼が短き抒情詩には名吟多く、いづれも作者の幽遠深邃なる思想を窺ふことを得べし。其中最も著はれたるは『キャヴリアー・チュ

ーン』『ヘルヴェ・リエル』『ピッパ・パッセス』『我が亡伯爵夫人』『アブト・ヴォグラー』『ゴンドラに乗りて』などなるべし。彼は音樂に深き嗜好ありければ、其藝能を頗せし詩歌少からざる中に見童のためにものせし『ハムリンの吹笛者』は最も秀てたり。彼が作はいづれも獨語的形式を取りて、主人公が自己の經驗感懷を獨語するが如くなせしものにして、恰も沙翁劇中の獨語を聽くが如し。又巧みに省筆法を用ひて言外の意を寓し思想情感は時に電光石火の如くに閃動するを以て、其筋をたどること頗る困難なること多し。

特徴

ブラウニングの詩歌に對する是非の論は今日未だ一定せず。或人は其思想の高遠なるをめづれども、或人は其晦澁なるを難ず。兎に角彼は幾多の缺點を有すれども、甚だ偉大なる詩人なるとは何人も異論なき所。思ふに彼は嶄新奇拔なる新天地を開拓せしことなれば此新思想、新希望新光明を傳ふるとは平板簡易なる言語の到底企及し得ざる所なりしや必せり。從つて曉えず難解に陷りしもの、此上に渾成典雅を求むるは蓋し求むる人の過失ならんか。

ロセッチ

ダンテ・ガブリエル・ロセッチ（一八二八―一八八二）は畫家と詩人とを兼ねたる純中古派に屬する人なり。父ガブリエルは亡命の伊太利人にして倫敦に留まりて、キングス・カレヂの伊太利文學の教授となり、ダンテの熱心なる鼓吹家なりき。母フランセスは伊太利人と英國婦人の間に生れたる女にして、四子を擧げしがいづれも文藝の才ありき。長女マリア・フランセスカは『ダンテの面影』の著者として聞え、第三子ウヰリアム・マイケルは有名なる批評家として現存し、末子クリスチナ・ジョルジナは女詩人として令名を擧げたり。ダンテは第二子にして、始めはキングス・カレヂに學びしも生來繪畫を好みしかば十五の頃より志望益〻堅く皇立美術院に入り專心之れが研究に從事するに至れり。其後當時の畫家ミレー等と謀りて『プリラファエル・ブラサーフード』なる會合を結びて專らラファエル以前の赤裸々たる自然の風物を描寫せんことに工夫を凝らしぬ。千八百五十年此の一派の人々は其の主張する所の文藝趣味を鼓吹せんがために『ジャーム』なる雜誌を發刊せしが間もなく廢刊せり。ロセッチが處女作とも云はるべき『ゼ・ブレッセット・ダモゼル』は此紙上に始めて掲載せられたるものなり。一日彼は美人畫のモデルを得んと欲せしにエリザベス・シッダルなる婦人其請ひに應じ

て來りしが此婦人は至つて文藝の趣味深かりしを以て、交情漸やく厚く、千八百六十年に至りて結婚するを得たり。彼が此婦人に對する愛情は殆んど崇拜に近く、繪畫及び詩歌に於て之を表現し、或は之をビアトリチとなし或は天使となして永久に傳へしが、越えて六十二年に至り此可憐なる婦人は不圖病の床に打ち臥して無常の風に散らされぬ。ロセッチは爲に悲嘆措く能はず、一時は人心地もなかりしが、これ迄妻を喜ばせんとて作りたる自筆の詩集をば開ける儘に亡人と相對せしめて棺の内に納めたり。かゝる程に彼の友人スウヰンバーン、モーリス等は詩人として名を擧げしを以て、自已も試みに詩集を出版せんと思ひしかど、そは皆亡妻の墓中に埋められしを以て、如何ともすると能はざりしが、遂に友の勸め止み難きまゝに、之を發堀して千八百七十年に出版し、一躍して大詩人の班に列するに至れり。然るに翌年ロバート・ブッカナンなる人ロセッチ一派の詩風を批評して「肉感派」として大に之れを攻擊せしを以て、彼はこれがために痛く心を傷ひ殁、不眠症に陷りて容易に恢復すること能はざりき。千八百八十一年第二の詩集「バラッドとソンネット」を出し、僅かに心をやりし後ち、翌年遂に亡妻

の跡を慕ふて永き眠りにつきぬ。

ロセッチの詩歌に現はれたる最も顯著なる特徴は中古時代の一種神祕なる戀愛なり。彼が凄婉幽玄なる情感は常に美妙なる樂聲的詩句の間に現はれ、これに加るに繪畫的描寫を以てせしを以て、中世紀の神韻飄渺たる神祕は悉く一種の情熱を帶びて生動するに至れり。特に作者が妻に對する戀愛の情は彼を導きて殁、夢幻の靈境に行きてゆかしさゝやぎを偲ばしめぬ。此特徴は先づ『ゼ・ブレッセット・ダ・モゼル』に現はれしが、其後ちいづれの作を執りて見るも之れを認むることを得べし。『一閃の光明』『バアス・ボンド』『シー・リミッツ』『杖と旅袋』『シスター・ヘレン』『ジェンネー』『白帆の船』及びソンネットを集めたる『ゼ・ハウス、オヴ・ライフ』などいづれも嶄新なる情感を歌ひ出せり。彼が文壇に與へたる感化はテンニスン或はブラウニングの如くに用語或るは思想の上にあらずして、全く此清新神祕なる情感の方面にありしが如し。而して此感化たるや決して表面に現はれしものにあらずして隱微なる間にひそみ、色彩の如く薫香の如くになつかしく忘れ難きものあり。

前ラファエル派

ロセッチ、スウヰンバアン、モーリス等を稱して通常前ラファエル派と云ふ。此名稱は始めミレー、ハント、ロセッチなどの畫風に用ひられて彼等がラファエルの如き大畫家をも斥け、其の以前に溯りて全く自然を直寫せんと志せし者を示めせしが、其の後ち轉じて同主義を標榜して詩壇に一新派を打ち立てたる純粹なるローマンチック詩風を呼ぶ言葉となれり。彼等は在來の一切の拘束習慣を全く打ち捨てゝ虛心恬淡に自然につきて其眞相を傳へんと期せしを以て、これまでのローマンチック詩風に一段の光彩を添へたるものと云ふべし。而して此主義の鼓吹者の地位に立ちしはロセッチなりき。

スウヰンバアン

チャールス・アルゼルノン・スウヰンバアンは音調聲律の詩人として有名なりと雖、未だ一般の讀書界の歡迎を受くること能はず。特に彼は文藝美術は道德宗教以外に獨立すべきものなりとの意見を抱き、時に世俗的信仰を輕んじ、肉的表情の記事を敢てするを以て、未だ人の愛好を受くること能はざるなり。されど現今英國の名ある評家はいづれも彼を稱揚して當代第一流の詩人なりと推さゞるものなし。彼今猶世に存するを以て、未だ之れを評定する時期にあらざ

傳

るべく、將來何程の光彩を放つべきかは未定の問題なり。

スウヰンバアンは千八百二十七年に權門に生れ、先輩シエレーの如くに始めイートン學校に學びし後ち、牛津大學に移りしも業を終はるに至らずして去れり。されど其理由はシエレーと異なりて、專ら自己の好む所に從ひて文藝趣味を養はんと欲せしに似たり。彼は生來言語に對する非凡なる才を抱きしかば歐洲諸國は云ふに及ばず東洋諸國の言語に至るまで之を研究し、以て獨特の聲調音律の革新進歩を圖れり。千八百六十年劇詩『クイン・マザー・エンド・ロザモンド』を著はし多少の成功を見しも、自らは未熟の作として、後日之れを己が詩集より取り除けり。五年の後希臘風の劇詩『アタランタ・イン・カリドン』を公にして文學者間の視聽を聳動し、翌年『ポエムス・エンド・バラッヅ』を出して詩壇に一新詩調を生めり。此詩は毀譽相半ばし、文藝好尚家は痛く之れを稱讃し、一般讀者は囂々として其非宗教なるを攻擊し、嘲笑痛罵は雨の如くに彼の頭上に加へられぬ。彼はもと文學を以て衣食する人にあらざりしを以て其作物の世に行はるゝと否とは問ふ所にあらず、ひたすら同好の士と樂みを共にせんと欲せしのみなり

しを以て、常に大膽に其信ずる所を歌ひ出せり。而して此時以後の作は、左程物議を起せしものなく、思想は緩和せると同時に甚しく聲調の美を加へたり。其後彼は詩歌に劇詩に評論に其雄健にして情熱ある筆を揮ひ、永く一代に重きをなせり。即ち千八百六十七年『伊太利の歌』を出し、七十一年革命的氣焔を帶べる『日出前の歌』を發表し、次に蘇格蘭土のメリー女王に材を取りし三部劇詩即ち『チエーストラード』(一八六五)『ボスウエル』(一八七四)『メリー・スチユアード』(一八八一)をいだしぬ。此作は舞臺に上せんとてものせしものにあらざれども、メリー女王の多情多恨なる性格を余せし所、神妙に入りたるを以て彼が劇詩の白眉と稱せらる。『エレクシウス』(七六)は希臘劇を再び試みしものにして『アタランタ』出版以來十年の經驗を得て最も完全に希臘思想を現はしぬ。其他有名なる作品を擧ぐれば『ウキリアム・ブレーク評論』『詩歌の研究』『詩歌及び散文の研究』『二國民の歌』『ボエムス・エンド・バラッヅ』凡て三集『沙翁研究』『雜集』等あり。

詩形聲調の詩人

スウキンバアンは多くの點に於てヴキクトリヤ時代よりは寧ろエリザ時代の特色を帶び、常に熱情光炎ありて感情激越なりき。其長所は思想の幽遠なることにあらずして聲調の音樂的なることにあるを以て、厭、何等の意義なきことをば最も美妙なる音調を以て綴ることあり。思ふに彼は詩形聲調に深大なる趣味を感じ、其美を全ふせんがためには容易に價高き犧牲を拂ひしに似たり。

モーリス

ウキリアム・モーリス(一八三四—一八九六)は豪商の子にして倫敦附近に生れ牛津大學に遊びき。其本職は室內粧飾特に壁紙模樣の意匠にありて、英國家庭の美的趣味を發達せしむることに意を用ひたり。彼が詩風は最も健全なるローマンチック主義を代表し、前ラフアエル詩潮を唱導し、又驚異復興を旨とせる一種の物語を作りぬ。千八百五十八年『グエネヴエーア辨護及び其他の詩歌』を著はせしを始めとし、六十七年には『ジエーソン傳』を出だし、六十八年より七十年迄には一代の傑作『地上樂園』を公にせり。此『地上樂園』と云ふはチョーサーの『カンターベリー物語』に倣ひ、一群の那威人が地上の樂園の存在することを聞きこれを發見せんと出發せしが、行く〳〵無聊を慰めんとて種々の物語をなせりと云ふ筋なり。全體の調子頗る清新快活の氣に富み、押韻句法人に倦怠を覺えしめずして、何時しか仙境に遊ぶ思ひあらしむるものあり。彼はアイスランドに行

きて親しく其文物制度を研究せしが、其結果として『シグルド・ゼ・ヴォルスング』なる史詩を作り荒唐怪異なる傳說を再興せり。其他『エーニイド』『オテッシイ』『ピオウルフ』の飜譯ありて、いづれも中古趣味を發揮するに努めたり。

アーノルド

マッシュー・アーノルト（一八二二―一八八八）は詩人と批評家とを兼ねたる文人にして、有名なる敎育家博士アーノルドの長子なりき。始めルグビー校に入りて父の指導を受けたる後ち、牛津大學に移りて理想的學生たるの名譽を得たり。蓋し父は彼のためには渾身の力を籠め、あらゆる手段を講じて摸範的紳士たらしめんことを期し、自ら持すること嚴正に、子を敎ふること頗る用意周到を極めたりしなり。かくて父死して後も其高潔なる品性は常に彼の品性に至大なる感化を與へ、思想界の暗流に漂ひながらも、常に毅然として其目的に向つて直進向上することを得たり。彼は牛津大學にありて詩歌の講義に從事すること十年、後ち國內の敎育事業を視察し、又廣く佛蘭西、獨逸、和蘭陀に行きて各國の敎育制度を調査して斯道に貢獻すること頗る尠少ならざりき。彼は常に人生問題をば雲時も忘るゝこと能はず、日夜これが解決につとめ、暗澹たる懷疑の淵に沈むこともありしが、詩歌の使命は這般の消息を表彰するにありとなし、人生批評てふことに多大なる興味を有したり。されば其詩調は常に悲音哀韻の氣に充ちて、光明やゝもすれば雲霧に閉されしと雖、流石に堅忍不拔なる意氣ありて、毫もこれがために其精神を挫くことなかりき。彼れ思へらく惡を去り善を完ふする道は他力にあらず、信條にあらず、哲理にあらず、唯それ直覺と道念の力とのみ、詮する所は自己心內の光明に依る外なしとせり。其著はす所、詩歌あり、批評論あり、宗敎論、敎育論あり、書簡文ありと雖、一に如上の主義を敍述せしものなり。而して彼が詩人として最上の特徵は悲哀的快觀を描きし所にあり。

メレデス

ジョージ・メレデスは深遠なる哲學觀念を抱きたる詩人兼小說家にして、スペンサー、バックスレー等の進化論の上に建てられたる道德觀の解釋者なりき。彼れに對する評家の意見は未だ一定せずと雖、其識見の非凡にして人生を洞察する偉大なる直覺力を抱けることは何人も諒知する所なり。不幸彼が詩はブラウニングの如くに晦澁難解にして充分に世上の歡迎を受くる能はざるなり。但し彼を愛讀する少數者流は彼をもつて最も偉大なる文士と仰ぎて敬慕措か

ざる所ろなり。第一の詩集は千八百五十一年に出て、第二卷『モデルン・ラヴ』は千八百六十一年に、八十七年には『悲劇的生活の詩歌』翌年『リーデング・オヴ・アルス』などの著ありしも、其名を認められしは、至つて最近に屬し、彼が老境に達せし後のことなり。彼は又多くの小說をものせし中にて『ゼ・シエーヴキング・オブ・シヤグバット』『ゼ・オルデール・オヴ・リチャード・フェネラル』『ゼ・イゴイスト』など傑作と稱せらる。彼はケルト人種の血統を引きしを以て其精神の活動は推論的なるよりは寧ろ直觀的なりしことは記臆すべきことなり。彼が滑稽洒落を以て健全なる精神生活の要素なりとなし、常に剛健なる樂天主義を保持せしはこれが爲めなり。特に彼がウキクトリア朝の最後四十年間に重きをなせしとは其嚴肅なる道念を以て小說の骨髓となせしことにして、トマス・ハアデイ、オーエン・メレデスの如きは最も多く彼の感化を受けたるものなり。而して彼は詩人として始めて文壇に現はれしも、小說家として一層大なる技倆を揮ひしが如し。

フイツゼラルドと『ルバイヤット』

エドワード・フイツゼラルド（一八〇九―一八八三）は著はす所至つて少しと雖、十一世紀の波斯詩人オマー・カイアムの作『ルバイヤット』の巧妙なる飜譯は文界稀れに見る處の逸品として知らるゝものなり。オーマーはエピキユラスの快樂主義に東洋の厭世思想を加味したる詩人にして、フイツゼラルドは其精神を最も好く玩味して原作其儘なる詩調、精神を移植したり。此詩一たび現はれて英國文壇は遠來の珍客を迎ふるが如く熱心に歡迎せしかば、此英詩人と波斯詩人とは形影相伴ふ如く常に相離れざる關係を結ぶに至れり。

バトモーア

コヴエントリー・パトモーア（一八二三―一八九六）は家庭の美はしく慕はしきことを歌ひたる詩人なり。彼は熱心なる舊教徒なりしもこれが爲めに詩情の發展を阻止せらるゝことなかりしは悅ぶべきことなり。『家の天使』は重もに自己の愛妻に材を取りしものにして、詩題の嶄新にして、溫情掬すべきものありしを以て至大なる喝采を博し、次に『ゼ・アンノン・エロル』に於て一種の神秘的戀愛を叙し、前者に比して一層の深遠なる思想を歌ひて彼が名聲一しほの光彩を添へたり。

アーサー・オーショーネッシー（一八四四―一八八一）は英國博物館の役員にして、神秘幽玄なるローマンチック詩風を悅び、重もにロセッチの詩調に倣ひき。其作る

處『佛蘭西の歌』『女性の叙事詩』『音樂と月光』などの詩集あり。彼は東洋諸國に行はるゝ靈魂先來説を奉じ『グレーター・メモリー』の如き詩に於て其荒唐無稽なる神秘思想を高調しぬ。

クラップ

アーサー・クラップ（一八一九―一八六一）はアーノルドの親友としてルグビー及び牛津に遊びしが、大學宗教運動の起るや、全くこれが影響を避けんことに努め、自己の頼るべき信仰なかりしを以て屢〻懐疑思想に傾きしも、何時も人生の義務てふ立場にありて奮鬪の生涯を送れり。彼が作として有名なるものは『ゼ・ポシー・オヴ・トーバー・ナ・ヴォリッチ』なる長篇にして其他『アモール・ド・ウオイヤージ』『デブシカス』などあり。

女詩人ロセッチ　ブラウニング夫人

猶ほ當代の女詩人として有名なるもの三人あり。クリスチナ・ロセッチ、ブラウニング夫人及びジエーン・インジエロー女史なり。

ブラウニング夫人（エリザベス・バーネット女史）は良人の未だ名をなさゝる時に當り早やくも世に現はれ一時は遠く其名聲を凌げり。彼女は千八百六年に生れたればブラウニングに長ずること六才、幼時より文藝のたしなみ深く、特に詩歌に對する非凡なる天才を顯せり。然るに不幸にして負傷のために健康を害ひ、一生の間之れがために苦み、霎時も安きこと能はざりき。故に此病床の無聊を慰めんとて、專ら讀書に耽り、希臘詩人エスキユラスを愛讀せしが、千八百四十四年詩集二卷を出版するに至れり。四十六年父の許諾なくして密かにブラウニングと結婚して伊太利に行き最も幸福なる生涯を送り、自ら作詩すると共に良人の有力なる內助となりぬ。かくて四十九年には一子をさへ擧ぐるに至りしが六十一年健康衰へ翌年フローレンスに於て歿しぬ。女史の名作としては『小供の悲鳴』『オーロラ・レー』『葡萄牙人よりのソンネット』などありて、いづれも詩形、思想よりは寧ろ情熱の勝れるものあり。其作詩上の一大缺點と目すべきは一般女性作家に之れを見るが如く多く情熱に驅られ、未だ之れを律する力なく、又巧拙の差異甚だ多きことなり。

クリスチナ・ロセッチ（一八三〇―一八九四）は今やブラウニング夫人に勝れる女性詩人として評價せられ、其兄と共に永く十九世紀の飾りとなれり。女史は才貌双つながら秀でたれば屢〻兄の畫のモデルに供せられ、前ラファエル派の悲哀

なる顔の標本となりしと云ふ。始めて世に公にせしは『ゴブリン・マーケット及び其他の詩歌』と名くる詩集にして、千八百六十一年に出版せられ續々として世の稱讃を博しぬ。其後續いて『ゼ・プリンセズ・プログレッス』『シングゾ・ソング』『エ・ペーシェント』などの抒情詩篇ありて、いづれも凄婉悲哀の詩調を傳へたり。女史は生來頗る薄弱にして二十年間殆んど世捨人の生涯を送り、僅かに教會に出入するより外は絶えて外出せしことなかりしと云ふ。

インゼロー

ジエーン・インゼロー(一八二〇—一八九七)は詩人と小說家とを兼ねたり。其詩は重もに敬虔の熱情に富める宗教詩にして又兒童のために作りしものもあり。晩年小說に筆を染め『オッフ・ゼ・スケリッグス』など著せり。されど女史が名は全く『リンコオンシア海濱の滿潮』なる名吟によりて傳はるべし。

特徴

第四章　十九世紀の散文

吾人は此章下に於ては小說を除きたる一般の散文に關することを論ずべし。十九世紀文學の最大なる榮譽は詩歌にありしことは既に之れを述べぬ。然らば十九世紀の散文は如何にと云ふにこれ又大に注目すべきこと多し。此時代の散文は詩歌と同じく其源泉を尙古派に發し、進んでローマンチック派の影響と近世思想との感化を受けたるを以て清新、快活なる一新體を見るに至れり。詩歌はヴキクトリア時代に於て其發達の極點に達し、今日多少の名匠なきにあらずと雖單に過去の殘光を止むるのみにして、何等嶄新奇拔なる創作を見ることなし。散文にありてもこれと同じく、ヴキクトリア時代に於ては名士雲の如く現はれて、各自獨得の大手腕を揮ひしと雖、今は退潮の有樣にて大なる思想も、深き感情も、高き想像も、暫らく其面影を收むるに至れり。今後果して如何。これ容易に解釋し難き問題なり。

マコーレー

十九世紀の散文界に雄飛せる大家に五人あり。曰くトマス・マコーレー、曰くトマス・カーライル、曰くトマス・デクインシー、曰くジョン・ラスキン、曰くジエームス・フロードこれなり。其他哲學及科學界の大家も甚だ多しと雖、そはこゝに略すことゝせん。

トマス・バービングトン・マコーレー(1800—1859)は十八世紀に於けるジョンソン博

士の如く英國人士の種々なる特徴を備へたる當代の模範的紳士なりき。彼は最も圓滿なる家庭に生れ、幼より穎悟にして記憶に富み、早やくも詩歌、文章を綴りしが、後ち劍橋大學に入り、屢〻懸賞詩に應じて賞を得たり。千八百二十五年始めて『ミルトン論』を出しゝが、其文の優麗にして立論の正確なるは大に識者の歡迎を博し、これより評論に史論に盛んに筆を揮ひぬ。三十一歳の時國會議員に擧げられ、翌年國事に盡瘁して功勞ありし故を以て印度事務官に任ぜられ印度に止まること數年。其結果として『クライヴ傳』『ヘスチングス傳』の著ありき。千八百四十二年『古羅馬の賦』を出し、四十八年より五十五年迄の間に於て『英國史』四卷を著はし、前古比類なき歡迎を受け、洛陽の紙價爲めに高きを致せり。之より重もに公なる生涯を退きて靜かに文筆を執り五十九歳にして安き眠りに就きぬ。

長所短所

マコーレーは『古羅馬の賦』をものしし雖、未だ以て詩人となすに足らず。蓋し彼が頭腦は餘りに理智に敏く、解剖の才に富みて常識多かりしを以て、其思想の經路は未た嘗つて軌道を逸せしことなく、空想の世界に飛行すること能はざりき。其結果として理性の判斷以外に直覺、洞察の權能を認めず、やゝもすれば皮想の見解に陷り、清明にして寧ろ偏狹なる理論を遵守せしかば、其作や何時も着實なる現代主義に止まりたる傾向を有しき。こゝを以て人或は彼を目してフィリスチン或はボルジョア（俗人の意）となして平板單調なるを笑ふも無理ならぬとなり。然れども斯くの如きは彼の短所なりしと同時に實に彼の長所なりしとは否む可らざる事なり。彼が常に社會の舞臺に立ち現はれて着々として成功し、政治界の一方の主領となり、社會改革を主唱し、確實明快なる評論、史論をものせし所以の者は實にかゝる性質ありたればなり。彼は決して社會の彈劾者とならず、常に其光明の方面を觀察し、其美點、長所を反射する明鏡となりき。彼が文體はもと尙古派に學びてローマンチック派に轉ぜしもの、文に色彩あり、光明ありて、措辭の縱横、瑰麗なるは最も人の悅ぶ所なり。彼は此筆によりて文學論をなし、人物論をなし、歴史論をなしゝかば其描寫する所常に活躍として異彩を放てり。こゝを以て彼が評論出づるや天下靡然として其文體を摸倣し、其論理に從ひて明快華麗なることを努むることゝなりぬ。フリーマン、プロード、グリーン等知名なる歴史家は彼が指導と暗示とに俟つ所甚だ多かりき。

カーライル

マコーレーは社會の謳歌者たりしに對し、カーライルは其彈劾者なりき。彼は常に過去の理想界を夢み現在社會の不完全にして物質的なることを痛く攻擊して一生涯を送れり。もと蘇格蘭土に生れて、其嚴肅なる性格を繼永し、清教徒の後裔に出てゝ峻烈なる人生觀を抱きぬ。恰も正義の神を拜するゴシック風の大殿堂を建設せんとて巨大なる石材を運び來りしも、遂に其の目的を全ふすること能はざりしことに譬ふべし。故に其語る所蕩然として理解するに苦み、やゝもすれば同一思想を繰返へすことありと雖、其目的とせし所は察するに難からざりき。

トマス・カーライル(一七九五―一八八一)は蘇國ドムフリースシアの一寒村に生れぬ。父は剛骨熱情を以て聞えたる石工、母は敬虔、愛情の念に富みたる婦人なりき。少時鄕里の學校に學びし後ち、エデンバロー大學に入り多大なる興味を以て哲學、數學、宗教等を研究せり。母は將來彼を教職に就かしめんとて種々に心を碎きしも、彼が獨立不羈の精神は到底、襲俗の形式と信條とに服從すること能はざりしを以て、苦悶百端の後ち慈母の祈願に背き斷然教職に思ひ止まれり。大學を出てゝ後ち暫らくの間は鄕里に近き母校に教鞭を執りしも意に滿たず、千八百十八年エデンバラーに出てゝ、放浪的生活に移り、專ら其記す所の論文を雜誌等に寄稿しぬ。之より彼れ獨特の人物論、歷史論は續々として現はれ、傍ら獨逸文學の研鑽に從事し、シルレル其他の作物によりて獨逸文學を英國文壇に紹介し始めき。千八百廿六年ジョン・ノックスの後裔ジェーン・ウエルシなる女と結婚し、續いてクラーゲンブットクに退き、有名なる自序傳『サートル・レザルタス』に着手し千八百三十一年之を出版したり。此書は『トイフエルスドリュック』(亞魔の惑なり)なる架空の主人公に託して、巧みに自己の精神的閲歷と當時の精神的問題を敍し、湧くが如き滑稽諷刺を以て縱橫、自在に自己心內の大氣燄を吐露せしものなり。時人其意の存する所を容易に解することゝ能はずして、大に賤笑せしと雖、今日は彼が傑作の中に數へられ、一種の深遠なるアポカリプス(隱密天啓の書)と稱せらるゝに至れり。千八百三十八年轉じて倫敦に出て、越えて三年『佛蘭西革命論』を出せり。此書は此近世の史的大事件をば熱烈火の如き筆を以て敍せし者にして、書中の人物悉く躍々として生氣あり、眞に散文もて記されたる一大

バノラマの觀あり。此時コールリッヂ、ハズリッド等の先例に倣ひて文學上の講演を公開し、兼ねて懷ける所の主張を世に訴へしが、其一部は千八百四十年『偉人及び偉人崇拜論』として現はれたり。これより『チャーテズム』『過去と現在』『オリヴァー・クロムウエル傳』『ジョン・スターリング傳』等を著はし、最後に『フレデリック大王傳』を出版しぬ。彼は『クロムウエル傳』によりて地下の英雄のために二百年來の寃罪を雪き、『フレデリック大王傳』に於ては畢生の心血を搾りて會心の偉人を描かんと勉めたり。後ちエデンボロー大學の校長に擧げられ、數種の短編をものせし外は特に注意すべきこともなくして千八百八十一年八十七の高齢を以て奮鬪的生涯の幔幕は永へに下されぬ。

戰鬪的文士

カーライルは生れながらにして戰鬪的文士なりき。其巨人の如き精力を以て時勢の暗流に反抗し、鐵石烈火の熱心を以てスフキンクスの謎語を破らんと努力せしことは頗る快心の至りなり。彼は人生を以て一大奮鬪場裏となし、常に道念の武器を携へて罪惡と戰ひ、當面の義務を遂行することを以て萬人の本領なりと唱破し、自ら先づ其の實行者たらんことを期せり。されば深く勞働を重んじ、凡そ自ら額に汗して働く者は如何に賤しくとも坐食する帝王にも勝れりと論じて、健全なる民主的精神を鼓吹せり。自らは宗教的信念に富みしも何等確固たる信條を格守せず、苟も人道の大義を標榜して之れが體驗に志す者は我黨の士なりとなし、世の似而非宗教家と道學先生を罵倒し去りて痛快を極めたり。彼の人生觀に曰く『宇宙は神聖犯す可らざる大法によりて支配せらる。人の一大義務は其宗教の何たるを問はず、全心全力を盡して此大法と和合するにあり。一國之れに一致すれば榮え、一國之れに離叛すれば滅亡す』と。彼が讀史眼と人物評とは凡て此原則を應用して上下せしものにして、文藝の如きも單に此一大眞理を闡明する道具に過ぎずとなせり。此立論は時に極端に奔り、屢〻奇矯に陷ることなきにあらざれども、人若し其本意の存する所を究め、適用宜しきを得ば必らずしも憂ふべきにあらず。却つて世人やゝもすれば、現實の假想世界に躊躇して、地上の浮華なる珠玉を爭ふことを見れば、カーライルの峻烈なる預言者的鞭撻は吾人の忘却すべからざる刺激濟なり。

ラスキン

ジョン・ラスキン（一八一九―一九〇〇）は十九世紀の散文界に於ける新現象の

一なり。彼は宗教と文藝とを契合し、自然と人生とを調和することに力を用ひて、最高思想の註釋者たらんことを期せり。彼はキーツの如くに美に對する鋭敏なる知覺力を有し、英國人士をして美的趣味を味はゝしめ、ウォルズウォルスの如くに自然を愛してこれが公正なる解釋者とならんとし、又カーライルの如くに當代の先覺者となりて社會を指導し、人間の理想を高めんことに意を用ひぬ。彼は一面文藝の人たると、同時に一面社會の改革者なりき。

ジョン・ラスキンは倫敦の酒精を業とする家に生れ、幼より文藝、美術に親む機會を與へられぬ。母は頗る嚴正なる基督信徒にして、其子を育つるに頗る苦心し、玩具の如きも容易に之れを與へず、早くより聖書の日課を授け、一年には必らず之れを通讀せしむることゝ定めき。こゝを以て千八百三十七年牛津大學に入學する迄には通讀十數回に及び、殆んど之れを暗誦するに至りしを以て、彼が將來の思想と文體とは著しく其影響を受けたり。大學を出づるに際し彼は卒業論文として『近世畫家』第一卷を著はしゝが、時に齡僅かに二十四歳なりき。世は此書の出版によりて始めて文界に一大光明の新に現はれたることを知り、口を極めて之れを稱嘆せり。此書は重もに風景畫家ジョゼフ・タルナー（一七七五―一八五一）の伎倆を紹介せしものにして、これに自家の文藝に對する意見を加へたり。行文流麗、觀察奇拔、趣味の豐富にして引證の該博なることは稀れに見る所のものなりき。其後ち續いて其續卷を出し、千八百六十年に至り第五卷を以て完結しぬ。これより彼は專ら如上の主張を以て熱心に己が所信を吐露せんとて種々の著書を出せり。『建築の七燈』はゴシック風の建築法によりて、人生道德の眞諦を論ぜしものなるが、『ヴェニスの石』に於て其立論に一歩を進めたり。社會改良に對する意見は重もに『アンツー・ジス・ラスト』『ムネラ・プルヴェリス』『時と潮』『フォルス・クラヴィゲラ』『橄欖の冠』などに表明せられ、其他『セサメと百合』『塵の教訓』『空の女皇』『プレテリタ』などの著あり。千八百七十年牛津大學の美術の教授に任ぜられて好評嘖々聽衆常に堂内に溢れたり。其後ち病のために職を辭し、ブラントウッドに閑居し、自己の事業を主張し、益〻世に認識せらるゝことを樂みつゝ此世を去れり。

＊

現實的理想家

ラスキンは始めターナーの畫風の欽慕者として筆を採り、次にカーライルの

主義の鼓吹者となりしと雖、自己の信ずる所を保持すること甚だ厚かりき。彼はカーライルの如く過去の理想界を夢想せず、現代を美化してこゝに天國の再現を見んことを求めたり。故に現代の人類社會に多大なる趣味を感じて勞働社會のために熱心に其改善を圖りたり。これキーツの如く美を愛し、ウォルズウォルスの如く自然を愛せしと雖、彼等の如く全く其中に沒了せられざりし所以にして、又カーライルの如く正義の復活と、勞働の神聖とを主張せし所以なり。彼曰く『人若し眞實を知り、之れを愛好して忘我の境に至れば私慾の發動こゝに止み、道德の缺陷こゝに補はれて以て生活を完ふすることを得ん』と。されば其美術論道德論は露西亞の預言者レオ・トルストイに酷似し、共に基督教的社會主義者たり。彼等は共に昔しながらの愛に築かれたる神の王國を此世に再現せんが爲めに種々に心を碎き、自ら基督の遺訓の實行者たることを期せり。

アクインシー

トマス・デクインシー（一七八五―一八五九）は宇宙間の他の星辰界より暫らく此地上に宿りて、地上の人間萬事を見、頗る不思議なるに當惑したらん如き觀あり。彼は常に幽棲の生活を營みて沈思默想に耽ることを好みしが、何時しか阿片を喫する惡習に陷りしより、著しく此傾向を增加せしものゝ如し。其心的活動は常に他の窺ひ知るを得ざる妄像幻夢の狀態にありしが、外部の生活は極めて無事、單調なりき。彼はマンチエスターの商業地に生れ、七歲にして父を喪ひ、母は聰明の人なりしも寧ろ嚴正に過ぐる人なりき。長じて牛津大學に入り獨英兩國の文學を研究せしが、未だ卒業するに至らずして退學し、グラスメーアに行きてコールリッヂの警咳に接しぬ。これより『倫敦雜誌』の寄書家となりしを始めとし『ブラックウッド雜誌』『テイト雜誌』等に關係を結びて四十年間文士生活を營めり。彼の有名なる『英國阿片喫飲者の告白』は千八百二十一年始めて『倫敦雜誌』紙上に現はれしものなり。其題目の珍奇にして、自家のありの儘なる經驗をば雄渾暢達なる筆を以て敍せしかば、世は双手を擧げて之れを歡迎したり。此の書は題目の示めすごとく阿片を喫して得たる精神狀態を描きたるものにして、其喫飲の結果として半醒半眠の姿となりて種々不思議なる幻夢を見る有樣を敍せし所など、眞に文壇の神秘なり。其他レッシング の『ラオコーン』譯『西班牙比丘尼』『鞮靼人の敗亡』などの著ありて、彼特得の大手腕を揮ひたり。

功績

デクインシイはコールリッヂと共に獨逸文學を輸入し、又一面にありては雜誌文學を勃興せんとするに際し、之が發達に力を致せしこと甚だ多かりき。其雜誌文學に對する關係は百年前のアヂソンに似て、其効果や更らに大に、其文や一層多趣味にして、いづれも堂々たる長論文なりき。されど彼はカーライル或はラスキンの如くに人間の思想に對して何等大なる感化を寄與せしことなく、又其人物に於ても他を指導するが如きものあらざりき。彼は純粹なる文藝の人なりき。文藝の人としては當世紀に於て殆んど他に比類を見ざる程偉大なる散文家なりしなり。此の點に於ては彼はロセッチ、スウヰンバーンが詩歌によりて成就せしものを散文に於て完成せしものと見るを得べし。思ふに彼は詩的華麗文の理想を代表せしものにして、彼れ以上に圓滿なる領域に達することは容易なることにあらざるべし。

フロード

ジエームス・フロード（一八一八―一八九四）は前二文士の花やかなる詩的散文に反して簡潔明快なる文體を綴りたる歴史家なり。彼は死に至る迄種々の困難と爭ひつゝ、最も大膽に自己の天分を盡したる人士なりき。彼が社會の迫害を受け始めたるは當時彼が入學せし牛津大學に起りたる宗教運動に對する其の無頓着なる態度に始まれり。彼は此激烈なる信仰復興問題に對しては始めより反對なる意見を抱きしが、遂に斷然在來の信仰の根據なきことを論じて自己の懐疑思想を發表して世に打つて出てぬ。世は當然として彼が不信を責め、あるとあらゆる手段を講じて彼が前途を妨げしかば、彼は社會にありて一の地位をも得ること能はずして屢〻窮乏に陷りぬ。彼が著書の現はるゝ毎に人々は種々なる迫害を試みて其販路を妨げ、フリーマン、グリーンの如きすらも一時は彼れに反抗せし程なりき。而かも彼が不撓の精神はこれがためにいよ〳〵固く、其天才はこれがために一段の光彩を放つに至れり。彼が著書中最も大なるは『ウルジーの失墜よりアルマダ艦隊敗滅迄の英國史』十二卷ありと雖、最も有名なるは『カーライル傳』なるべし。其他『大問題の研究』、『シーザー傳』、『バンヤン傳』及び旅行記、雜著等あり。彼は史論家としては時に事實を誤り、或は偏見に陷ることなきにあらざりしと雖、こは彼れに限られたる缺點にあらず。若し事實を其盡に偏見なしに畫かんとすれば、勢ひ乾燥無味なる記錄と化すべし。史家と名く

ハヅリット

るものは或點までは我執と感情とを棄つること能はず。これあるがために却つて過去を錄して活氣あらしめ、興味あらしむる所以なり。

猶ほ十九世紀の初期に當りて最も非凡なる批評的伎倆を有せし者はウヰリアム・ハヅリット（一七七八―一八三〇）なり。彼が批評的領域にありて燃犀鋭利なる手腕を揮ひし所以のものは、全く哲學的透徹と繪畫的明瞭との一致契合せるが爲めにして、これによりて能く抽象的事物を捉へ來りて、之を論ずるや誠に明快剴切を極めたり。惜しい哉彼は斯かる異常なる才能を有せしと雖常に情熱餘りありて狷介に過ぎ、不規則、不始末なる生涯を送りて、自ら災禍を招きぬ。彼は自ら幾多の仇敵を作り、レー・ハント、チャールス・ラムの如き有力なる親友とさへ一時は絶交せしことありき。彼は始め畫家として世に立ちしも轉じて文學に志し、重もに『倫敦雜誌』に力を盡し文藝の評論を努めしが著書としては『沙翁劇中の性格』『時代精神』『那翁翁傳』など有名なり。彼はコールリッヂに次いで沙翁評論を試みて、能く其の偉大なる天才と驚異すべき技術の眞義を發揮せしを以て名あり。彼が沙翁批評はコールリッヂの如く不規則なる評論にあらずして極めて條理あり秩序ある確論なりき。彼は評家たると共に又有力なる論文家なりき。其鋭利なる筆鋒は最も好く自家の特質を描寫するに適し、自由自在なる題目を巧みに捉へ來りて或は哲學者として之を論斷し、或は道德家として之を闡明し、或は滑稽家として之を嘲弄し、或は畫家として之れに色彩を施し、常に自己の胸中を吐露せり。斯くの如く自己の掲げ來りたる論題に對して深刻なる主觀的解釋を與ふるはハヅリットの獨特の長技なりき。

チャールス・ラム

チャールス・ラム（一七七五―一八三四）は貧家に生れ、早くより困難を嘗めしが、姉メリーが發狂して其母を殺害せしより一層悲慘なる境遇に陷りたり。されど彼が性はもと溫良快活なりしを以て種々なる不幸に遭遇しても毫も屈せず、あはれなる姉を看護しつゝ文筆を執りぬ。彼は少時より古書を渉獵するを好みしが、特にエリザ時代の戲曲には多大の興味を感じ、熱心にこれが研究に從事せり。『沙翁物語』は即ち其産物にして、能く原文の微妙なる意味を傳へたり。文章輕妙にして簡潔、而かも精緻纖巧の致を失はざりしは讀者の彼れに感謝する所なり。これより沙翁研究の精神大に勃興し人々は爭つてエリザ時代の遺韻

餘香にあこがるゝことゝなりぬ。猶ほ彼の著としては『沙翁時代に執筆せし英國劇詩家拔萃』『ユリッセズ物語』『兒童の詩歌』などありき。次に千八百二十一年頃より『倫敦雜誌』に於て己が手腕を揮ふことゝなりしが『エリヤ論集』を連載するに至りて、また其溫藉なる思想と、諷諧の筆致とは世人の等しく喜ぶ所となりき。彼の詩才は左程高尙なるものにあらざりしも、能く『エリザ朝の恩化に浴せしかば、其優雅婉麗なる詩句の時に忘れ難き節多し。

ニューマン

ジョン・ヘンリー・ニューマン（一八〇一―一八九〇）は宗敎的文士として最も卓越し、其英國の思想界に及ぼせる影響は甚だ大なるものありき。彼は牛津大學を卒へて後ち、其所屬なる聖メリー敎會の牧師となり、頗る有力なる說敎をなし、大學生に對して深大なる宗敎的感化を及ぼせり。これ實に彼の牛津大學宗敎運動として知られたる宗敎運動の端緒となりしものなり。此運動は懷疑不信の說世に行はれ、物質主義やゝもすれば心靈の權能を蔽はんせしを以て、蒼生の安住する所を求めんには是非共確固たる宗敎的信仰を鼓吹せざる可らずとの主意を以てニューマン、ピユージー、キーブル等の唱導せし所のものなり。彼等は說

『宗敎運動』

敎に小冊子に其熱烈なる所信を盛んに吐露し、奮鬪猛進せしを以て苟も人生の行路に惱める者は靡然として其動かす所となれり。されど一方に於ては此運動の餘りに、感情的にして偏狹に陷ることあるを見て斷然これに反對の聲を擧ぐる者もありき。かくて此運動の結果として思想界は二派に分れ、一は大に之れに贊成し、一は之れに反對して、互に其意見を戰はしゝかば、一時は思想界の物情騷然たりき。ニューマンは此運動の大立物にして其峻嚴なる宗敎觀を以て說敎と文筆とを以て最もすさまじく戰ひぬ。彼は『平靜安慰の心事と悠々逼らざる行爲とは偏へに聖典儀式を尊信するによりて始めて求むることを得べし』となし、統一的宗敎と敎會の權能を唱導せり。かくて彼は遂に英國敎會を去りて、羅馬舊敎に移り、益〻自己の所信を主張して精神界の革新のために盡力せり。ニューマンの所說の果して當を得たるものなりや否やは暫らく問はず、兎も角も此宗敎運動は十九世紀中頃の精神界の一現象として深く注意すべきものなり。而もこれが其後の文藝に及ぼせし影響も決して尠少ならざりき。

ニューマンの著書には說敎集あり、論文集あり、詩歌小說ありて大冊凡そ四十

シモンヅ

卷に及べり。其中彼が詩才を發揮せしものには『雲の柱』『ゼ・ロンシアスの夢』などあり。小說には『カリスタ』及び『損得』の二篇あり。いづれも道德、敎訓を目的とせしものなれば、單に之れを文藝の作品として見る時は餘情に乏しく多數人の滿足を期するは難き所なり。然れど彼が文章の雄渾莊嚴にして、至つて音樂的聲調に富みたるは散文界の珍品として永く後代に傳はるべし。

・ジョン・アッデングトン・シモンヅ（一八四〇―一八九三）は修飾華麗なる文體を旨とせる文人にして、ハーロー、牛津等に學びしも晩年肺疾を患へ、瑞西、伊太利に滯留して、專ら身體の保養に注意せり。其名著『伊太利文藝復興史』は內容に於ても、文體に於てもまた趣味の豐富なることに於ても數多ある同種の著書中の白眉と稱せらる。されど其餘りに修飾を事とし、時に冗漫に陷りたるは彼の缺點なり。其他『希臘詩人研究』『南歐記事』及び文藝復興に關する數篇の詩歌あり。

ウォルター・ペーター（一八三九―一八九四）も亦『伊太利文藝復興史』を著はして世の注意を惹きぬ。彼はつとめて宗敎道德の問題を避けて文藝万能の說を抱持し暗に人生快樂の主張を唱導せり。かゝる主張の下に『快樂主義者マリウス』

現代の小說と社會現象

『想像的畫像』『評價』などの著あり。其文同じく絢爛を主とせしも甚しき缺點に陷らざりき。

猶ほ當時の史家にはヘンリー・ハラム（『中世史』の著者）、ウキリアム・ミットフォード（『希臘史』の著者）、ウキリアム・ロスコー（『ロレンゾ・ド・メデシ傳』の著者）、ヘンリー・ミルマン（『基督敎史』の著者）あり。其他の文士には評論家ウォルター・バージホット、『スコット傳』の著者なるジョン・ロックハート及詩人兼評論家ジョン・ウキルソンなどあり。

第五章　十九世紀の小說

十八世紀中頃より始まれる小說は一時長足の進步をなせし後ち、暫らく沈滯の狀況を呈せり。十九世紀に入りて氣運の熟するに至りて漸く其勢ひを挽回し盛んに新領土の開拓に從事せり。然れども始めの程は社會と左程親しき關係を結ばざりしが、後半紀頃よりは、社會の推移、時勢の變遷と頗る密なる關係を有するに至れり。當時の宗敎界の波瀾思想界の變革、近世科學の發明、國際間の葛藤を始めとし、其他社會萬般の出來事はいづれも其痕跡をこゝに、止めたり。但

恐怖物語

女性作家エッザウオース

し近代に近づくに從ひ世路の經驗なき年少小説家が生硬軟弱なる文字を弄して一時の利益を貪ぼらんとし、爲めに作物の數量に於てこそ多けれ、其價値に於ては寧ろ玉石混淆の觀なきを得ざるなり。

十八世紀末葉に始りたる小説の一部を代表せしものは恐怖物語なり。其作者にはウヰリアム・ベックフォード(一七五九―一八四四)チャールス・マチユーリン(一七八二―一八二四)の二人あり。ベックフォードは英國屈指の資産家にして、王者の豪奢を極め、終生讀書三昧に耽れり。名著『ヴアテーク』は三日二夜坐はり續けに筆を執りて完成せしものなり。材料は之れを亞剌比亞のことに採り、其記事を讀めばダンテの地獄篇を讀む感あり。マチユーリンは始め僧侶なりしも、轉じて文學に志し、悲劇『ベルトラム』を始めとして『ゼ・フエータル・レヴエンジ』『メルモス・ゼ・ウオンデラー』などの恐怖物語を著はせり。

當時女性作家として名を知られたるものはマリア・エッヂウオルス女史(一七六七―一八四九)なり。女史は愛蘭土の素封家の家に生れ、身を終はる迄、文筆を以て世に立ちぬ。其重なる著書を擧ぐれば『ラックレント城』、『ベリンダ』、『テールズ・オヴ・フアッショネーブル・ライフ』、『オルモンド』などありて、いづれも愛蘭土のことを述べたるものなり。實に女史はバルネー嬢の次に現はれてオースチン嬢の先驅となれる人なり。

オースチン

ジエーン・オースチン(一七七五―一八一七)は前者に勝ること數等。スコットと共に十九世紀初代の小説家の中にありて最も鏘々たる者なり。女史の一生は頗る平靜無事にして何等記すべき事なし。從つて其性行を知る材料に乏しけれども、人に對するや至つて親切にして、其最も愛敬せられしが如し。幼より文學の嗜好深くして自國文學に精通せり。其著書の中最初に出版せられたるは『プライド・エンド・プレジユデス』にして、『センス・エンド・センシビリチー』、『ノルサンガー寺院』、『パースエーション』、『マンスフイールド・パーク』、『エムマ』の五篇あり。これらの小説はいづれも好評を博し、死後に至りて一層多く價値を認められき。當時世に行はれたる小説はラドクリッフ夫人の『ウドルフォー』及びシエレーと關係深かりしゴッドウヰンの『カレブ・ヲキリアムス』の類なりしが女史は其獨特の諷嘲を以てこれらの作の不自然なることを暗示し、自らは靜平溫雅なる中流社會の

スコットの小說

家庭生活を叙せり。女史は強いて時好に投ぜんとはせず、專ら事の眞相を描寫することに努めぬ。これ其作の今日に至りても聲價を失はざる所以なり。

バイロンが一夜にして詩界に覇を稱せしより、スコットは之れと相驅逐するの不利益を悟り、千八百十四年より中古時代の傳奇小說に筆を染むるとなれり。

かくて第一の作『ウエーヴアーレー』を出せしより十二年間は殆んど奔馬の勢を以て其健筆を揮ひ、『ガイ・マンナリング』『ゼ・アンチクイチー』などを始めとし續々として十數篇の名作を公にせり。これらの作は、いづれも世人の一方ならぬ歡迎を受け、其の名聲は隆々として上れり。然るに千八百二十六年に至り、彼が關係せる出版會社俄かに破產し、十一万磅以上の負債を生じたり。これスコットに取りては實に意外なる災難なりしも、彼はこれがために毫も失望することなく、益〻注盛なる元氣を以て筆硯に從事し、『ウッドストック』『ゼ・フエーア・メッド・オヴ・バアス』『アン・オヴ・ガイエルステルン』『那翁翁傳』等を著はして、負債の過半を償却しき。彼が作物の特質及び文學上の價値等に關しては、既に詩人の條下に略述したれば、こゝに之れを再說せざる可し。唯吾人は彼はオーステン女史と共に十九世紀初葉の大立物となり、オーステンは小說の母となり、スコットは傳奇物語の父となりしことを記憶すれば足れり。

リットン

エドワード・ジョージ・ブルヴー・リットン（一八〇〇―一八七三）は政治家として公なる生涯を營むと共に、傍ら文筆を揮ひたる多藝多能なる人物なり。彼は幼にして父を失ひ、賢明なる慈母の監督の下に家庭の敎育を受けたる後ち牛津大學に入りぬ。彼は十五歲にして既に詩集を出版せしが、大學にありて、彫刻に關する詩を作りて賞を得たり。第一の傳奇物語『フォークランド』は廿二歲の時匿名にて出版せしが左程の評判を博するとなかりき。翌年『ペルハム』を出すに及て其名大に知るゝに至れしが、此作はゲーテの『マイステル』に其結構を學びしものにして、世態萬狀の活動を描寫せしもの也。千八百卅一年より十年間は國會議員に擧げられ熱心に國事に奔走せしも絕えて述作を中止せざりき。其作物は頗る多方面に涉り、歷史小說あり、罪惡小說あり、神秘恐怖の物語あり、其他詩歌脚本にも筆を染めたり。彼は名譽心に驅られて隨時時好に投じ流行に適するものを出し、爲に文體に於ても、決して一樣ならざりき。今玆に名あるものを擧ぐ

ブロンテ

れば歴史小説には『ハロルド』『ゼ・ラスト・オヴ・ゼ・バーロンズ』『リエンジ』『ポムペイ市の末日』あり、佛蘭西小説の影響を受けたる罪惡小説には『ユージン・アラム』あり、家庭小説には『カックストン』『我が小説』『彼は如何に處すべき』の如き中流社會に關するものあり。神怪譚には『ザノニ』『一怪談』『ゼ・ハウンテッド・アンド・ハウンターズ』あり。其他『將來の人種』『ライン河畔の巡禮者』『ポール・クリッフォード』『アーネスト・マルトラヴァース』『ケネルム・チリングレー』『巴里人』あり。脚本には『リオンの婦人』『リシエリユー』『金錢』ありて、いづれも舞臺に演ずべき佳作なり。又詩歌にはシルレルの飜譯『アーサー王』『聖ステーヴン』國會議事堂及びホレースの飜譯等あり。彼が文體はローマンチック派に屬する修飾華麗の文なれど、多忙と多作との結果として多くの缺點を逃るゝと能はざりき。彼が缺點は統一の力に乏しく誠實の念少かりしとなり。これ餘りに時好を追ふに急にして、自家の一定の本領なかりしが故なり。然れども其斬新なる思想、奇拔なる創造力、豐富なる趣味は彼が作物の永く世に用ゐらるゝ所以なり。

シャーロット・ブロンテ（一八一六―一八五五）は深刻獨創の思想と、遒勁燃犀の筆致

ブロンテとオースチン

とを以て名ある女性作家なり。女史は愛蘭土人なる牧師の家に生れ其姉妹何れも文才を有しき。早く母と別れしを以て自ら同胞の世話をなし、一度は家庭教師となりしも、佛語研究の爲にブルッセルに赴きぬ。其後歸宅すれば家族の窮迫一層甚しきを告げしかば、僅かに文學の作物によりて心を慰むることを得たり。千八百五十六年姉妹の作れる詩歌を集めて一卷の詩集を出せしも殆ど世の顧る所とならざりき。これにも屈せず翌年女史は『ジェーン・アイアー』なる一篇の小説をものして出版せしに激烈なる反對ありしと同時に、一方ならぬ名聲を博しぬ。此書は作者自家の經驗をば最も痛切に描寫せしを以て快感を與ふるよりは寧ろ悲痛を感ぜしめざるにあらず。然れども筆力遒勁にして、脈々たる人生の寫實は一讀讀者に深き感銘を與へて終生之れを忘れざらしむ。其後ちつゞいて『シァーレー』『ヴキレット』の作あり、共に佳作なり。千八百五十四年さる牧師の妻となりて暫らく不思議なる家庭生活の經驗を嘗めしが翌年病のために歿しぬ。

ブロンテの作をオースチンの作に比するに種々の點に於て異れり。オースチ

エリオット

ンは結構の發展及び人物波瀾の排置に長じたりと雖、之れをブロンテのものに比するに活氣少なく平凡に傾けり。ブロンテは常に熱烈なる想像と燃犀なる直覺とを以て苦痛の中にある深刻なる人性を描けり。但し其觀察の一方に偏せしは其經驗の狹隘なるためなりき。

ブロンテ死して女性作家の主領を失ひし翌々年『セーンズ・オヴ・クレリカル・ライフ』現はれて世の注意を惹けり。其作者は始めの程はジョーシ・エリオットなる假名のみにて、果して何人が實の作者なりしかは人の大に迷ふ所なりしに、二年の後ち漸くメリーアン・エーヴンス女史なるとを知られき。女史はワーリックシアの山間に生れ、信仰の念至って篤かりき。後ち他に移轉してユニテリアンの人々と交際せしに全く舊來の信仰を失ひ、其結果としてストラウスの『基督傳』及びフォイエルバッハの『基督教論』なる英譯現はれたり。此頃ジョージ・ヘンリー・リュキスと相識り、正式の結婚をなさずして、其妻となりぬ。リュキスは明晰なる理性の人なると共に詩歌小說の嗜好深かりしを以て女史を啓發すること甚だ大なりき。女史が『セーンズ・オヴ・クレリカル・ライフ』を著はせしは此時のことにして、全く此人の感化によれり。其後ち『アダム・ビード』を出して至大の喝采を博し、續いて『フロッス河畔の水車』『サイラス・マーナー』『ロモラ』『フエリックス・ホルト』『ミッドル・マーチ』『タンネル・デロンダ』『イムプレッション・オヴ・セオフラスタス』等の著あり。千八百七十八年リュキズ歿せしかば八十年ジョン・クロッスに嫁し、同年自らも此世を去りぬ。

著作の二方面

女史は飜譯詩歌、論文等をものせしと雖、其長所は小說にありき。其十篇以上の小說に於て何人も容易に認むることは此作者に二方面の存することとなり。一は『フロッス河畔の水車』『サイラス・マーナー』などに最も明白に現はれたるものにして、人事を敍するに輕妙なるユーモアを以てして毫も故意とらしき所なきと、云はゞスコット一流の妙所を汲めり。然るに『ロモラ』以外の者は多くは經營慘憺の作にして哲學的傾向のために著しく餘韻を失ふに至れり。特に一種の偏狹なる道德主義を目的として强て感情を壓迫せしを以て、最も不自然なるものとなれり。かゝる過失は全く女性作家たる者が天性に反して男性的特徴を發揮せんと試みたる爲めなるべし。女史が自ら小說家の本領となせし所は人生

の研究にありき。自ら經驗見聞せし所によりて人生の愁歎すべく、又勇奮すべきことを悟り、罪惡と戰ひ誘惑に堪ることを以て其義務と確信せり。されば其描ける人物は圓滿美德の君士人にあらずと雖、而かも讀者をして其人物に充分なる同情を寄することを禁ぜざらしむ。此偏理的心理小說は常に當代の崇高なる悲哀、暗黑の方面を寫したる紀念として永く後人に傳はるべし。

ヂッケンス

チャールス・ヂッケンス（一八一二―一八七〇）は身を微賤に起して幾多の辛酸を嘗めたる後ち、其奇警、卓拔なる文筆を以て天下を驚かすに至れり。彼が本領は中流以下の社會の實狀をうつし、之れを辯護指導せんとにありき。ヂッケンスは貧しき家に生れ、倫敦の貧民窟のほとりに育ちぬ。それより種々なる苦き運命の飜弄する所となりて、小學校の敎育を受けたるは僅に三年に過ぎざりき。始めは靴墨製造の業を習ひ、轉じて法律事務所に雇はれ專ら其職に從ひぬ。彼の母は父の放埒なるに似ず、至て善良の婦人にして、子女の敎育にも心を惱ませし甲斐ありて、ヂャールスは早くより書を讀み、文を屬することを好めり。されば己が本業に忙はしき間にも進で筆を執りしが、此時より『ボッヅ』なる匿名を以て屢〻

特色

『モンスレー・マガジーン』紙上に奇警、鋭利なる文を寄稿せり。これらの寄稿文は千八百三十六年『スケッチエズ・バイ・ボッヅ』なる書名の下に刊行せられしに、第一版は數ヶ月にて悉く賣れ切れたり。其後『モーニング・クロニクル』の依頼を受て其紙上に執筆せしが『ピックウキック・ペーパーズ』を出すに及びて、彼が文名は廣く世上に傳はりぬ。此書は稀有の滑稽小說にして、作者の特殊なる才能を最も巧みに表彰せり。彼は此意外の成功を見て欣喜措く能はず、全力を傾倒して著作に從事するに至れり。つゞいて現はれしものは『オリヴアー・トウキスト』『ニコラス・ニックルビー』『マスター・ハムフリース・クロック』『ゼ・オウルド・キユリオシテー・ショップ』『バルナビー・ラッヂ』『クリスマス・カロル』『ダヴイッド・カッパーフィールド』『二都物語』『期待』『アウワー・ミユチユアル・フレンド』等なり。これらの作は概して作者が少時親しく經驗したる下流社會に資料を執りしものなり。

ヂッケンスの長所は輕妙なる滑稽小說家たるにあり。其描ける滑稽には時に奇怪千萬なるともあれども、總じて純粹、健全なる可笑味ありて、讀者は知らず識らずの間に其好趣に導かるゝなり。始めて『ピックウキック・ペーパーズ』の現はれし時

より『エドウキン・ドルード』(一八七〇)の出版せらるゝ迄其間廿餘年の間は一般讀者は泉の溢れ出づる如き滑稽、諧謔に打ち興じて、人生の疲勞も苦心も全く忘れたらん有樣なりき。恰もこれ暖き日光に照さるゝ心地よさに、何時しか甘き夢路をたどるが如くなりき。然れども嚴肅に彼の作物を驗するに彼は決して忠實なる人生の解釋者なりとは許す可らず。彼は鳥羽畫師のそれの如く、人の缺點、又は奇異なる個所をば巧みに膨大誇脹する奇才を抱きしも、其作中の人物は世に實際存在するが如き性格にあらずして凡て並外れなる性格を備たり。其言語、動作の如きに至りても成べく尋常一樣ならぬ變態を選び、つとめて奇異なる性癖を現はさんことに意を用ひたり。故に時に或は『二都物語』の如き作に於て目覺しき伎倆を示すことあれども、多くは深遠高尚なる趣味を欠き、やゝもすれば人生の皮相的描寫に滿足せり。蓋し少時より下流社會に出入し、充分なる修養を積まざりし爲めなるべし。思ふに彼は一時は非常に歡迎せられしも世態人情の變遷すると共に全く忘却せらるゝ時あらん。

サッカレー

十九世紀の四大小說家は誰々なりやと問ふ人あらば、何人もそはスコット、リットン、ヂッケンス、及びサッカレイなりと答ふるに躊躇せざるべし。人又重ねて其中最も大なるものは何人ぞと問はゞサッカレーなりと答へん。彼は實にフィールデングと共に英國第一流の大小說家と稱せられ、其雄健流暢なる筆致と偉大圓滿なる思想に於ては容易に其比倫を見ざるべし。ウキリアム・メークピース・サッカレー(一八一一—一八六三)は印度のカルカッタに生れしも、早く父の死せしにより英國に來り劍橋大學に入學するに至れり。業未だ半ならず、繪畫研究の目的を以て去て巴里に行きしが成功するに至らずして歸國し、遂に文筆を以て生活を營むことゝはなりき。始めの程はヂッケンスの如くに專ら雜誌に諷刺的文章を寄稿せしが、千八百四十六年頃より『ヴァニチー・フェーア』に着手し、二年にして之を完成せり。此書によりて彼が第一流の小說家なることは社會の等しく認むる所となれり。此作はバンヤンの『天路歷程』に動されて、浮華、輕躁なる社會を冷笑諷刺する間に一種深奧なる人生觀を敍せしものなり。其滑稽の間にも寸鐵人を刺すもの、或は洒落の中に暗涙に咽ばしむるものあるは誠に人生の背景に當りたればなり。後ち『ペンデンニス』に於て作者の自敍傳をものし、越て千八百

特技

五十二年には彼が米國に行きて講演せしものを基礎とし『十八世紀の英國滑稽作家』を著はしぬ。同年『ヘンリー・エスモンド』を出して彼が縱横の健筆をば遺憾なく揮ひたり。此書は英國の歴史小說中有數の名著にして十八世紀初葉の人情、風俗を活現せしめたると同時に、作者の美はしき同情心を示めしぬ。其他『ニューカム一族』、『ヴアージニア人』、『フイリップ』、『デニス・デユーヴアル』、『四人のジョージ王』などの著あり。これらの作は量に於ては左程多からざれども、皆々捨て難き佳作なり。

サッカレーは諷刺、冷嘲の筆を弄せしと雖、決して尋常一樣の諷刺家にあらざりき。其作の裏面には深遠なる道念ありて、肅然として讀者の襟を正さしむるものあり。彼はヂッケンスの如く無敎育者にあらざりしを以て、ヂッケンスの陷りたる轍を踏まず、一層高尙なる處に着目せり。若しヂッケンスを以て下流社會の擁護者なりとすれば、サッカレーは上流社會の警戒者なりき。彼は其缺點醜所を忌憚なく指摘し之れを冷嘲して隱に道義觀念を鼓吹せり。又ヂッケンスが鳥羽繪を描き、スコットが粧飾に耽り、リットンが時好を追ふ間に獨り彼は人情の極致、人生の眞想を披瀝せんことを努めき。されば彼は一時の喧傳を以て迎へらるゝことなしと雖、永く後世の高尙なる趣味の敎訓者なるべし。彼が文章は洗練、完美の逸品にして、これのみでも優に散文界を獨歩することを得べし。

マリヤット

猶ほ以上の作家と時を同ふして名を擧げし文士を列擧すれば左の如し。

フレデリック・マリヤット（一七九二―一八四八）は海洋小說を以て名あり。始め職を海軍に奉じ一艦の指揮官に進みしも、斷然之れを辭して文筆を採れり。其作の中傑作と稱せらるゝものは『ピーター・シムプル』、『ミストル・ミッドシップマン・イーズイ』の二篇なり。共に自己の海軍生活中に見聞せし所を綴りたるものにして、今日猶ほ多數の少年愛讀者を有す。

リーヴー

チャールス・リーヴー（一八〇六―一八七二）は愛蘭土に關する滑稽小說の著者として名あり。『ハーリー・ローレケー』、『チャールス・オマレー』など名あり。

ヂスレリー

ビーコンスフイールド伯ベンジヤミン・ヂスレリー（一八〇四―一八八一）は偉大なる政治家として要職にありしも、閑を偷みて幾多の政治小說をものせり。其作には『ロテーア』、『エンデミオン』、『ヴキヴヰアン・グレー』、『ヤング・デユーク』などありて得意の機警なる諷刺的文字に富めり。

ビーコック

ス・ビーコック(一七八五―一八六六)はシエレー、メレデス等の親友にして機智、諷刺の才に富めり。其作には『ヘッドロング・ホール』、『グリル・グレーンジ』あり。

吾人はこれより比較的十九世紀後半紀に屬する作者を掲げて、其一層時代精神を確實に發揮せしことを示めすべし。

ギングスレー

チャールス・キングスレー(一八一七―一八七五)は品性高潔なる紳士にして劍橋大學の出身なりき。後ち田舍の一牧師なりしが、尋で劍橋大學の近世史の教授に擧げられ、又轉じてヴキクトリア女王の侍僧に任ぜられき。彼が高潔なる心事と寛大なる精神とは、一般人民に深き同情を寄せて、早くより社會主義の思想を抱けり。彼は本職の傍ら詩歌、小說の著述をなせしが、いづれも佳作なり。若し專心文學に身を捧げたらんには一層秀てたるものを作りしやも知るべからざりき。彼は下民に對して最も深厚なる同情を有せしを以て、當代の名士モーリス等と共に基督教社會主義の說を唱導し、又勞働者のために學校を建設するなどに盡力せり。彼は自ら好んで一派を樹立するが如きことなかりしと雖其高潔なる品性と眞摯敬虔なる信仰とは最も健全なる感化を四圍の人に與へたり。

ヘンリー・キングスレー

彼れは獨創の力に富みしも、出來得る丈け之れを時代精神と調和することに努めぬ。彼が始めての作は千八百四十四年にものせる『田舍說教集』及び四十八年の『聖者の悲劇』なれども、第一の名作は五十二年に出てたる『アルトン・ロック』なりき。この書は勞働社會の高尚なる理想を描きしものにして、卷末に於ける往昔アリアン人種の大移動をなせし夢を敘せし所など特に人の注意を惹けり。『ハイパシア』はアレキサンドルの無謀なる基督信徒が新プラトー派の淑德高き女性哲學者を慘殺せしことを敘し暗に羅馬教徒を戒めたるものなり。其他『ウエストワード・ホー！』『ヘアワード』『二年以前』『エエスト』『希臘英雄譚』等の著あり。

『希臘英雄譚』は希臘の神話を興味深く書きしものにして文章甚だ佳なり。彼は詩歌を作ること至つて僅少なりしも、甚だ頌するに堪へたり。其中『三人の漁夫』『スタアリング』『サンド・オヴ・デー』など今猶ほ人口に膾炙す。

ヘンリー・キングスレーは、チャールスの弟にして、永く濠洲に居住せしが、後ち歸國して阿兄と共に文壇に馳驅せり。著書多き中に『シエッフリー・ハムリン』『ラーヴンシュー』など有名なり。其特色は概して阿兄に似たる

トロロープ一家

所多く、又青年間に有力なる感化を與へたり。

アンソニー・トロロープ(一八一五—一八八二)はウキンチエスター、ハーロー等の學校に學びし後ち郵便局員となりしが、寸暇ある毎に見聞せし所を筆錄せしを以て其著作甚だ多かりき。彼の文體は特に見るべき程のものなかりしも其描寫せる人物、記事は決して凡庸にあらざりき。其主題となりしものは中流社會特に田舍趣味を帶べる社會にして、寫實小說に屬するものなり。彼は人生の眞相を觀破するよりは寧ろ其皮相に注意せり。作中傑作と稱せらるゝは『バーチエスター塔』、『フレムレー・パーソネージ』、『ソルン博士』などなるべし。彼の母フランセスも亦文才ありて『バルナビー未亡人』、『米國人の家庭生活』などの著あり。兄トマス・トロロープ(一八一〇—一八九二)は歷史家と小說家とを兼ね伊太利に關する小說をものせり。

リード

チャールス・リード(一八一四—一八八四)は殆んど敎育なるものを受けたることなかりしも、獨學修養の結果として、牛津大學の校友に擧げられたり。彼は雅致ある文を以て數多の歷史小說をものせしが『恐ろしき誘惑』、『クロイスター・アンド・ハース』、『ネヴアー・レート・ツー・メンド』等を著はせり。彼は雜報小說家の名を博し、批評的眼識を缺けり。

ステーヴンソン

ロバート・ルイ・ステーヴンソン(一八五〇—一八九五)は戀愛を說かず、實際を叙せざりしを以て狹義の小說家にあらずして、寧ろ傳奇記者と稱すべきなり。然れども近代の文壇に於ける彼の位地は甚だ輕からざるなり。彼は燈臺技師の家に生れ、法律を學びて狀師となりぬ。されどこれ己が長所にあらざることを知り、轉して文學に從事し短篇物を作りて雜誌に投稿せり。彼の想像は嶄新奇拔にしてローマンチック派に一新派を築かんとする程なりしが、惜い哉肺疾に襲はれて早やく歿せり。彼は始め『內海航行』、『驢馬との旅行』などをものしつゝいて『ヴヰルギニブス・プエリスクエ』(男兒と女兒との爲めにの意)、『人と書籍との親しき研究』を著はし、『寶島』に至りて一層の名聲を擧げたり。此作は十七八世紀時代の海賊のことを叙せし純粹なる傳奇物語にして少年の讀物としてはマリヤットの次に位するも文學としは遙かに其上にあり。彼は病の爲めに屢〻死に瀕する迄苦みしも、猶つて述作を怠らず、つゝいて『新アラビア物語』、『オットー皇子』、『誘拐』、『被

害者』『黑矢』(ナウツ・ナロー)『バランストレーの主領』『ロング・ボックス』『アイランド・ナイツ・インターテンメンツ』等を著せり。詩集としては『兒童園』及び『アンダーウッヅ』の二篇あり。彼の一生は病氣保養のために殆んど五大洲を轉地經過したるものと云ふも不可なし。しかも斯かる蒲柳の質にてありながら文藝界に一新機軸を出せしは吾人の深く感謝すべき所なり。彼は最も圓滿、高潔なる人にして人をチャームする一種の力を有せしを以て友人間にいたく愛好せられぬ。特に其人物の美はしき面影は千八百九十九年に出版せる『書簡文集』に躍動せしかば、一層人の愛敬を加へたり。ステーヴンソンの特色とすることは滑稽的才能と悲劇的分子とに加ふるに神秘幽艶なる分子を以てせしことなり。彼が冒險を好むは恰も兒童、少年の如きものありて、彼等の心理生活等を敘せし手腕に於ては、此作者を措いて他に求むること能はざるべし。彼は未だ嘗つて人間生活の實狀を寫せしことなし。特に女性の描寫は甚だ拙なるとは自らも告白せる所なり。されば彼が名聲は全く清新奇拔なる傳奇的想像の頗る豐麗にして、これを遣るに情趣汲めとも盡きぬ文體を以てせしことにあるべし。

キップリング

吾人は次に英國の膨脹的帝國主義の謳歌者なるルドヤード・キップリング(一八六六誕生)に付きて一言せざる可らず。近代英國の時代精神の權化たるキップリングは印度のボムベイに生れ、英國に於て教育を受けたる後ち、再び生地に歸へり、雜誌記者として世に出てぬ。それより廣く世界を周遊して、大に見聞を擴めし後ち、英國に居住せり。彼が珍奇なる作の出づるや英國は殆んど大救主を得たる如くに隨喜喝仰し、批評家の如きも其光輝のまばゆさに眩惑して暫らくは緘默せり。彼が作中小說として有名なる者は『發明の數々』(インヴェンション)『ジアングル・ブック』『第二ジャングル・ブック』『人生の重荷』(ヘンヂキップ・オヴ・ライフ)『キム』なるべく、詩集には『バラックルーム・バラッヅ』、『七つの海』(セヴン・シーズ)の二卷あり。これらの作はいづれもアングロ・サクソン人種の偉大なる發展を謳歌せし者なり。されど暫らく眩惑せられたる批評界は、やがて其スペルを破りて評論の自由を恢復せり。即ち彼等は此年少作家の時代精神を謳歌するに餘りに熱衷して全く文藝趣味と道念思想を犧牲とせしことを明白に發見せり。茲に於てか世の評判は決して文藝の價値を判斷する評準にあらざることは今更らの如くに知られぬ。されどキップリング未だ春秋に富み、希望洋

北他

々たり。今後如何なる發達をなすべきか。乞ふ將來の評家に問はしめよ。

猶ほ當代多少の名を聽かせし者を左に擧げん。メレデスの流を汲みしトマス・ハーデー(一八四〇―)あり。思索的傳奇記者ヘンリー・ショートハウス(一八三四―)あり。ジョージ・エリオットの衣鉢を繼ぎしハムフリー・ウード夫人あり。ヂッケンスに倣ひしウオルダー・ベーザント(一八三六―一九〇一)及びジエームス・ベーン(一八三〇―一八九九)あり。探偵小說家にはコナン・トイル(一八五九―)あり。其他ウキルキー・コリンス(一八二四―一八八九)リチヤート・ブラックモーア(一八二五―一九〇〇)マーガレット・オリフアント(一八二八―一八九七)等あり、

英國文學史　終

明治四十年二月五日印刷
明治四十年二月拾日發行

英國文學史奥付(並製)
定價金四拾錢

編者　栗原基
編者　藤澤周次
發行者　東京市日本橋區本町三丁目八番地　大橋新太郎
印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　飯田三千太郎
印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍工場

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

所有著作權

每編各專門諸大家執筆

帝國百科全書

全部二百冊
每卷紙數約三百廿頁
總紙數約六萬六千頁

定價 並製 ●一冊四拾錢●十冊叁圓七十錢●二十五冊八圓八拾錢●五十冊拾七圓●百冊叁拾叁圓●全部二百冊六拾五圓 郵稅一冊八錢

特製 ●一冊五拾五錢●十冊五圓●二十五冊拾貳圓四●百冊四拾五●全部二百冊八拾八圓 郵稅一冊拾錢

(一)世界文明史
(二)日本新地理
(三)東洋倫理學史
(四)肥料哲學
(五)新撰算術學
(六)宗教學
(七)農產製造學
(八)萬國新文學
(九)支那文學
(一〇)農學辭典
(一一)修理汎論
(一二)論培養汎論
(一三)栽植物英文學
(一四)邦語營養學
(一五)植物學
(一六)新撰代數
(一七)地質學
(一八)森林學
(一九)新撰何學
(二〇)議會及政黨論
(二一)土地改良論
(二二)邦語獨逸文章論
(二三)語佛蘭西文典上
(二四)語佛蘭西文典下
(二五)東洋歷史
(二六)行政裁判法
(二七)行政法汎論
(二八)養蠶及製絲學
(二九)心理學
(三〇)銀行新論附爲替國
(三一)行政法各論
(三二)家禽學
(三三)支那哲學
(三四)園藝通史
(三五)衛生化學論
(三六)刑事訴訟法論
(三七)獸動物學
(三八)新撰生理學
(三九)保險通論
(四〇)世界宗教制度論
(四一)日本產文明史
(四二)露支侵略提要史
(四三)最近國際交換史
(四四)政治地理學
(四五)現代露西亞
(四六)金融論
(四七)稻作改良論
(四八)工業政策論
(四九)新撰應用重農學
(五〇)植物病理學
(五一)世界殖民史
(五二)日本帝國憲法學
(五三)比較儒神話學
(五四)地文學
(五五)日本佛教史
(五六)園藝各論
(五七)食物學
(五八)兒童心理學
(五九)世界美術史上
(六〇)經濟政策概論
(六一)政治學史
(六二)啓學汎論
(六三)獸醫應用定量分析論
(六四)宗教新化史
(六五)佛教哲學鮮論
(六六)社會倫理學
(六七)朝鮮物化論
(六八)韓國地理學
(六九)鑛業新論
(七〇)進國商業
(七一)清國商業
(七二)最西洋音樂史
(七三)近世美術史
(七四)日本通天人文學
(七五)高等文類學
(七六)普通物理學上
(七七)普通物理學下
(七八)處世哲學
(七九)國家學
(八〇)政治心理學
(八一)近世教育學
(八二)最新教育學
(八三)日本口語文典
(八四)佛教倫理學
(八五)佛語發音學
(八六)視音字
(八七)佛教美術史
(八八)印度文明史
(八九)度文發生學
(九〇)動物學概論
(九一)藝術論
(九二)文學史
(九三)最西洋哲學史
(九四)言語學上
(九五)世界文學史下
(九六)英國文學史
(九七)日近世美術史
(九八)普通天人文學
(九九)高等類學
(一〇〇)西洋音樂史
(一〇一)日本產文明史
(一〇二)露支侵略提要史
(一〇三)最近國際交換史
(一〇四)政治地理學
(一〇五)現代露西亞
(一〇六)金融論
(一〇七)稻作改良論
(一〇八)工業政策論
(一〇九)新撰應用重農學
(一一〇)植物病理學
(一一一)世界殖民史
(一一二)日本帝國憲法學
(一一三)比較儒神話學
(一一四)地文學
(一一五)日本佛教史
(一一六)園藝各論
(一一七)食物學
(一一八)兒童心理學
(一一九)世界美術史下
(一二〇)經濟政策概論
(一二一)政治學史
(一二二)啓學汎論
(一二三)獸醫應用定量分析論
(一二四)宗教新化史
(一二五)佛教哲學鮮論
(一二六)社會倫理學
(一二七)朝鮮物化論
(一二八)韓國地理學
(一二九)鑛業新論
(一三〇)進國商業
(一三一)清國商業
(一三二)最西洋音樂史
(一三三)近世美術史
(一三四)日本通天人文學
(一三五)高等類學
(一三六)西洋音樂史
(一三七)日近世美術史
(一三八)普通天人文學
(一三九)高等類學
(一四〇)西洋音樂史
(一四一)日本產文明史
(一四二)露支侵略提要史
(一四三)最近國際交換史
(一四四)政治地理學
(一四五)現代露西亞
(一四六)金融論
(一四七)稻作改良論
(一四八)工業政策論
(一四九)新撰應用重農學
(一五〇)植物病理學
(一五一)世界殖民史
(一五二)日本帝國憲法學
(一五三)比較儒神話學
(一五四)地文學
(一五五)日本佛教史
(一五六)園藝各論
(一五七)食物學
(一五八)兒童心理學
(一五九)世界美術史上
(一六〇)經濟政策概論
(一六一)政治學史
(一六二)啓學汎論
(一六三)獸醫應用定量分析論
(一六四)宗教新化史
(一六五)佛教哲學鮮論
(一六六)社會倫理學
(一六七)朝鮮物化論
(一六八)韓國地理學
(一六九)鑛業新論
(一七〇)進國商業
(一七一)清國商業
(一七二)最西洋音樂史
(一七三)近世美術史
(一七四)日本通天人文學
(一七五)高等類學
(一七六)西洋音樂史
(一七七)日近世美術史
(一七八)普通天人文學
(一七九)高等類學
(一八〇)西洋音樂史
(一八一)日本產文明史
(一八二)露支侵略提要史
(一八三)最近國際交換史
(一八四)政治地理學
(一八五)現代露西亞
(一八六)金融論
(一八七)稻作改良論
(一八八)工業政策論
(一八九)新撰應用重農學
(一九〇)植物病理學
(一九一)世界殖民史
(一九二)日本帝國憲法學
(一九三)比較儒神話學
(一九四)地文學
(一九五)日本佛教史
(一九六)園藝各論
(一九七)食物學
(一九八)兒童心理學
(一九九)世界美術史下
(二〇〇)經濟政策概論
(二〇一)政治學史
(二〇二)啓學汎論
(二〇三)獸醫應用定量分析論
(二〇四)宗教新化史
(二〇五)佛教哲學鮮論
(二〇六)社會倫理學
(二〇七)朝鮮物化論
(二〇八)韓國地理學
(二〇九)鑛業新論
(二一〇)進國商業
(二一一)清國商業
(二一二)最西洋音樂史
(二一三)近世美術史
(二一四)日本通天人文學
(二一五)高等類學
(二一六)西洋音樂史
(二一七)日近世美術史
(二一八)普通天人文學
(二一九)高等類學
(二二〇)西洋音樂史
(二二一)日本產文明史
(二二二)露支侵略提要史
(二二三)最近國際交換史
(二二四)政治地理學
(二二五)現代露西亞
(二二六)金融論
(二二七)稻作改良論
(二二八)工業政策論
(二二九)新撰應用重農學
(二三〇)植物病理學
(二三一)世界殖民史
(二三二)日本帝國憲法學
(二三三)比較儒神話學
(二三四)地文學
(二三五)日本佛教史
(二三六)園藝各論
(二三七)食物學
(二三八)兒童心理學
(二三九)世界美術史
(二四〇)經濟政策概論
(二四一)政治學史
(二四二)啓學汎論
(二四三)獸醫應用定量分析論
(二四四)宗教新化史
(二四五)佛教哲學鮮論
(二四六)社會倫理學
(二四七)朝鮮物化論
(二四八)韓國地理學
(二四九)鑛業新論
(二五〇)進國商業
(二五一)清國商業
(二五二)最西洋音樂史
(二五三)近世美術史
(二五四)日本通天人文學
(二五五)高等類學
(二五六)西洋音樂史
(二五七)日近世美術史
(二五八)普通天人文學
(二五九)高等類學
(二六〇)西洋音樂史
(二六一)日本產文明史
(二六二)露支侵略提要史
(二六三)最近國際交換史
(二六四)政治地理學
(二六五)現代露西亞
(二六六)金融論
(二六七)稻作改良論
(二六八)工業政策論
(二六九)新撰應用重農學
(二七〇)植物病理學
(二七一)世界殖民史
(二七二)日本帝國憲法學
(二七三)比較儒神話學
(二七四)地文學
(二七五)日本佛教史
(二七六)園藝各論
(二七七)食物學
(二七八)兒童心理學
(二七九)世界美術史
(二八〇)經濟政策概論
(二八一)政治學史
(二八二)啓學汎論
(二八三)獸醫應用定量分析論
(二八四)宗教新化史
(二八五)佛教哲學鮮論
(二八六)社會倫理學
(二八七)朝鮮物化論
(二八八)韓國地理學
(二八九)鑛業新論
(二九〇)進國商業
(二九一)清國商業
(二九二)最西洋音樂史
(二九三)近世美術史
(二九四)日本通天人文學
(二九五)高等類學
(二九六)西洋音樂史
(二九七)日近世美術史
(二九八)普通天人文學
(二九九)高等類學
(三〇〇)西洋音樂史
(三〇一)日本產文明史
(三〇二)露支侵略提要史
(三〇三)最近國際交換史
(三〇四)政治地理學
(三〇五)現代露西亞
(三〇六)金融論
(三〇七)稻作改良論
(三〇八)工業政策論
(三〇九)新撰應用重農學
(三一〇)植物病理學
(三一一)世界殖民史
(三一二)日本帝國憲法學
(三一三)比較儒神話學
(三一四)地文學
(三一五)日本佛教史
(三一六)園藝各論
(三一七)食物學
(三一八)兒童心理學
(三一九)世界美術史
(三二〇)經濟政策概論
(三二一)政治學史
(三二二)啓學汎論
(三二三)獸醫應用定量分析論
(三二四)宗教新化史
(三二五)佛教哲學鮮論
(三二六)社會倫理學
(三二七)朝鮮物化論
(三二八)韓國地理學
(三二九)鑛業新論
(三三〇)進國商業
(三三一)清國商業
(三三二)最西洋音樂史
(三三三)近世美術史
(三三四)日本通天人文學
(三三五)高等類學
(三三六)西洋音樂史
(三三七)日近世美術史
(三三八)普通天人文學
(三三九)高等類學
(三四〇)西洋音樂史
(三四一)日本產文明史
(三四二)露支侵略提要史
(三四三)最近國際交換史
(三四四)政治地理學
(三四五)現代露西亞
(三四六)金融論
(三四七)稻作改良論
(三四八)工業政策論
(三四九)新撰應用重農學
(三五〇)植物病理學
(三五一)世界殖民史
(三五二)日本帝國憲法學
(三五三)比較儒神話學
(三五四)地文學
(三五五)日本佛教史
(三五六)園藝各論
(三五七)食物學
(三五八)兒童心理學
(三五九)世界美術史
(三六〇)經濟政策概論
(三六一)政治學史
(三六二)啓學汎論
(三六三)獸醫應用定量分析論
(三六四)宗教新化史
(三六五)佛教哲學鮮論
(三六六)社會倫理學
(三六七)朝鮮物化論
(三六八)韓國地理學
(三六九)鑛業新論
(三七〇)進國商業
(三七一)清國商業
(三七二)最西洋音樂史
(三七三)近世美術史
(三七四)日本通天人文學
(三七五)高等類學
(三七六)西洋音樂史
(三七七)日近世美術史
(三七八)普通天人文學
(三七九)高等類學
(三八〇)西洋音樂史
(三八一)日本產文明史
(三八二)露支侵略提要史
(三八三)最近國際交換史
(三八四)政治地理學
(三八五)現代露西亞
(三八六)金融論
(三八七)稻作改良論
(三八八)工業政策論
(三八九)新撰應用重農學
(三九〇)植物病理學
(三九一)世界殖民史
(三九二)日本帝國憲法學
(三九三)比較儒神話學
(三九四)地文學
(三九五)日本佛教史
(三九六)園藝各論
(三九七)食物學
(三九八)兒童心理學
(三九九)世界美術史
(四〇〇)經濟政策概論
(四〇一)政治學史
(四〇二)啓學汎論
(四〇三)獸醫應用定量分析論
(四〇四)宗教新化史
(四〇五)佛教哲學鮮論
(四〇六)社會倫理學
(四〇七)朝鮮物化論
(四〇八)韓國地理學
(四〇九)鑛業新論
(四一〇)進國商業
(四一一)清國商業
(四一二)最西洋音樂史
(四一三)近世美術史
(四一四)日本通天人文學
(四一五)高等類學
(四一六)西洋音樂史
(四一七)日近世美術史
(四一八)普通天人文學
(四一九)高等類學
(四二〇)西洋音樂史
(四二一)日本產文明史
(四二二)露支侵略提要史
(四二三)最近國際交換史
(四二四)政治地理學
(四二五)現代露西亞
(四二六)金融論
(四二七)稻作改良論
(四二八)工業政策論
(四二九)新撰應用重農學
(四三〇)植物病理學
(四三一)世界殖民史
(四三二)日本帝國憲法學
(四三三)比較儒神話學
(四三四)地文學
(四三五)日本佛教史
(四三六)園藝各論
(四三七)食物學
(四三八)兒童心理學
(四三九)世界美術史
(四四〇)經濟政策概論
(四四一)政治學史
(四四二)啓學汎論
(四四三)獸醫應用定量分析論
(四四四)宗教新化史
(四四五)佛教哲學鮮論
(四四六)社會倫理學
(四四七)朝鮮物化論
(四四八)韓國地理學
(四四九)鑛業新論
(四五〇)進國商業
(四五一)清國商業
(四五二)最西洋音樂史
(四五三)近世美術史
(四五四)日本通天人文學
(四五五)高等類學
(四五六)西洋音樂史
(四五七)日近世美術史
(四五八)普通天人文學
(四五九)高等類學
(四六〇)西洋音樂史
(四六一)日本產文明史
(四六二)露支侵略提要史
(四六三)最近國際交換史
(四六四)政治地理學
(四六五)現代露西亞
(四六六)金融論
(四六七)稻作改良論
(四六八)工業政策論
(四六九)新撰應用重農學
(四七〇)植物病理學
(四七一)世界殖民史
(四七二)日本帝國憲法學
(四七三)比較儒神話學
(四七四)地文學
(四七五)日本佛教史
(四七六)園藝各論
(四七七)食物學
(四七八)兒童心理學
(四七九)世界美術史
(四八〇)經濟政策概論
(四八一)政治學史
(四八二)啓學汎論
(四八三)獸醫應用定量分析論
(四八四)宗教新化史
(四八五)佛教哲學鮮論
(四八六)社會倫理學
(四八七)朝鮮物化論
(四八八)韓國地理學
(四八九)鑛業新論
(四九〇)進國商業
(四九一)清國商業
(四九二)最西洋音樂史
(四九三)近世美術史
(四九四)日本通天人文學
(四九五)高等類學
(四九六)西洋音樂史
(四九七)日近世美術史
(四九八)普通天人文學
(四九九)高等類學
(五〇〇)西洋音樂史
(五〇一)日本產文明史
(五〇二)露支侵略提要史
(五〇三)最近國際交換史
(五〇四)政治地理學
(五〇五)現代露西亞
(五〇六)金融論
(五〇七)稻作改良論
(五〇八)工業政策論
(五〇九)新撰應用重農學
(五一〇)植物病理學
(五一一)世界殖民史
(五一二)日本帝國憲法學
(五一三)比較儒神話學
(五一四)地文學
(五一五)日本佛教史
(五一六)園藝各論
(五一七)食物學
(五一八)兒童心理學
(五一九)世界美術史
(五二〇)經濟政策概論
(五二一)政治學史
(五二二)啓學汎論
(五二三)獸醫應用定量分析論
(五二四)宗教新化史
(五二五)佛教哲學鮮論
(五二六)社會倫理學
(五二七)朝鮮物化論
(五二八)韓國地理學
(五二九)鑛業新論
(五三〇)進國商業
(五三一)清國商業
(五三二)最西洋音樂史
(五三三)近世美術史
(五三四)日本通天人文學
(五三五)高等類學
(五三六)西洋音樂史
(五三七)日近世美術史
(五三八)普通天人文學
(五三九)高等類學
(五四〇)西洋音樂史
(五四一)日本產文明史
(五四二)露支侵略提要史
(五四三)最近國際交換史
(五四四)政治地理學
(五四五)現代露西亞
(五四六)金融論
(五四七)稻作改良論
(五四八)工業政策論
(五四九)新撰應用重農學
(五五〇)植物病理學
(五五一)世界殖民史
(五五二)日本帝國憲法學
(五五三)比較儒神話學
(五五四)地文學
(五五五)日本佛教史
(五五六)園藝各論
(五五七)食物學
(五五八)兒童心理學
(五五九)世界美術史
(五六〇)經濟政策概論
(五六一)政治學史
(五六二)啓學汎論
(五六三)獸醫應用定量分析論
(五六四)宗教新化史
(五六五)佛教哲學鮮論
(五六六)社會倫理學
(五六七)朝鮮物化論
(五六八)韓國地理學
(五六九)鑛業新論
(五七〇)進國商業
(五七一)清國商業
(五七二)最西洋音樂史
(五七三)近世美術史
(五七四)日本通天人文學
(五七五)高等類學
(五七六)西洋音樂史
(五七七)日近世美術史
(五七八)普通天人文學
(五七九)高等類學
(五八〇)西洋音樂史
(五八一)日本產文明史
(五八二)露支侵略提要史
(五八三)最近國際交換史
(五八四)政治地理學
(五八五)現代露西亞
(五八六)金融論
(五八七)稻作改良論
(五八八)工業政策論
(五八九)新撰應用重農學
(五九〇)植物病理學
(五九一)世界殖民史
(五九二)日本帝國憲法學
(五九三)比較儒神話學
(五九四)地文學
(五九五)日本佛教史
(五九六)園藝各論
(五九七)食物學
(五九八)兒童心理學
(五九九)世界美術史
(六〇〇)經濟政策概論
(六〇一)政治學史
(六〇二)啓學汎論
(六〇三)獸醫應用定量分析論
(六〇四)宗教新化史
(六〇五)佛教哲學鮮論
(六〇六)社會倫理學
(六〇七)朝鮮物化論
(六〇八)韓國地理學
(六〇九)鑛業新論
(六一〇)進國商業
(六一一)清國商業
(六一二)最西洋音樂史
(六一三)近世美術史
(六一四)日本通天人文學
(六一五)高等類學
(六一六)西洋音樂史
(六一七)日近世美術史
(六一八)普通天人文學
(六一九)高等類學
(六二〇)西洋音樂史
(六二一)日本產文明史
(六二二)露支侵略提要史
(六二三)最近國際交換史
(六二四)政治地理學
(六二五)現代露西亞
(六二六)金融論
(六二七)稻作改良論
(六二八)工業政策論
(六二九)新撰應用重農學
(六三〇)植物病理學
(六三一)世界殖民史
(六三二)日本帝國憲法學
(六三三)比較儒神話學
(六三四)地文學
(六三五)日本佛教史
(六三六)園藝各論
(六三七)食物學
(六三八)兒童心理學
(六三九)世界美術史
(六四〇)經濟政策概論
(六四一)政治學史
(六四二)啓學汎論
(六四三)獸醫應用定量分析論
(六四四)宗教新化史
(六四五)佛教哲學鮮論
(六四六)社會倫理學
(六四七)朝鮮物化論
(六四八)韓國地理學
(六四九)鑛業新論
(六五〇)進國商業
(六五一)清國商業
(六五二)最西洋音樂史
(六五三)近世美術史
(六五四)日本通天人文學
(六五五)高等類學
(六五六)西洋音樂史
(六五七)日近世美術史
(六五八)普通天人文學
(六五九)高等類學
(六六〇)西洋音樂史
(六六一)日本產文明史
(六六二)露支侵略提要史
(六六三)最近國際交換史
(六六四)政治地理學
(六六五)現代露西亞
(六六六)金融論
(六六七)稻作改良論
(六六八)工業政策論
(六六九)新撰應用重農學
(六七〇)植物病理學
(六七一)世界殖民史
(六七二)日本帝國憲法學
(六七三)比較儒神話學
(六七四)地文學
(六七五)日本佛教史
(六七六)園藝各論
(六七七)食物學
(六七八)兒童心理學
(六七九)世界美術史
(六八〇)經濟政策概論
(六八一)政治學史
(六八二)啓學汎論
(六八三)獸醫應用定量分析論
(六八四)宗教新化史
(六八五)佛教哲學鮮論
(六八六)社會倫理學
(六八七)朝鮮物化論
(六八八)韓國地理學
(六八九)鑛業新論
(六九〇)進國商業
(六九一)清國商業
(六九二)最西洋音樂史
(六九三)近世美術史
(六九四)日本通天人文學
(六九五)高等類學
(六九六)西洋音樂史
(六九七)日近世美術史
(六九八)普通天人文學
(六九九)高等類學
(七〇〇)西洋音樂史
(七〇一)日本產文明史
(七〇二)露支侵略提要史
(七〇三)最近國際交換史
(七〇四)政治地理學
(七〇五)現代露西亞
(七〇六)金融論
(七〇七)稻作改良論
(七〇八)工業政策論
(七〇九)新撰應用重農學
(七一〇)植物病理學
(七一一)世界殖民史
(七一二)日本帝國憲法學
(七一三)比較儒神話學
(七一四)地文學
(七一五)日本佛教史
(七一六)園藝各論
(七一七)食物學
(七一八)兒童心理學
(七一九)世界美術史
(七二〇)經濟政策概論
(七二一)政治學史
(七二二)啓學汎論
(七二三)獸醫應用定量分析論
(七二四)宗教新化史
(七二五)佛教哲學鮮論
(七二六)社會倫理學
(七二七)朝鮮物化論
(七二八)韓國地理學
(七二九)鑛業新論
(七三〇)進國商業
(七三一)清國商業
(七三二)最西洋音樂史
(七三三)近世美術史
(七三四)日本通天人文學
(七三五)高等類學
(七三六)西洋音樂史
(七三七)日近世美術史
(七三八)普通天人文學
(七三九)高等類學
(七四〇)西洋音樂史
(七四一)日本產文明史
(七四二)露支侵略提要史
(七四三)最近國際交換史
(七四四)政治地理學
(七四五)現代露西亞
(七四六)金融論
(七四七)稻作改良論
(七四八)工業政策論
(七四九)新撰應用重農學
(七五〇)植物病理學
(七五一)世界殖民史
(七五二)日本帝國憲法學
(七五三)比較儒神話學
(七五四)地文學
(七五五)日本佛教史
(七五六)園藝各論
(七五七)食物學
(七五八)兒童心理學
(七五九)世界美術史
(七六〇)經濟政策概論
(七六一)政治學史
(七六二)啓學汎論
(七六三)獸醫應用定量分析論
(七六四)宗教新化史
(七六五)佛教哲學鮮論
(七六六)社會倫理學
(七六七)朝鮮物化論
(七六八)韓國地理學
(七六九)鑛業新論
(七七〇)進國商業
(七七一)清國商業
(七七二)最西洋音樂史
(七七三)近世美術史
(七七四)日本通天人文學
(七七五)高等類學
(七七六)西洋音樂史
(七七七)日近世美術史
(七七八)普通天人文學
(七七九)高等類學
(七八〇)西洋音樂史
(七八一)日本產文明史
(七八二)露支侵略提要史
(七八三)最近國際交換史
(七八四)政治地理學
(七八五)現代露西亞
(七八六)金融論
(七八七)稻作改良論
(七八八)工業政策論
(七八九)新撰應用重農學
(七九〇)植物病理學
(七九一)世界殖民史
(七九二)日本帝國憲法學
(七九三)比較儒神話學
(七九四)地文學
(七九五)日本佛教史
(七九六)園藝各論
(七九七)食物學
(七九八)兒童心理學
(七九九)世界美術史
(八〇〇)經濟政策概論
(八〇一)政治學史
(八〇二)啓學汎論
(八〇三)獸醫應用定量分析論
(八〇四)宗教新化史
(八〇五)佛教哲學鮮論
(八〇六)社會倫理學
(八〇七)朝鮮物化論
(八〇八)韓國地理學
(八〇九)鑛業新論
(八一〇)進國商業
(八一一)清國商業
(八一二)最西洋音樂史
(八一三)近世美術史
(八一四)日本通天人文學
(八一五)高等類學
(八一六)西洋音樂史
(八一七)日近世美術史
(八一八)普通天人文學
(八一九)高等類學
(八二〇)西洋音樂史
(八二一)日本產文明史
(八二二)露支侵略提要史
(八二三)最近國際交換史
(八二四)政治地理學
(八二五)現代露西亞
(八二六)金融論
(八二七)稻作改良論
(八二八)工業政策論
(八二九)新撰應用重農學
(八三〇)植物病理學
(八三一)世界殖民史
(八三二)日本帝國憲法學
(八三三)比較儒神話學
(八三四)地文學
(八三五)日本佛教史
(八三六)園藝各論
(八三七)食物學
(八三八)兒童心理學
(八三九)世界美術史
(八四〇)經濟政策概論
(八四一)政治學史
(八四二)啓學汎論
(八四三)獸醫應用定量分析論
(八四四)宗教新化史
(八四五)佛教哲學鮮論
(八四六)社會倫理學
(八四七)朝鮮物化論
(八四八)韓國地理學
(八四九)鑛業新論
(八五〇)進國商業
(八五一)清國商業
(八五二)最西洋音樂史
(八五三)近世美術史
(八五四)日本通天人文學
(八五五)高等類學
(八五六)西洋音樂史
(八五七)日近世美術史
(八五八)普通天人文學
(八五九)高等類學
(八六〇)西洋音樂史
(八六一)日本產文明史
(八六二)露支侵略提要史
(八六三)最近國際交換史
(八六四)政治地理學
(八六五)現代露西亞
(八六六)金融論
(八六七)稻作改良論
(八六八)工業政策論
(八六九)新撰應用重農學
(八七〇)植物病理學
(八七一)世界殖民史
(八七二)日本帝國憲法學
(八七三)比較儒神話學
(八七四)地文學
(八七五)日本佛教史
(八七六)園藝各論
(八七七)食物學
(八七八)兒童心理學
(八七九)世界美術史
(八八〇)經濟政策概論
(八八一)政治學史
(八八二)啓學汎論
(八八三)獸醫應用定量分析論
(八八四)宗教新化史
(八八五)佛教哲學鮮論
(八八六)社會倫理學
(八八七)朝鮮物化論
(八八八)韓國地理學
(八八九)鑛業新論
(八九〇)進國商業
(八九一)清國商業
(八九二)最西洋音樂史
(八九三)近世美術史
(八九四)日本通天人文學
(八九五)高等類學
(八九六)西洋音樂史
(八九七)日近世美術史
(八九八)普通天人文學
(八九九)高等類學
(九〇〇)西洋音樂史
(九〇一)日本產文明史
(九〇二)露支侵略提要史
(九〇三)最近國際交換史
(九〇四)政治地理學
(九〇五)現代露西亞
(九〇六)金融論
(九〇七)稻作改良論
(九〇八)工業政策論
(九〇九)新撰應用重農學
(九一〇)植物病理學
(九一一)世界殖民史
(九一二)日本帝國憲法學
(九一三)比較儒神話學
(九一四)地文學
(九一五)日本佛教史
(九一六)園藝各論
(九一七)食物學
(九一八)兒童心理學
(九一九)世界美術史
(九二〇)經濟政策概論
(九二一)政治學史
(九二二)啓學汎論
(九二三)獸醫應用定量分析論
(九二四)宗教新化史
(九二五)佛教哲學鮮論
(九二六)社會倫理學
(九二七)朝鮮物化論
(九二八)韓國地理學
(九二九)鑛業新論
(九三〇)進國商業
(九三一)清國商業
(九三二)最西洋音樂史
(九三三)近世美術史
(九三四)日本通天人文學
(九三五)高等類學
(九三六)西洋音樂史
(九三七)日近世美術史
(九三八)普通天人文學
(九三九)高等類學
(九四〇)西洋音樂史
(九四一)日本產文明史
(九四二)露支侵略提要史
(九四三)最近國際交換史
(九四四)政治地理學
(九四五)現代露西亞
(九四六)金融論
(九四七)稻作改良論
(九四八)工業政策論
(九四九)新撰應用重農學
(九五〇)植物病理學
(九五一)世界殖民史
(九五二)日本帝國憲法學
(九五三)比較儒神話學
(九五四)地文學
(九五五)日本佛教史
(九五六)園藝各論
(九五七)食物學
(九五八)兒童心理學
(九五九)世界美術史
(九六〇)經濟政策概論
(九六一)政治學史
(九六二)啓學汎論
(九六三)獸醫應用定量分析論
(九六四)宗教新化史
(九六五)佛教哲學鮮論
(九六六)社會倫理學
(九六七)朝鮮物化論
(九六八)韓國地理學
(九六九)鑛業新論
(九七〇)進國商業
(九七一)清國商業
(九七二)最西洋音樂史
(九七三)近世美術史
(九七四)日本通天人文學
(九七五)高等類學
(九七六)西洋音樂史
(九七七)日近世美術史
(九七八)普通天人文學
(九七九)高等類學
(九八〇)西洋音樂史
(九八一)日本產文明史
(九八二)露支侵略提要史
(九八三)最近國際交換史
(九八四)政治地理學
(九八五)現代露西亞
(九八六)金融論
(九八七)稻作改良論
(九八八)工業政策論
(九八九)新撰應用重農學
(九九〇)植物病理學
(九九一)世界殖民史
(九九二)日本帝國憲法學
(九九三)比較儒神話學
(九九四)地文學
(九九五)日本佛教史
(九九六)園藝各論
(九九七)食物學
(九九八)兒童心理學
(九九九)世界美術史
(一〇〇〇)經濟政策概論
(一〇〇一)政治學史
(一〇〇二)啓學汎論
(一〇〇三)獸醫應用定量分析論
(一〇〇四)宗教新化史
(一〇〇五)佛教哲學鮮論
(一〇〇六)社會倫理學
(一〇〇七)朝鮮物化論
(一〇〇八)韓國地理學
(一〇〇九)鑛業新論
(一〇一〇)進國商業
(一〇一一)清國商業
(一〇一二)最西洋音樂史
(一〇一三)近世美術史
(一〇一四)日本通天人文學
(一〇一五)高等類學
(一〇一六)西洋音樂史
(一〇一七)日近世美術史
(一〇一八)普通天人文學
(一〇一九)高等類學
(一〇二〇)西洋音樂史
(一〇二一)日本產文明史
(一〇二二)露支侵略提要史
(一〇二三)最近國際交換史
(一〇二四)政治地理學
(一〇二五)現代露西亞
(一〇二六)金融論
(一〇二七)稻作改良論
(一〇二八)工業政策論
(一〇二九)新撰應用重農學
(一〇三〇)植物病理學
(一〇三一)世界殖民史
(一〇三二)日本帝國憲法學
(一〇三三)比較儒神話學
(一〇三四)地文學
(一〇三五)日本佛教史
(一〇三六)園藝各論
(一〇三七)食物學
(一〇三八)兒童心理學
(一〇三九)世界美術史
(一〇四〇)經濟政策概論
(一〇四一)政治學史
(一〇四二)啓學汎論
(一〇四三)獸醫應用定量分析論
(一〇四四)宗教新化史
(一〇四五)佛教哲學鮮論
(一〇四六)社會倫理學
(一〇四七)朝鮮物化論
(一〇四八)韓國地理學
(一〇四九)鑛業新論
(一〇五〇)進國商業
(一〇五一)清國商業
(一〇五二)最西洋音樂史
(一〇五三)近世美術史
(一〇五四)日本通天人文學
(一〇五五)高等類學
(一〇五六)西洋音樂史
(一〇五七)日近世美術史
(一〇五八)普通天人文學
(一〇五九)高等類學
(一〇六〇)西洋音樂史
(一〇六一)日本產文明史
(一〇六二)露支侵略提要史
(一〇六三)最近國際交換史
(一〇六四)政治地理學
(一〇六五)現代露西亞
(一〇六六)金融論
(一〇六七)稻作改良論
(一〇六八)工業政策論
(一〇六九)新撰應用重農學
(一〇七〇)植物病理學
(一〇七一)世界殖民史
(一〇七二)日本帝國憲法學
(一〇七三)比較儒神話學
(一〇七四)地文學
(一〇七五)日本佛教史
(一〇七六)園藝各論
(一〇七七)食物學
(一〇七八)兒童心理學
(一〇七九)世界美術史
(一〇八〇)經濟政策概論
(一〇八一)政治學史
(一〇八二)啓學汎論
(一〇八三)獸醫應用定量分析論
(一〇八四)宗教新化史
(一〇八五)佛教哲學鮮論
(一〇八六)社會倫理學
(一〇八七)朝鮮物化論
(一〇八八)韓國地理學
(一〇八九)鑛業新論
(一〇九〇)進國商業
(一〇九一)清國商業
(一〇九二)最西洋音樂史
(一〇九三)近世美術史
(一〇九四)日本通天人文學
(一〇九五)高等類學
(一〇九六)西洋音樂史
(一〇九七)日近世美術史
(一〇九八)普通天人文學
(一〇九九)高等類學
(一一〇〇)西洋音樂史
(一一〇一)日本產文明史
(一一〇二)露支侵略提要史
(一一〇三)最近國際交換史
(一一〇四)政治地理學
(一一〇五)現代露西亞
(一一〇六)金融論
(一一〇七)稻作改良論
(一一〇八)工業政策論
(一一〇九)新撰應用重農學
(一一一〇)植物病理學
(一一一一)世界殖民史
(一一一二)日本帝國憲法學
(一一一三)比較儒神話學
(一一一四)地文學
(一一一五)日本佛教史
(一一一六)園藝各論
(一一一七)食物學
(一一一八)兒童心理學
(一一一九)世界美術史
(一一二〇)經濟政策概論
(一一二一)政治學史
(一一二二)啓學汎論
(一一二三)獸醫應用定量分析論
(一一二四)宗教新化史
(一一二五)佛教哲學鮮論
(一一二六)社會倫理學
(一一二七)朝鮮物化論
(一一二八)韓國地理學
(一一二九)鑛業新論
(一一三〇)進國商業
(一一三一)清國商業
(一一三二)最西洋音樂史
(一一三三)近世美術史
(一一三四)日本通天人文學
(一一三五)高等類學
(一一三六)西洋音樂史
(一一三七)日近世美術史
(一一三八)普通天人文學
(一一三九)高等類學
(一一四〇)西洋音樂史
(一一四一)日本產文明史
(一一四二)露支侵略提要史
(一一四三)最近國際交換史
(一一四四)政治地理學
(一一四五)現代露西亞
(一一四六)金融論
(一一四七)稻作改良論
(一一四八)工業政策論
(一一四九)新撰應用重農學
(一一五〇)植物病理學
(一一五一)世界殖民史
(一一五二)日本帝國憲法學
(一一五三)比較儒神話學
(一一五四)地文學
(一一五五)日本佛教史
(一一五六)園藝各論
(一一五七)食物學
(一一五八)兒童心理學
(一一五九)世界美術史
(一一六〇)經濟政策概論
(一一六一)政治學史
(一一六二)啓學汎論
(一一六三)獸醫應用定量分析論
(一一六四)宗教新化史
(一一六五)佛教哲學鮮論
(一一六六)社會倫理學
(一一六七)朝鮮物化論
(一一六八)韓國地理學
(一一六九)鑛業新論
(一一七〇)進國商業
(一一七一)清國商業
(一一七二)最西洋音樂史
(一一七三)近世美術史
(一一七四)日本通天人文學
(一一七五)高等類學
(一一七六)西洋音樂史
(一一七七)日近世美術史
(一一七八)普通天人文學
(一一七九)高等類學
(一一八〇)西洋音樂史
(一一八一)日本產文明史
(一一八二)露支侵略提要史
(一一八三)最近國際交換史
(一一八四)政治地理學
(一一八五)現代露西亞
(一一八六)金融論
(一一八七)稻作改良論
(一一八八)工業政策論
(一一八九)新撰應用重農學
(一一九〇)植物病理學
(一一九一)世界殖民史
(一一九二)日本帝國憲法學
(一一九三)比較儒神話學
(一一九四)地文學
(一一九五)日本佛教史
(一一九六)園藝各論
(一一九七)食物學
(一一九八)兒童心理學
(一一九九)世界美術史
(一二〇〇)經濟政策概論
(一二〇一)政治學史
(一二〇二)啓學汎論
(一二〇三)獸醫應用定量分析論
(一二〇四)宗教新化史
(一二〇五)佛教哲學鮮論
(一二〇六)社會倫理學
(一二〇七)朝鮮物化論
(一二〇八)韓國地理學
(一二〇九)鑛業新論
(一二一〇)進國商業
(一二一一)清國商業
(一二一二)最西洋音樂史
(一二一三)近世美術史
(一二一四)日本通天人文學
(一二一五)高等類學
(一二一六)西洋音樂史
(一二一七)日近世美術史
(一二一八)普通天人文學
(一二一九)高等類學
(一二二〇)西洋音樂史
(一二二一)日本產文明史
(一二二二)露支侵略提要史
(一二二三)最近國際交換史
(一二二四)政治地理學
(一二二五)現代露西亞
(一二二六)金融論
(一二二七)稻作改良論
(一二二八)工業政策論
(一二二九)新撰應用重農學
(一二三〇)植物病理學
(一二三一)世界殖民史
(一二三二)日本帝國憲法學
(一二三三)比較儒神話學
(一二三四)地文學
(一二三五)日本佛教史
(一二三六)園藝各論
(一二三七)食物學
(一二三八)兒童心理學
(一二三九)世界美術史
(一二四〇)經濟政策概論
(一二四一)政治學史
(一二四二)啓學汎論
(一二四三)獸醫應用定量分析論
(一二四四)宗教新化史
(一二四五)佛教哲學鮮論
(一二四六)社會倫理學
(一二四七)朝鮮物化論
(一二四八)韓國地理學
(一二四九)鑛業新論
(一二五〇)進國商業
(一二五一)清國商業
(一二五二)最西洋音樂史
(一二五三)近世美術史
(一二五四)日本通天人文學
(一二五五)高等類學
(一二五六)西洋音樂史
(一二五七)日近世美術史
(一二五八)普通天人文學
(一二五九)高等類學
(一二六〇)西洋音樂史
(一二六一)日本產文明史
(一二六二)露支侵略提要史
(一二六三)最近國際交換史
(一二六四)政治地理學
(一二六五)現代露西亞
(一二六六)金融論
(一二六七)稻作改良論
(一二六八)工業政策論
(一二六九)新撰應用重農學
(一二七〇)植物病理學
(一二七一)世界殖民史
(一二七二)日本帝國

▲分類目錄▼

●（既刊ノ分）
○（續刊ノ分）

◎法科（政治、法律、經濟、）

- ●政治汎論　法學士永井惟直君著
- ●日本帝國憲法論　法學士田中次郎君著
- ●議會及政黨論　法學士菊地學而君著
- ●政治學　法學士南弘君譯
- ●政治史　法學士森山守次君著
- ●政治學　法學士津田欽一郎君著
- ●國家學　法學士南弘君著
- ●國際公法　法學士故士岸崎昌君中村孝君著
- ●日本支那制度　法學士三浦菊太郎君著
- ●支那法制史　法學士淺井虎夫君著
- ●國際私法　法學士北條元利君譯法學士熊谷直太郎君譯
- ●最近外交史　法學士原田豐次郎君著
- ●行政法汎論　法學士中村太郎君著
- ●行政裁判法各論　法學士小原新三君著
- ●行政法提要　法學士小林魁郎君著
- ●議院法　法學士工藤重義君著
- ●經濟汎論　法學士永井惟直君著
- ●經濟政策概論　法學士守屋源次郎君著
- ○經濟學史　法學士小林魁郎君著
- ○家事經濟學　法學士河津遐君著
- ○日本經濟史　法學士柳田國男君著
- ●財政學　法學士笹川潔君著
- ●最新統計學　法學士夏秋龜一君著
- ●法律汎論　法學士熊谷直太君著
- ●法理學　法學士丸山長渡君著
- ●民法釋義　法學士上田豐君著
- ●民法債權編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- ●民法物權編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- ●民法親族編釋義　法學士丸尾昌雄君著
- ●民事訴訟法釋義　法學士梶原仲治君著
- ●刑事訴訟法　法學士溝淵孝雄君著
- ●新刑法論　法學士島田鐵吉君著
- ○英米法　法學士永井亨君著
- ○獨逸通　法學士宮內國太郎君著
- ●保險論　法學士奧村英夫君著
- ●貿易原理　法學士辻野坂吉安次郎君編
- ○運送法　法學士菅原大太郎君著
- ○世界產業制度論　法學士相良維男君著
- ○社會政策　法學士小野儀一君著
- ○殖民政策　法學士兒玉秀雄君著

◎商科

- ●金融論　法學士佐々木雄二郎君著
- ●商法汎論　法學士添田敬一郎君著
- ●商業經濟學　法學士清水泰吉君著
- ●銀行新論（附外國爲替）　法學士野口弘毅君著
- ●稅關及倉庫論　法學士岸崎昌君著
- ●船舶論　法學士赤松梅吉君著

◎文科（歷史、文學、哲學、美術、宗教、教育、）

- ○史學　文學士阪本健一君著
- ○日本歷史　文學士木寺柳次郎君著
- ○東洋歷史　文學士幸田成友君著
- ●西洋歷史　文學士吉國藤吉君著
- ●朝鮮歷史　文學士久保天隨君著
- ●北米合衆國史　法學士山本信博君著
- ●露國侵略史　法學士須崎芳三郎君著
- ●現代露西亞　法學士須崎芳三郎君著
- ●世界文明史　文學博士高山林次郎君著
- ●支那文明史　文學士大町芳衛君著
- ●日本文明史　文學士白河次郎君著國府種德君著
- ●世界文明史　文學士阪本健一君著
- ●日本風俗史　法學士山內正瞭君著
- ●殖民文明史　文學士常盤大定君著
- ●印度文明史　文學士齋藤信策君著
- ●近世儒學史　文學士久保天隨君著
- ●日本儒學史　文學士久保天隨君著
- ○近世儒學史　文學士大町桂月君著
- ○日本文章史　文學士林森太郎君著
- ○日本文學史　文學士笹川種郎君著
- ○支那文學史　文學士中村鄧次郎君著
- ●獨逸文學史　文學士栗原基君編藤澤周次郎君編
- ○英國文學史　文學士有馬祐政君譯
- ○逸那文學史　文學士太田善男君編
- ●世界文學史　法學士橋本忠夫君著
- ●藝術概說　文學士森田米松君著
- ●文學小史　文學士小林魁郎君著
- ○歐洲文學史　文學士須崎芳三郎君著

21/6/40

言語學（上下）文學博士金澤庄三郎君譯 後藤朝太郎君著
○國語學史 文學士長恒連君著
解說批評 日本文典（上下）文學士岡田正美君著
邦語英文典 文學士畔柳都太郎君著
邦語獨逸文典 文學士青木昌吉君著
邦語獨逸文章論 文學士青木昌吉君著
邦語佛蘭西文典（上下）文學士松井知時君著
日本口語文典 文學士鈴木暢幸君著
修辭學汎論 文學士武島又次郎君著
哲學正純 文學博士井上圓了君著
○處世哲學 文學士杉谷泰山君譯
西洋哲學史 文學博士蟹江義丸君著
最新西洋哲學史 文學士岡島誘君著
支那哲學史 文學士中內義一君著
宗教哲學汎論 文學博士姉崎正治君著
佛教哲學 文學士石原即聞君著
近世美學 文學博士高山林次郎君著
世界美術史（上下）文學士小川銀次郎君著

近世美術史（上下）文學士小川銀次郎君著
西洋音樂史 文學士石倉小三郎君著
論理學 文學博士高山林次郎君著
社會學 文學士畔柳都太郎君著
比較神話學 文學士青木昌吉君著
比較宗教學 文學士高木敏雄君著
進化論 文學博士南條文雄君譯
宗教進化論 文學士十時彌君著
倫理學 文學士十時彌君著
東洋倫理學史 文學博士井上哲次郎君閱 文學士木村鷹太郎君著
社會倫理學 文學士德谷豐之助君著
心理學 文學士速水滉君著
○社會心理學 文學士小林郁君著
兒童心理學 文學博士松本孝次郎君著
近世心理學 文學士德谷豐之助君編
世界宗教制度論 法學士工藤重義君著
日本佛教史 文學士石原即聞君著
世界宗教史 文學士加藤玄智君著
教育學 文學士熊谷五郎君著

東洋四洋教育史 文學士中野禮四郎君著
佛教倫理學 文學士蜷川龍夫君著
最新教育學 文學士中村寅松君著
教育原理學 ドクトル尺秀三郎君著
○視聽覺音學發音科 文學士遠藤隆吉君著

◎理科
有機化學 理學士龜高德平君著
無機化學 理學士眞島利行君著
衛生化學 仙臺醫學專門學校教授 須田勝三郎君著
普通物理學（上下）理學士福井政一君編
最新電氣學 理學士萩原拳吉君著
○電氣化學 理學士萩原拳吉君著
近世氣象學 理學士岡田武松君著
高等天文學 理學士一戶直藏君著
應用定量分析 仙臺醫學專門學校教授 須田勝三郎君著
植物學新論 理學士飯塚啓君著
新撰動物學（上下）理學士飯塚啓君著
動物發生學 理學士會田龍雄君著
鑛物學 理學士大築佛一郎君著 理學士八谷彰一君著

新撰算術 理學博士高木貞治君著
新撰代數學 理學博士高木貞治君著
新撰幾何學 理學士林鶴一君著
近世幾何學 理學士藤田外次郎君著
新撰三角法 理學士松村定次郎君著
微分積分學 理學士松村定次郎君著
新撰解析幾何學 理學士松村定次郎君著
萬國地理學 理學士佐藤傳藏君著
日本新地理學 理學士佐藤傳藏君著
○政治地理學 法學士山本信博君著
商工地理學 文學士大西久龍君編 法學士永井惟直君著
星發見史 理學士須藤傳治郎君著
地質學 理學士吉田弟彥君著
地震學 理學士佐藤傳藏君著
○日本文學 理學博士大森房次郎君著
○測量學 理學士蘆野敬三郎君著
人類學 理學博士坪井正五郎君著
普通人類學 理學博士坪井正五郎君閱 理學博士八木奘三郎君著

◎農科

農業、機械、園藝、家畜、畜産、森林、

- 農政學　農學士石坂橋樹君著
- 農業經濟論　農學士恩田鐵彌君著
- 土地改良學　農學博士横井時敬君著
- 植物病理學　農學博士上野英三郎君著
- 植物營養論　農學博士有働良夫君著
- 肥料學　農學士大森順造君著
- 黴菌學　農學士山田玄太郎君著
- 氣候及土壤論　理學士佐々木祐太郎君著
- ○農業植物學　農學博士大森順造君著
- 日用化學　農學士井上正賀君著
- 農藝化學　農學士井上正賀君著
- 栽培汎論　農學士田中節三郎君著
- 稻作改良各論　農學博士横井時敬君著
- 園藝通論　農學士高橋久四郎君著
- 園藝各論　農學士高橋久四郎君著
- 農產製造學　農學士楠瓜君著
- 食用器具學　農學士西村榮十郎君著
- 食用物蠶及製絲論　農學士井上正賀君著
- 養蠶及製絲論　農學士井上正賀君著
- 畜產汎論　農學士高見長恒君著
- 畜產各論　農學士田口晉吉君著
- 家禽學　農學士月田藤三郎君著
- 水產學　農學士塚本道造君著
- ○乳業學　農學士井上正賀君著
- 獸醫學汎論　獸醫學士津野慶三郎君著
- 獸醫學各論　獸醫學士小倉鉀太郎君著
- 森林學　林學士奥田貞衛君著
- 森林學　林學博士本多靜六君著
- 提要林學　林學士新島善直君著
- 森林造林學　理學博士佐々木忠二郎君著
- 昆蟲保護學　工學士藤井光藏君著
- 分析化學　工學士內藤游君著
- 應用化學　工學士蜂屋貞興君著
- 應用機械學　工學士重見道之君著
- 新撰應用重學　理學士刈谷他人次郎君著
- 工業政策學　法學士崔田隆次郎君著

73
3

78
3

084684-000-7

78-3

英国文学史

栗原 基
藤沢 周次／編

M40
DBA-0007